

横浜開港資料館所蔵
木村喜毅関係古写真資料の調査と研究

東京大学史料編纂所 古写真研究プロジェクト 編

東京大学史料編纂所研究成果報告2024-7

木村喜毅関係古写真資料の調査と研究

2025年3月31日

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター古写真研究プロジェクト
JSPS 科研費・基盤研究(B)「幕末明治期古写真の調査とその解析・復元・保全を総合的に捉える写真史科学の構築」(23K25351)

印刷 ヨンダ印刷株式会社

横浜開港資料館所蔵

木村喜毅関係古写真資料の調査と研究

東京大学史料編纂所 古写真研究プロジェクト 編

目次

はじめに	3
凡例	4

解説編

木村喜毅の関係資料と館蔵幕末期古写真について 吉崎雅規	6
最初期のコロジオン湿板法による木村喜毅関係古写真 - 中浜(ジョン)万次郎と横山松三郎のアンプロタイプを中心にして - 谷昭佳	10

図版編

ガラス板写真	21	紙焼き写真	29
アルバム 1 (青表紙)	41	アルバム 2 (赤表紙)	53
アルバム 3 (黒表紙大型)	76	アルバム 4 (黒表紙小型)	109

木村喜毅関係古写真資料目録

140

コラム

木村喜毅関係古写真資料の撮影仕様について 高山さやか	160
木村喜毅関係古写真資料調査の概要と目録作成について 桑田恵里	162

はじめに

本報告書は、横浜開港資料館所蔵の木村喜毅（芥舟）関係古写真を対象とした調査・研究の成果を、『東京大学史料編纂所研究成果報告 2024-7 木村喜毅関係古写真資料の調査と研究』として刊行するものです。

2022年度より、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センターの古写真研究プロジェクトでは、幕臣で軍艦奉行などを務めた木村喜毅（芥舟）と、その嗣子で維新後に海軍軍人となった浩吉に関する資料（木村家旧蔵「木村芥舟・木村浩吉資料」）に含まれる古写真群について、所蔵者である横浜開港資料館のご理解とご協力を賜わり、同館と連携しながら調査・研究を進めてきました。そして、2023年度からは、JSPS 科研費：基盤研究（B）「幕末明治期古写真の調査とその解析・復元・保全を総合的に捉える写真史科学の構築」（研究課題／領域番号：23K25351）も調査・研究に加わりました。

木村喜毅（芥舟）関係の古写真群は、すでに1988年3月刊行の横浜開港資料館編『木村芥舟とその資料―旧幕臣の記録』（横浜開港資料普及協会）によって紹介され、同書には目録も掲載されております。

今回の調査では、ガラス板写真、紙焼き写真、写真アルバムといった様々な形態の古写真について、あらためて全点のデジタル撮影を実施し、これらの写真画像を掲載した詳細目録を作成いたしました。この詳細目録では、横浜開港資料館編『木村芥舟とその資料』所収目録の記載内容を基本的には踏襲しつつも、明らかな誤りについては適宜訂正し、新たに判明した事項を追記する方針をとりました。

本報告書には、木村喜毅（芥舟）関係古写真の画像付き詳細目録と、古写真群全体や個別の写真を対象とした解説・論考を収載いたしました。本報告書が、今後の木村喜毅（芥舟）関係古写真を対象とした研究の進展に寄与することを願っております。

なお、今回の調査・研究にあたっては、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 横浜開港資料館主任調査研究員の吉崎雅規氏にたいへんお世話になりました。また、吉崎氏には、「木村喜毅の関係資料と館蔵幕末期古写真について」と題する論考を本報告書にご寄稿いただきました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

2025年3月

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター
古写真研究プロジェクト代表者

箱石 大

JSPS 科研費 23K25351 研究代表者

谷 昭佳

凡例

- 資料の分類は、所蔵館の現秩序に従いガラス板写真・紙焼き写真・アルバム 1・アルバム 2・アルバム 3・アルバム 4 とした。
- ID 番号は、所蔵館の現秩序に従い一点ごとの通し番号を本プロジェクトによって新たに付与した。画像資料のみに付与し、文書資料およびアルバム本体には付与していない。
- 資料名は、昭和 63（1988）年横浜開港資料館発行『木村芥舟とその資料―旧幕臣の記録』内目録と、原資料に書かれたメモ書き・キャプションを基に、本プロジェクトによって新たに付与した。人物名は原則として実名での記載とし、複数名が写された写真は向かって左から人物名を列記した。

図版について

- すべての画像の縮尺は統一していない。
- ゼラチン乾板は、内容が判然とするよう、透過光撮影画像を階調・左右ともに反転したものを掲載した。
- 裏書など各種書き込みのある資料は、目録に採録されているもののみ画像を掲載した。
- 台紙から写真館名が判明する資料は、その裏面画像を掲載した。
- アルバム 2（赤表紙）・アルバム 4（黒小型）は、本報告書のノドをアルバムのノドと見立て、アルバム（右綴じ）の見開き状態を再現できるようにレイアウトした。
- アルバム 3（黒大型）は縦型のアルバムであるため、本報告書を 90 度回転させた状態で、1 頁ごとに見開き状態を再現できるようにレイアウトした
- 複数の写真が同頁に貼り込まれている場合は、ID 番号と資料名を記したキャプションを、資料上のレイアウトに沿った順番に可能な限り並び替えている。

目録について

- 内寸および外寸の項目は、台紙に貼付された写真は台紙サイズを外寸、印画紙サイズを内寸として記載した。一枚ものの写真およびアルバムに貼付された写真は、印画紙サイズを外寸、印画紙に余白がある場合のみ内寸としてイメージサイズを記載した。
- 各種書き込み情報は、目録の利用上有用と判断されるものを備考欄へ記載した。
- 年代欄への記載は、資料への書き込み情報に依った。
- アルバム 2（赤表紙）は貼り紙の情報のみ備考欄に記載した。

本報告書に掲載した図版の無断転載を禁ずる。

解説編

木村喜毅の関係資料と館蔵幕末期古写真について

吉崎 雅規

横浜開港資料館主任調査研究員

はじめに

横浜開港資料館は幕末維新时期に制作された古写真を多く所蔵している。そのうち白眉ともいえる資料が「木村芥舟・木村浩吉資料」に含まれる古写真群である。とりわけ、ガラス板写真は資料的価値が高い。旧蔵者の木村喜毅（芥舟、1830～1901）は、万延元年遣米使節に随行して太平洋を横断した咸臨丸の司令官として知られ、さらには軍艦奉行として幕末期の幕府海軍の創設にも大きく貢献した人物である。

私が横浜開港資料館に調査研究員として異動してきたのは2018年のことで、担当資料群のひとつとして古写真を受け持つことになった。とくにみずからの専門が幕末維新史（日本史学）であることから、館蔵の幕末から明治初年の古写真について整理と調査研究をあらためておこなうことを企図した。当館の幕末維新时期古写真といえば、フェリーチェ・ベアト撮影のものが有名であるが、それ以外にも貴重な古写真を少なからず所蔵している。これまで当館の展示や刊行物、あるいは元当館調査研究員の斎藤多喜夫氏の著作等によって部分的に紹介がなされているが、ここ20年ほどの古写真研究の進展もふまえると、外部の専門研究者によるさらなる調査・分析が可能ではないかと考えた。

近年、東京大学史料編纂所画像史料解析センターは、幕末維新时期の古写真、ことにガラス板写真の調査研究を精力的におこなっており、横浜に関わる部分でも新たな知見が生み出されている。そこで2022年、同センターに調査について相談をおこない、当館と連携するかたちで「木村芥舟・木村浩吉資料」に含まれる古写真の撮影と分析をおこなっていたことについて快諾を得た。これが今回の調査の発端である。

木村喜毅の履歴

まず木村喜毅の履歴について、幕末期を中心に簡単に紹介しておきたい¹。なお、木村の伝記としては土居良三氏の『軍艦奉行木村撰津守』²があり、幕末期の海軍の立役者としての側面については、近年、金澤裕之氏が触れている³。

喜毅は天保元(1830年)2月5日、浜御殿奉行木村喜彦の長男として、浜御殿(現浜離宮恩賜庭園)内の役宅に生まれた。木村家は4代目から浜御殿奉行を世襲していた家筋で、家禄は200俵である。喜毅は同13(1842)年浜御殿奉行見習を命じられるとともに、昌平黌に学んでいる。昌平黌では林復斎に師事し、堀利熙・岩瀬忠震などの「諸先輩」と切磋琢磨したという。嘉永2年(1849)、旗本長谷川鉦五郎の娘弥重と結婚。安政2(1855)年9月西丸目付に抜擢され、さらに翌3年2月に本丸目付となった。数え27歳である。翌4年4月に長崎に赴任。長崎海軍伝習の監督をおこなった。安政5年には咸臨丸に搭乗し、五島・対馬・鹿児島へ練習航海を実施している。

安政6年2月、海軍伝習の中止にともなって帰府を命じられ、6月25日に江戸に帰着、芝新銭座に居住した。横浜開港の直後である。同月外国御用立合と神奈川開港御用を命じられ、9月に軍艦奉行並となった。幕府はこの頃アメリカへ使節の派遣を検討していたが、正使新見正興らが乗るアメリカ船とは別に、咸臨丸による米国渡航もくわだてていた。喜毅は11月24日に米国渡航の命令を受け同28日に軍艦奉行に昇進、撰津守に叙任された。翌年1月12日、喜毅は艦の司令官として咸臨丸に搭乗して品川沖を出帆。同19日に浦賀を出航して2月26日にサンフランシスコに到着した。正使一行は3月9日にサンフランシスコに到着し、木村も新見らと再会している。木村はニューヨークに向かった正使たちとは行動をともにせず、閏3月19日、咸臨丸で帰途につき、5月5日に浦賀に帰着した。

文久元(1861)年5月、喜毅は海陸御備向ならびに軍制取調を命じられる。7月に長男浩吉が誕生した。文久3年、

木村は海軍増強が急務であることを建白したが容れられず、9月に軍艦奉行を辞したが、元治元（1864）年4月9日、開成所頭取を命じられた。開成所は幕府の洋学研究機関である。12月に目付再任。兵庫頭と改称した。慶応元（1865）年4月、長州戦争のため將軍家茂は大坂に進発するが喜毅もこれに随行し、閏5月25日大坂城に入った。11月、老中との意見相違のため罷免され12月江戸に戻った。翌慶応2年7月、軍艦奉行並に再任。9月に京都に到着し、勝海舟とともに海軍振興の策を建白している。慶応3年4月江戸にもどり、5月にはオランダから購入した最新鋭艦開陽丸を横浜で受領した。6月に軍艦奉行に再昇任。翌慶応4年2月海軍所頭取に任ぜられたが、7月に隠居して家督を浩吉に譲った。喜毅は数え39である。

維新後は新政府に出仕せず、長い隠居生活を送った。勝海舟や福沢諭吉とは交友があり、勝の『海軍歴史』の編纂にも積極的に協力している。明治34（1901）年12月9日、麴町の土手三番町の自宅で死去した。数え72であった。

「木村芥舟・木村浩吉資料」と関連資料

あらためて「木村芥舟・木村浩吉資料」について紹介しよう。同資料は幕臣木村喜毅とその嗣子海軍少将木村浩吉（1861～1940）に関わる資料群で、浩吉の子孫の家に伝来した。昭和63（1988）年に横浜開港資料館で開催された「サムライ太平洋を渡る」展がきっかけとなり、喜毅の令孫木村昌之氏より、平成元（1989）年から平成7（1995）年にかけて数回に分けて当館に寄託された（総点数378点）。さらに平成29（2017）年、昌之氏のご子息木村喜昭・忠昭両氏のご厚意により、絵画資料2点を除きすべての資料が当館に寄贈されることになった。

資料群は、I軸 II 木村芥舟文書 III 木村浩吉文書 IV 扁額 V 勲記・勲章 VI 刊行物・印刷物 VII 石版画類 VIII ガラス板写真 IX 写真（プリント） X 写真アルバム XI その他 に分類される。本資料群のリストとその一部の内容紹介は『木村芥舟とその資料』でなされており、資料群の全体像を把握することができる。また、『咸臨丸太平洋を渡る』⁴は咸臨丸による米国訪問を扱った展覧会図録で、「木村芥舟・木村浩吉資料」のほか多くの関連資料が紹介されている。

写真撮影の背景を知るうえで文書資料をあわせみることが重要になるが、「木村芥舟文書」（39点）は基本的に出仕命令書の類が多くを占め、「木村浩吉文書」も17点ほどの分量で、ふたりの履歴を知るうえで十全なものと言いはれない。しかしながら、芥舟文書には「浜ノ木村家7代自叙伝（別名貽孫伝記）」（図1）という回想記があり、⁵また浩吉文書には明治36（1903）年から大正4（1915）年の日記6冊が残されており、不十分ながらも本調査研究を補うものとなりうる。

さらに、木村喜毅に関わる資料は慶應義塾大学図書館にも所蔵があり、喜毅の日記と喜毅宛ての書簡集（『旧雨書簡』）が含まれる。前者については『木村撰津守喜毅日記』として刊行されており、安政6（1859）年9月9日から慶応4（1868）年7月29日までの喜毅の動向を追うことができる（欠あり）。また、「旧雨書簡」の件名目録は『木村芥舟とその資料』⁷に採られているが、そのうち幕臣岩瀬忠震から木村に宛てられた書簡については『近代日本研究』5巻が、岩瀬発信書簡以外については当館紀要11号が翻刻をおこなっている。⁸これらの歴史資料が、木村の履歴および写真撮影の背景を考えるうえで重要かつ基本的な資料と言えよう。

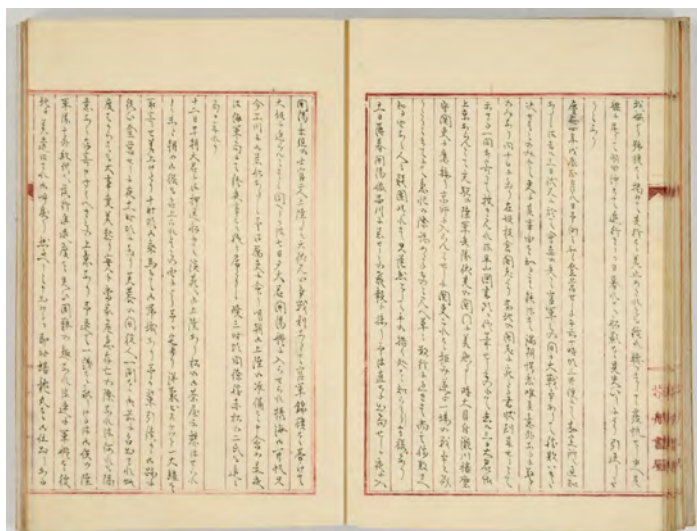


図1

「浜ノ木村家7代自叙伝」

横浜開港資料館蔵（木村芥舟・木村浩吉資料）

横浜開港資料館の幕末期古写真コレクション

さて、本節では当館の所蔵・寄託となっている幕末期の古写真について簡潔に紹介をおこない、木村芥舟の古写真群について当館古写真コレクションのなかでの位置づけを考えたい。

当館では前述したように、フェリーチェ・ベアト (Felice Beato) の写真を多く所蔵しており、これまで、『F. ベアト幕末日本写真集』、『F. ベアト写真集2』¹⁰という2冊の写真集を刊行している。ベアトの写真アルバムについては当館の開館(1981年)以前に横浜市に寄贈されたものが多くを占め、その数量は2006年時点で351枚におよんだ。そのうち重複をのぞいた236点が『F. ベアト写真集1』に記載されている(図2)。さらに、『F. ベアト写真集2』には、その後当館が入手したベアト写真が収められている。

くわえて昨年(2024年)、ロンドンのJapan Society(日本協会)が所蔵していた海軍中尉ダグラス(A. Douglas)旧蔵のベアトアルバムが、これを入手した山本博士氏によって当館に寄託されることになった。アルバムはイギリス艦船エンカウンター号(HMS. Encounter)に乗り組んでいたダグラスが1892年に同協会に寄贈したものである。アルバムには“No.10 F Beato”とのエディションナンバーと署名があり、ベアトが日本における撮影活動の初期に制作したアルバムとして資料的価値が高いものである。

当館はベアト以外のカメラマンによる幕末期古写真も所蔵・保管する。そのうち最古級の写真群は、安政6(1859)年来日したスイス生まれのカメラマン、ピエール・ロシエ(Pierre Joseph Rossier)撮影のステレオ写真である。ネグレッティ & ザンブラ社が発行した“Views in Japan”シリーズに含まれるもので、「幕府役人と江戸の英国公使館員ガワー(江戸にて)」(Ac1-00-183)、「神奈川湊」(Ac1-00-256)、「横浜村」(Ac1-00-565)、「野毛の役宅」(Ac1-00-566、図3)の4枚を所蔵する。これらは開港前後の横浜の原風景を考えるうえでも貴重な歴史資料となっている。

ジョン・ウィルソン(John Wilson)はニューヨーク州オルバニー出身のアメリカ人カメラマンで、1860年10月から1861年1月までのあいだ、プロイセン使節団に日本で雇用された人物である。その撮影写真の現存例は珍しいが、当館では「成仏寺」(Ac1-00-567)、「本覚寺」(Ac1-00-568)という2枚のステレオ写真を所蔵する。前者はヘボンが宿所とし、後者はアメリカ領事館となった神奈川宿の寺院である。また、文久2(1862)年来日したイギリス人カメラマン、ウィリアム・ソンダーズ(William Thomas Saunders)の作品としては、横浜の関門のひとつを撮影した「〔谷戸橋〕」(Ac1-00-74)がある。

慶応3(1867)年に日本で撮影活動をおこなったアメリカ人カメラマン、チャールズ・リアンダー・ウィード(Charles Leander Weed)の作品も所蔵・保管する。「イギリス横浜駐屯軍幕末写真帳」(Ac1-272)は横浜に駐屯したイギリス軍士官が編んだアルバムだが、そのなかには13枚のウィード撮影写真(ハーフ・ステレオサイズ)の貼付がある(図4)。また、2023年に開催した特別展「幻の写真家 チャールズ・ウィード」¹²を契機として、同展に出陳された岡山洋二氏が所蔵する31枚のウィード写真が当館に寄託されることになった。岡山氏所蔵の写真はマンモス・プレートカメラで撮影した原板から焼き付けられたものと推定されている。

このように当館では、横浜開港の安政6(1859)年から江戸幕府が終焉を迎えた慶応3(1867)年にいたるまでの幕末各時期の古写真を、横浜を撮影したものを中心にバランス良く所蔵・保管している¹³。これらは購入等の当館の収集活動によってコレクションが形成されたもので、横浜に関わる歴史を説明するため、展示等当館の普及事業で活用がなされてきた。

一方、木村家の古写真資料は伝世品であり、資料の伝来経緯が明確であるところに第一の特徴がある。また、一部の古写真はガラス湿板の形態で伝存しており、高精細撮影によってより多くの情報を引き出すことが可能となる。くわえて、前述したように資料の旧蔵者は幕末維新期に多大な功績を残した著名な幕府官僚であることから、資料群全体への注目度も高い。当館の幕末期古写真コレクションのなかで、木村の写真群は他とは性格を異にする独特の位置を占めており、資料に関する新たな知見が報告された場合、そのインパクトはより大きいものとなるだろう。

当館は開港期以降の近代史について、横浜を中心に対外関係にも留意して調査研究をおこなっている。くわえて、国内有数の古写真コレクションを所蔵する施設として、古写真の収集と調査も継続している。木村家の古写真は、ふたつの調査研究を進めるうえで重要な位置を占める資料であり、それが今回連携調査を企図した所以でもある。研究成果がひろく一般に活用されることを期待したい。



図2
「〔新遊歩道の不動坂より根岸湾を望む〕」
ベアト撮影 横浜開港資料館蔵



図3
「野毛の役宅」
ロシエ撮影 横浜開港資料館蔵



図4
「浅間神社から見た元町と新埋立居留地」
ウィード撮影 横浜開港資料館蔵

後注

- 1 主に横浜開港資料館編『木村芥舟とその資料—旧幕臣の記録』(横浜開港資料普及協会、1988年)に依った。
- 2 土居良三『軍艦奉行木村撰津守—近代海軍誕生の陰の立役者』(中央公論社、1994年)
- 3 金澤裕之『海軍草創期のリーダーたち—木村喜毅、榎本武揚、川村純義』(伊藤之雄編著『維新の政治変革と思想 1862～1895』ミネルヴァ書房、2022年)
- 4 横浜開港資料館編『咸臨丸太平洋を渡る—遣米使節140年—』(横浜開港資料館、2000年)
- 5 『木村芥舟とその資料』に「木村芥舟翁履歴略記」と題して活字化されている。ただし、底本は雑誌『江戸』7～13号(大正4～5年)に掲載されたもの。
- 6 慶応義塾図書館編『木村撰津守喜毅日記』(塙書房、1977年)
- 7 河北展生他「史料紹介 木村喜毅(芥舟)宛岩瀬忠震書簡」(『近代日本研究』(慶應義塾福澤研究センター)5巻、1988年)
- 8 柴田光彦監修「幕臣木村喜毅あて書簡—「旧雨手簡」から—」(『横浜開港資料館紀要』第11号、1993年)
- 9 横浜開港資料館・(財)横浜開港資料普及協会編『F.ベアト幕末日本写真集』((財)横浜開港資料普及協会、1987年)。のちに一部加筆訂正して横浜開港資料館編『F.ベアト写真集1—幕末日本の風景と人びと』(明石書店、2006年)
- 10 横浜開港資料館編『F.ベアト写真集2—外国人カメラマンが撮った幕末日本』(明石書店、2006年)
- 11 ベアト写真アルバムについては、斎藤多喜夫「『幕末日本の風景と人びと』の刊行にあたって」(横浜開港資料館編『F.ベアト写真集1 幕末日本の風景と人びと』明石書店、2006年)が詳しい。
- 12 その内容は横浜開港資料館編『幻の写真家 チャールズ・ウィード—知られざる幕末日本の風景』(公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、2023年)を参照されたい。
- 13 なお、本文では触れる余裕がないが、幕末期に引き続き明治初年撮影の古写真については、横浜都市発展記念館・横浜開港資料館編『文明開化期の横浜・東京—古写真で見る風景』(有隣堂、2007年)を参照されたい。

最初期のコロジオン湿板法による木村喜毅関係古写真

—中浜（ジョン）万次郎と横山松三郎のアンプロタイプを中心にして—

谷 昭佳

東京大学史料編纂所

はじめに

横浜開港資料館所蔵の木村喜毅（芥舟）関係古写真には、本邦における実質的な意味での最初の写真術、コロジオン湿板法（Wet collodion process）を応用して制作された“アンプロタイプ”と通称されるポジ画像（陽画）のガラス板写真が19点（ID001-019、p.22-27 参照）所在している。これらを熟覧調査したのち、近年の他の写真コレクション調査による成果と比較検証したところ、これまで語られていた制作年代や制作者を見直すことができた。

なかでも注目されるのは、木村喜毅や喜毅の妻子が写された9点（ID003-009、ID012-013）のポジ画像のガラス板写真である。それらは技術的内容から、万延元（1860）年に咸臨丸で再渡米した中浜（ジョン）万次郎がサンフランシスコで習得したコロジオン湿板法と、元治元（1864）年頃に江戸で研鑽した箱館の横山松三郎が国内で習得したコロジオン湿板法に分けられる。つまり、ことなる技術的ルーツをもつアンプロタイプである。幕末の日本社会に写真の技術と文化が伝播していく過程を万次郎と松三郎によって制作された仕様に差異のあるアンプロタイプから辿ることができる、貴重な最初期のガラス板写真コレクションと位置づけられる。

本報告では、木村喜毅関係古写真のガラス板写真コレクションが形成された背景について、制作者によって異なる技術的特徴、喜毅の動静と人脈などから解き明かしてみたい。

1. 中浜万次郎撮影と推定されるガラス板写真

（1）「木村喜毅」と「木村弥重・利子」の技術的特徴

木村喜毅関係古写真のうち、日本で制作された最古のガラス板写真は、万延元年頃の撮影と考えられる夏用の袴姿の「木村喜毅」（ID012）と夏着物の妻弥重と長女利子「木村弥重・利子」（ID013）である。

この2点は、これまで慶応4（1864）年頃の撮影とされ、制作者は不詳とされてきたアンプロタイプである。しかし、その根拠は明確には示されていない。海外渡航歴のない弥重・利子の年格好、また写真が収められている西洋式ケースを慶応年間に輸入されたものとする憶測などから、慶応4年説が生まれたようであるが、その真相は不明である。

では一方で、何故、新たに制作年を万延元年頃と絞り込むことができたのか、これについて写真の技術的な側面から眺めてみたい。

まず「木村喜毅」（ID012）を熟覧したところ、外側から西洋式の革張りのケースのなかに、金属フレーム・カバーガラス・金属マット・ガラス板写真の順番で収まっている構造が確認できた（写真1）。

つぎに劣化状況などを確認するため、一時的にケースから外して部分的な詳細調査を行ったところ、ガラス板写真の裏面には黒い樹脂が薄く塗布されていることが判明した（写真2）。

さらに裏面の隅に残っている、僅かにガラス面が露出している箇所（黒い樹脂が塗られていない部分）を観察した（写真3）。するとガラス越しの反対側に乳白色に近い薄い色のコロジオンの画像層が確認できた。つまり、画像層と黒い樹脂層はガラス板の表裏に分かれて存在しており、ケースには画像層を上にした状態（画像層→ガラス支持体→黒い樹脂）で配置されていた（図1-2）。またカバーガラス・金属マット・ガラス板写真は重ねられ、ひと固まりとなるように四辺を紙片で留めてある。最終的に紙片の外周部を金属フレームで覆ったうえで革張りのケース内に落とし込まれている（図1-1）。

同様に「木村弥重・利子」（ID013）について詳細に観察したところ、全体の構造および画像層を上にしてみせるガラス



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4

板写真の仕様ともまったく同じであった（写真 4）。またケースから外して観察するとガラス板写真の裏面には黒い樹脂が薄く塗布されており、カバーガラス・金属マット・ガラス板写真をひとつにまとめている紙片も確認できた。さらにガラス板写真の隅からはガラス越しに薄いコロジオン層が確認できた。

通常このように画像層を上にした状態でガラス板写真を見ると、被写体は鏡に映ったのと同じ左右反転した鏡像になってしまうはずである。しかし、「木村喜毅」と「木村弥重・利子」の画像をみると着物の襟は、正しく向かって右前となっている。さらに「木村喜毅」の画像細部をみていくと、刀を帯に結びつける下げ緒が内側から出ていることから、あらかじめ着物を左右反対に着たうえで刀を逆に差して撮影者とレンズ越しに対面した様子がしれる。

（2）他のコレクションとの比較

前述した画像層を上にしてポジ画像をみせるアンプロタイプは、幕末期に日本国内で制作されたガラス板写真としては希少な存在である。筆者が出所伝来の確かな古写真資料を国内約 60 箇所、海外約 50 箇所以上で実際に調査したなかで、この画像層を上にしてみせる「木村喜毅」（ID012）「木村弥重・利子」（ID013）と技術的な特徴が一致する日本製のアンプロタイプは 10 点程の出現にとどまる。

そうしたなかで、伊豆韮山の代官江川家に伝来する古写真コレクションにある、37 代目当主江川英敏（西洋式ケース入り）とその家臣団（ケース無し、カバーガラスあり）の 6 点（重要文化財、江川文庫所蔵）²は、技術的特徴が一致するまとまったコレクションといえる。これらは、包紙などから万延元年 7 月 16 日から文久元（1861）年 6 月頃に撮影制作された、画像層を上にしてみせるアンプロタイプである。その他、江川家家臣では手代の柏木忠敏（個人蔵）と長沢与四郎（伊豆の国市韮山郷土資料館寄託）のアンプロタイプもまた、同じ仕様で制作されており、最終的に西洋式ケースに収められている³。

江川家以外にも数点確認できている。文久元年 1 月 29 日に江戸で写真撮影したことを日録に「晴 写真いたし候事」と記している、土佐藩の吉田東洋（高知城歴史博物館所蔵）⁴のアンプロタイプ。また江川英敏が頭取を勤めた講武所の砲術師範を務めた山口直邦（小島資料館所蔵）⁵のアンプロタイプなどがある。これらも同様の西洋式ケース入りの同じ仕様（外側から革ケース・金属フレーム・カバーガラス・金属マット・ガラス板写真）であり、いずれも画像層を上にしてみせる仕様となっている。さらに裏側に塗布された黒い樹脂、各パーツをまとめて固定するために使用されている紙片、これらの素材も同様であることが調査から判明している。つまり、この僅か 10 点程のアンプロタイプにしか確認することができない⁶、画像層を上にしてみせる技術的特徴をもつガラス板写真と、そこに写された被写体の関連性を紐解くと、制作者（撮影者）の絞り込みにつながる手掛かりとなる。

(3) 中浜万次郎の写真活動

画像層を上にしたアンプロタイプが最も多く伝来する江川家関係の写真に関連した動静は、春から秋にかけて、江戸の芝新銭座にある江川邸に当主が滞在する間、江戸詰手代によって記される業務日誌的な記録である「御出府日記」（江川文庫所蔵）に記されている。

そこには、江川家の手附である中浜万次郎が咸臨丸でアメリカから帰国した2ヶ月後の万延元年7月17日、18日、29日に、同邸内で来客者を相手に盛んに写真撮影を行っていたことがみえる⁷。7月17日には、西洋砲術に詳しく講武所内のライバルともいえる下曾根金三郎ほか6名が写真撮影のために、江川邸の万次郎を訪ねてきたため、江川家が接遇している。翌18日には内藤のご隠居〔前高遠藩主の内藤駿河守（頼寧）〕が万次郎によって写真撮影されたとある。29日には、いよいよ江川家の上司ともいえる講武所のトップである頭取の松平仲以下数名が、万次郎に写真撮影を頼みに江川邸を訪れている。つまり、万次郎は他の日本人に先駆けてコロジオン湿板写真法を用いて実質的に活動した最初の日本人であり、その活動を後押しし写真による日本の近代化を推し進めたのが江川家であった。

江川家伝来品のうち包紙に「万延元年七月十六日、夕七ツ時写真シ奉ル事、小沢神様写真御尊像御一面、恵霜齋所持、江川太郎左衛門源英口（敏）敬奉所持、敬慎」と最も早い日付が記された、ガラス板写真（ケース無し、カバーガラスあり）は、この写真を所持していた若き当主江川英敏の後見役（仲人）と目される幕臣、小普請小沢太左衛門を写した可能性の高い写真（以下：小沢写真）である。包紙の日付は「御出府日記」にある万次郎による一連の撮影の前日だが、この写真についての記述はない。他の条に小沢の名前を散見できるが写真撮影に関する記述は無い、したがって撮影者が誰なのか史料からは不明である。だが、コントラストの高い鮮明な画像のこの小沢写真は、万次郎と江川家、また日本人によるコロジオン湿板法の受容を写真技術の視点から捉えるうえで極めて重要な一枚である。なぜならば小沢写真には、黒い樹脂を画像層の裏側のガラス面に直接塗布した下地と、画像層の直上に保護用のカバーガラスを被せた、この頃に横浜や江戸で一定数制作された他のコロジオン湿板法によるガラス板写真とは異なる特徴的な構造をもつ仕様となっているからだ。

万延元年頃に横浜で雑貨店を営むかわら写真撮影も行ってた、アメリカ人のオーリン・E・フリーマン（Orrin Erastas Freeman）が「安政七庚申年六月十五日」（1860.8.1）に撮影した、佐倉藩士の大築尚志などの肖像写真（沼津市明治史料館所蔵）⁸。またフリーマンから写真術を学び文久元年頃に江戸で活動した鶴飼玉川が撮影した、文久元年8月19日撮影の横井小楠などの肖像写真（熊本市横井小楠記念館所蔵）⁹。遣米使節団員の本班としてアメリカ各地を巡る途中で写真術を学ぶ機会があった佐賀藩医の川崎道民が帰国後に撮影した、文久元年5月15日撮影の大槻盤溪などの肖像写真（重要文化財、一関市博物館所蔵）¹⁰。彼らの手によるコロジオン湿板法によるポジ画像（陽画）としてみせるガラス板写真は、いずれも万次郎が制作した可能性の高いアンプロタイプとは異なり、画像層を下にしてガラス支持体越しに画像をみせる仕様（図2-2）となっていることが、筆者のガラス原板調査から判明している。つまり、黒い樹脂をガラス面に塗布する技法は、万延から文久年間の万次郎制作であることを示すアンプロタイプの特徴のひとつになっている。万次郎以外で黒い樹脂がガラス面に塗布されているものとしては、文久元年頃に藤堂藩上屋敷で堀江蹴次郎が上野彦馬を撮影したと伝えられるアンプロタイプ（日本大学芸術学部写真学科所蔵）が1点のみ存在する。この頃、藤堂藩

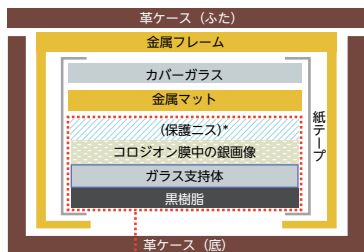


図 1-1 *紙テープ未分解のため保護ニスの存在は推定

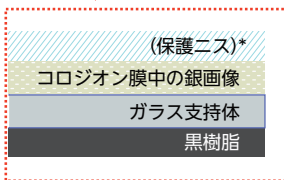


図 1-2

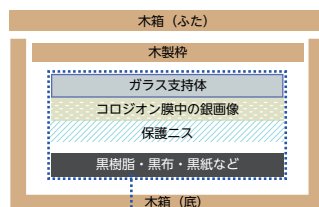


図 2-1

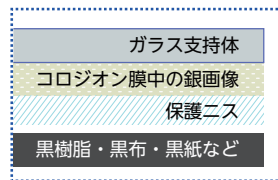


図 2-2

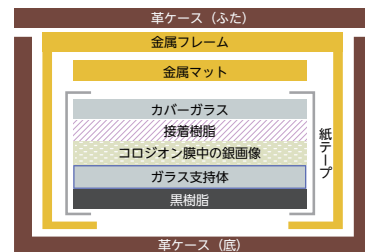


図 3

では洋学者らをまねいて撮影実験を繰り返していることから、このアンブロタイプは、万次郎と彦馬らの接触を示しているのかもしれない。

また、中浜家に伝来する文久2(1862)年7月に若くして亡くなった万次郎の妻「鉄」のガラス板写真(個人蔵)もまた同様の仕様であった。「鉄」のガラス面の四隅に残存する黒い樹脂は、レンズを通して向き合った万次郎と鉄のつながりを今に伝えている。小沢写真には撮影者を明示する史料がない。しかしこの黒い樹脂が塗布されたガラス面こそが、万次郎の手によるものであることを物語っているのではないだろうか。

(4) アンブロタイプ (ambrotype)

これまで述べてきたように中浜万次郎が制作したアンブロタイプ(不滅を意味するギリシャ語の Ambrotos に由来)と呼ばれる写真は、コロジオン湿板法を応用して制作する、鮮明な一枚のポジ画像のガラス板写真のことである。この写真製法を確立したアメリカ・ボストンのジェイムズ・アンブローズ・カッティング (James Ambrose Cutting、技法名に因んでアンソニーをアンブローズと改名)は、1854(嘉永7)年7月にアメリカで製法における3つの特許を取得している。カッティングの特許の概略は、はじめに①薄いコロジオン層の中のネガ銀画像をガラス板上に得ること、次に②画像層のない裏側のガラス面に黒褐色となる天然樹脂を塗布すること、最後に③画像層の上には保護のためのカバーガラスを被せて摩擦と空気から画像を守り永久に保つというものであった¹²。

幕末の日本で万次郎が制作した写真にみえるこの手法は、具体的にはどこで学んだものなのだろうか、その鍵となる写真がある。軍艦奉行木村喜毅の従者として万次郎らと共に咸臨丸で渡米した福沢諭吉が、サンフランシスコのウィリアム・シュー (William Shew) 写真館を訪れて撮影したアンブロタイプ3点(慶應義塾福沢研究センター所蔵)だ。

それぞれ金属マットに「Wm. SHEW, 113 MONTG' Y, St, SAN FRANCISCO」と刻印がされている。これら3点が修復のために近年一時的にケースから外された。この時の詳細な修復記録によると、万次郎撮影と考えられる小沢写真や江川英敏のガラス板写真と同じような黒茶色の樹脂(ニス)が、画像層のない裏側のガラス面に薄く塗布され、同じく全体的に細かい亀裂がある劣化状況が確認された。くわえて画像層を保護するためにガラス板写真に被せられているカバーガラスと金属マットの周囲を留めている茶色の紙片は、小沢写真や他の江川家伝来のガラス板写真と同様であることが明らかとなった。また3点のうち2点は、外側から西洋式の革ケース・金属フレーム・カバーガラス・金属マット・ガラス板写真(画像層を上)の順序でケースに収納されている。そうした構造や状態は、「木村喜毅」(ID012)「木村弥重・利子」(ID013)と同じである。また別に木村喜毅関係古写真にある金属マットにウィリアム・シューの写真店を示す刻印(写真5)がみえているアンブロタイプ「男性」(ID002、p.24参照)¹⁴もこれと同じ構造を持つ。これらの仕様は前述した最初にアメリカで取得された3つのアンブロタイプに関する特許のうちの①と②に準拠している。



写真5

残る1点の福沢写真は、画像層の上に直接にカバーガラスが密着して貼り付けられていた。これは3つのアンブロタイプに関する特許の①②③全てに準拠した方法によるものである(図3)。木村喜毅関係古写真にも同じ仕様のアンブロタイプがある。咸臨丸に乗船してアメリカに帰国したアメリカ測量艦フェニモア・クパー号の艦長ジョンブラックの「John Mercer Brooke」(ID001、p.24参照)は、この福沢写真と同様にガラス板写真の画像層の上に直接カバーガラスが重ねられた、特許の①②③全てに準拠しているアンブロタイプである。

万次郎がアメリカで習得した写真術は、ウィリアム・シューによるアンブロタイプの写真だったのではないだろうか。彼は当時のサンフランシスコでの第一人者であり、カッティングによる天然樹脂を塗布する技法を忠実に再現することができる技術を持った写真家であると自負し宣伝していた¹⁵。なおも検討の必要があるが、万次郎は限られた滞在時間に、サンフランシスコで写真材料の販売も手掛けていたシューの写真館で、彼が使用していたものと同じ薬品や器材類を購入し、実際の暗室作業や撮影手順を、他の遣米使節団メンバーの撮影なども利用して学んだ。そして日本に持ち帰り、シューの写真館が得意とした技法であるカッティングにより特許が取得されたアンブロタイプで肖像写真を制作したと考えるのが自然であろう。

よって、江川家伝来のアンブロタイプと同じ特徴をもつ「木村喜毅」と「木村弥重・利子」は、咸臨丸での航海で喜毅と生死を共にした万次郎が、帰国後に撮影したアメリカ仕込みのガラス板写真であると推定してよいであろう。

(5) 写真文化の伝播

中浜万次郎による写真撮影の史料としては、今のところ江川家の「御出府日記」にある万延元年7月17日が上限となる。下限は山内容堂の御用役を務めた寺村左膳道成の「寺村日記」（青山文庫所蔵）に記されている、文久2年11月2日の「今日中浜万次郎被召而写真被仰付候、左膳も式枚写ス、」となる。万延元年8月からの謹慎処分、文久元年末からの小笠原調査、文久年間には写真館や写真技術修得者が増えていくなかで、渡米時に購入してきた写真材料が尽きた時点で、万次郎は自然に写真撮影からは遠ざかったのではないだろうか。

さて、話を「木村喜毅」（ID012）と「木村弥重・利子」（ID013）の撮影年の絞り込みに戻そう。

2点の画像を拡大して確認してみると、弥重の眼には、カメラとその背後の障子が映り込んでいるように見える（写真6）。同様に喜毅の眼にも同じ光景が映り込んでいる（写真7）。夏用の袴姿の喜毅と夏用の着物姿の弥重・利子、この2点は同じ頃に同じ場所で撮影されたと考えると無理がない。想像をたくましくするならば、そこは喜毅が帰国した直後の家族が揃った万延元年の夏頃、木村家の住まいとも近い芝新銭座の万次郎が暮らす江川邸内ではなかっただろうか。

自身だけでなく家族らの姿を写真に残して愛でる、現代まで通じる写真の文化が中浜万次郎や福沢諭吉らとの関係性から喜毅にも伝わり影響をおよぼしたのかもしれない。「木村喜毅」と「木村弥重・利子」のアンプロタイプは、文章として記録されることもなく、また語られることさえない喜毅の家族に対する心の内をも写しているのであろうか。



写真6



写真7

2. 横山松三郎撮影と推定されるガラス板写真

(1) 異なるアンプロタイプ



写真8



写真9



写真10



写真11

一般的にコロジオン湿板法によるアンプロタイプを制作するためには、予め露光を抑えた撮影を行い、現像後の画像層が全体的に薄い白色・灰色系の色階調をもった画像色となるように薬品を調製する必要がある。これにより、画像層を透過光で見るとネガ画像（ID010、写真8）に見えるが、背景を黒くして画像層を反射光で観察するとポジ画像（ID010、写真9）に見えるガラス板写真となる。

この二面性を利用してポジ画像を得る方法は、1850年代に様々な改良が世界各地の写真家により行われた。そのひとつがアメリカで万次郎が習得したカッティングによるアンプロタイプである。当初フランスではコロジオン湿板法により制作されたガラス板写真のネガティブに対して、両面性をもつ陽画という意味でアンフィポジティブ（amphipositive）と呼んでいた¹⁶。一方イギリスでは紙焼き写真を得るための基となるコロジオンネガとは区別して、コロジオンポジティブ（collodion positive）とも称されている。しかし現在の、とりわけ日本においては、コロジオン湿板法によるポジ画像のガラス板写真を細かく分類することなく、あまねくアンプロタイプと呼んでいる。

また日本では、ガラス板写真を木箱に収納する独自のスタイルをもつアンプロタイプが多く現存する（p.24-29 参照）。その要因のひとつは、温湿度の変化の大きい日本にあって、美術品の保存装備として木箱が古くから用いられていたこと

が影響しているのではないだろうか。木箱を利用したアンブロタイプの多くは、箱底に黒布や黒紙を敷く、あるいは箱底を黒く塗ることにより、ネガ画像からポジ画像に階調反転させる効果を得る仕様となっている。また画像層を下側にして木箱に収めるので、画像は左右反転し、実際の光景と同じ向きで被写体を鑑賞できる(図2-1)。この場合は、ガラス面側には何も塗布せず、画像層の上に保護のために透明なニス塗布されているのが一般的である。しかし、現状では、経年によりニス層が黄変してガラス板写真が全体的に黄色みを帯びた状態に変化しているものも多い。こうした画像層を下にして鑑賞する手法こそが、日本で最も普及したアンブロタイプの特徴のひとつである。

その他に、画像層の上に黒色の樹脂を塗布(ID007、写真10)することで階調反転の効果を得ているアンブロタイプもある(ID007、写真11)。つまり、何も塗布していないガラス面から、ガラス越しに透けてみえるポジ画像(正像)を鑑賞することができる、一枚のガラス板写真のみで成立するアンブロタイプである。

(2) 木村喜毅邸での写真撮影

木村喜毅関係古写真のなかで、喜毅やその家族、喜毅の芝新銭座の住まいを写した7点(ID003-009)のアンブロタイプは、前述した万延元年頃の中浜万次郎による撮影と推定した写真に次いで年代を遡るガラス板写真と考えられる。これらは画像層を上にして鮮明なポジ画像(逆像)を鑑賞する、アメリカで散見されるアンブロタイプとは異なり、画像層の上に黒色系の樹脂を塗布したうえで反転させ、何も塗布されていないガラス面を上にしてポジ画像(正像)を鑑賞する、主にヨーロッパで派生したポジ画像のガラス板写真である。

木箱に収められた7点(ID003-009、p.24-26参照)のアンブロタイプのうち、次の6点(ID004-009)の蓋裏には同年同月の制作に関する墨蹟がある。

- ・「甲子菊秋/35jaar」(ID004:木村喜毅)
- ・「甲子菊秋/35jaar」(ID005:木村利子・浩吉・弥重)
- ・「甲子歳菊月/32jaar/4jaar/14jaar/2jaar/(異筆)元治元年」(ID006:木村清子・利子・浩吉・弥重)
- ・「甲子菊月/32jaar」(ID007:木村弥重)
- ・「甲子九月/神仙座」(ID008:芝新銭座の木村邸)
- ・「甲子九月/神仙座園庭」(ID009:芝新銭座の木村邸園庭)

この「甲子菊秋・菊月・九月」(元治元年9月)の出来事として、木村喜毅の元治元年9月18日の日記(慶應義塾図書館所蔵¹⁷)には、「九月十八日火晴(中略)写真鏡家来、函館人松三郎ナル者巧妙可駭」と写真に関する記述がある。

函館人松三郎とは、明治初期に荒廃する江戸城の撮影、ウィーン万博を前にして行われた壬申検査による各地での撮影、陸軍士官学校での各種画像技術の習得、写真館だけでなく画塾を開設するなど、日本の写真・絵画・印刷といった画像分野の近代化の立役者となった横山松三郎である。

日記の内容は、晴れた火曜日(太陽暦1864年10月18日)に、喜毅の邸内(ID008新銭座、ID009新銭座園庭)で、ガラス板に塗布した薬品が乾かないうちに撮影・現像処理をその場で行うコロジオン湿板法を実見した、あるいは最終的にアンブロタイプに仕上げたガラス板写真が喜毅の手元に届けられた、そのどちらかを指している。いずれにしても喜毅は、箱館の横山松三郎の写真術が大変に巧妙で驚いたと称している。

またID004、006、007の箱蓋裏には「甲子菊秋・菊月」に続けて、「35・32・14・4・2」のアラビア数字と「jaar(年)」のオランダ語の組み合わせによる標記が、被写体の位置に対応するように記されている。この「甲子菊秋・菊月・九月」(元治元年9月)を制作年月と考えると、35jaarは木村喜毅、32jaarは木村弥重(妻)、14jaarは木村利子(長女)、4jaarは木村浩吉(次男)、2jaarは木村清子(次女)といった具合に、アラビア数字は木村家の家族の年齢に一致する。日記にみえている太陽暦の曜日、箱蓋へのオランダ語での年齢記入は、外国人との接触機会が多かった、特に海軍伝習を通じてオランダ人との間で仕事を共にした経験のある喜毅による記述であることの証ではないだろうか。後述する慶応元年(1865)年の大阪での撮影と考えられるガラス板写真のID011、ID019の箱蓋裏にもまた、36jaaren(Jaarの複数形)とオランダ語により喜毅の年齢が記されている。よって、オランダ語による年齢書き込みは後年の整理時に加えられた可能性もある。

しかし、ID005には被写体が女性と子供(木村利子・浩吉・弥重)であるにも関わらず、35jaarと喜毅の年齢が記されている。あるいは「木村喜毅」(ID003)は「木村弥重」(ID007)と同じ背景による一連の撮影と考えられるが、箱

蓋には「摂陽心齋橋北街 / 写真師 / 中川伸輔 (花押) (印)」と慶応元年に第二次長州征伐のため大阪滞在時に訪れた中川写真館の名がある。つまり、木箱と中にあるガラス板写真の関係性は、制作当時の状態のもの、あるいはオランダ語の標記を書き込んだ時点の状態のもの、もしくは後年に秩序が乱れた状態のものなどを想定して、他の文献史料や技術的特徴などからによる多角的視点で慎重に判断する必要がある。¹⁸

喜毅の日記と木箱蓋に記された情報、写されている内容、画像層の上に黒色の樹脂を塗布する技術的特徴の一致などから総合的に判断して、7点 (ID003-009) は元治元年に松三郎が江戸の木村邸で撮影したものと考えてよいであろう。では何故、わざわざ箱館の住人である松三郎が、江戸の木村邸を訪れて写真撮影を行ったのであろうか。まずは松三郎の動静から追ってみたい。

(3) 横山松三郎の写真術習得

横山松三郎は、箱館での写真術の習得が思うように進まなかったため、箱館奉行所所属の幕艦健順丸での渡航の機会を得て、海外で写真を学ぶことを目指した。だが元治元年2月から同年4月の上海滞在中には写真技術を得る機会がなかった。そのため松三郎は上海からの帰路に横浜で下岡蓮杖から写真術を学んだとされている。こうした定説の根拠は、松三郎が亡くなった後に弟子らがまとめた『横山先生履歴』〔横山家伝来品 (個人蔵)、高田家伝来品 (個人蔵)、西岡武雄旧蔵品 (神奈川県立歴史博物館所蔵)、函館中央図書館所蔵品など、内容はほぼ同じであるが異なるタイトル〕の記述からによるところが大きい。しかし近年の筆者らの研究から、弟子らが『横山先生履歴』(横山家伝来品)をまとめる過程で、箱館に暮らす弟松蔵に兄松三郎の履歴について問い合わせた内容が明らかとなった。¹⁹ その結果、『横山先生履歴』に書かれた内容については、横山家伝来の松三郎の「手記」(個人蔵)に基づく記述部分と、弟子らの誤った編集構成や創作による記述部分とを見極める史料批評が重要不可欠となった。

ここで特に問題となるのは、「手記」にある、奉公に出ていた14歳の弟の松蔵に頼んで「魯国のコンシュールゴスケベツ〔ゴシケーヴィチ〕²⁰」からの写真術習得を松三郎が試みたとする内容の期日である。『横山先生履歴』では、ゴシケーヴィチは個人名ではなく「魯国人」として記載〔ゴシケーヴィチの個人名を魯国人に書き換えたことが、後に魯国人をレーマンと解釈する混乱を生んだ〕したうえで、時期を「時二元治元年冬也」としている。これに関して「手記」にも同様に「此者元治元年 冬なり」との記載がある。しかし、実はここで筆が代わっている。直前の文章「写真事を相尋申といへども、言語よく不分、只手積而已に 此時知りたり、」(同じ文章は『横山先生履歴』では異なる箇所に配置編集されている)という写真伝習に関する記述とは筆跡が異なっているのである。つまり、「手記」の「此者元治之年 冬なり」は、直前のロシア領事のゴシケーヴィチからの写真伝習に関する記述ではなく、直後の文章「此時親ぞく者壺人病死せり、」を指しているのではないだろうか。よって、松三郎が最初にゴシケーヴィチからの写真伝習を試みたのは、松蔵14歳の安政6(1859)年頃であった可能性を指摘できよう。つまり、安政6年の時点で、既に松三郎は「只手積而已に 此時知りたり、」とあるように、ゴシケーヴィチから見様見真似で、まずはコロジオン湿板法を手順と手業からある程度理解していたのではないだろうか。一方で、化学的知識は言葉の問題から十分には得ることができていなかったのかもしれない。

その後続く、「此者元治之年 冬なり」以降の丁には、やや時代が前後して文久3(1863)年10月と考えられる往路健順丸での品川到着までの経緯、さらに松三郎の略歴ではなく横山家の成り立ちなどが記されており、混沌とした内容のうちに略歴とは離れ「手記」は結ばれている。

(4) 開成所の写真術研究

健順丸での帰国後、元治元年頃の横山松三郎の動静をしれる史料として、「元治元甲子孟冬」(元治元年10月)からはじまっていたとされる日記の残片があった。萬木康博氏は「『旧江戸城之図』と横山松三郎」²²のなかで、銅版画家の西田武雄氏の旧蔵資料にある日記の紙片を再配列したところ、松三郎の元治元年12月27日から翌2(1865)年2月11日までの記事が残っていたと報告している。日記の記事を解読した同氏によると、「同年暮から翌年(1865)1、2月頃は江戸・湯島辺に居住して、建順丸に同船していた石渡政吉、蛭子砥平らとの頻繁な行き来の日々があったようである。そして既に写真師横山松三郎としての日常も折り込まれた貴重なドキュメントとなっている。」と報告している。

西田武雄旧蔵資料は、1961年に西田氏が亡くなる前の6年間に実業家の橘忠助氏が購入するかたちで受け継がれ、2011年には神奈川県立歴史博物館に寄贈収蔵されている。²³ 寄贈直前にまとめられた目録上では『横山先生之伝』(『横山先生履歴』とほぼ同じ内容)の所在を確認することができるが、「元治元甲子孟冬」の日記残片の存在に直接繋がる情

報はみつけれられていない。今後の調査から史料の所在と内容の確認がすすむことが期待される。

よって現状では、前述の元治元年9月18日の木村喜毅の日記内容は、写真師としての松三郎の写真制作とその技量を具体的に示す最古の記録となり、これに対応する7点のアンプロタイプは制作年月が明らかな松三郎が制作した最古の写真といえるであろう。次に、松三郎の写真師としての最初期の活動がなぜ喜毅に披露されたのかを考えてみたい。

その謎を解く鍵は、江戸幕府による洋学教育研究機関であった開成所における写真術研究が関係していたと考えられる。喜毅は、元治元年4月に開成所の頭取を任じられている²⁴。つまり、写真術への関わりは私的なものではなく、開成所頭取としてのお役目としての意味もあったのではないだろうか。幕府による写真術の研究は、天文台蛮書和解御用からはじまり、洋学所、蕃書調所と改組を経ながら、そこに集う洋学者とその人的ネットワークによって開成所の前身機関を中心にして連綿と続けられていた。当初は技術書の翻訳からはじまり、次に実験段階を経て、開成所の時代にはいよいよ実用の段階となり、さらに技術の教育普及へと立脚点が移行した時代といえる。

開成所での写真術研究の中心的存在は、元治元年8月に教授職並となった柳川春三であった。春三は慶応3(1867)年に本格的な写真技術書である『写真鏡図説初編』を刊行するが、その冒頭には桂川甫策(国幹)による序文が寄せられている。また『写真鏡図説初編』の参考文献「写真術書目」の3番目にあげられている、スノースの著作『思氏映画鏡論』(名古屋市蓬左文庫所蔵)については、元治元年に春三と甫策が分担して翻訳を行っている²⁵。つまり、春三と甫策は親しい関係にあったといえる。この甫策の兄で幕府医官の桂川甫周の妻は、喜毅の姉の久邇であることから、喜毅と甫策は親戚の関係にあたる。また、咸臨丸での渡航に際して喜毅の従者に福沢諭吉を推したのは桂川甫周であった。こうしたことから、この時期の喜毅の身边には、公私にわたり写真術に関わる人間が揃っていたといえる。

よって、木村喜毅に横山松三郎を引き合わせたのは、親戚でもある桂川甫策あるいは開成所の柳川春三らが関係した可能性を指摘できるであろう。松三郎が喜毅に写真術が披露した前月の8月27日には、春三が自身で製作した「ガルハニ」〔電池〕を開成所内で喜毅に披露しており、その出来映えを喜毅は「至極妙也」²⁶と日記に記している。では同様に、喜毅から「巧妙可駭」と称された松三郎の優れた写真術は、下岡蓮杖からの伝習あるいは開成所の研究成果を利用したものであったのであろうか。

(5) 江戸滞留の理由

元治元年の暮から翌年1~2月頃に江戸・湯島あたりに居住していた横山松三郎と、頻繁な行き来があったとされる石渡政吉もまた、元治元年7月10日に品川帰着後は暫く江戸に留まったひとりである。健順丸の乗船名簿²⁷によると箱館奉行支配諸術調所の「書物御用出役」とある政吉は、箱館に戻った後には、箱館奉行所内で写真撮影を行っていることが、箱館奉行杉浦誠の日記『箱館奉行日記』²⁸にみえている。慶応2(1866)年8月14日の条には「石渡政吉写真致ス」とあり、同17日には「去ル十四日之写真、石渡政吉より差出、落手」とある。つまり、石渡政吉も横山松三郎と共に江戸滞在中に写真術を習得した可能性が高い。あるいは政吉の縁故から、松三郎は開成所や喜毅との写真を通じた接点をみいだしたのかもしれない。

また、元治元年3月まで箱館奉行所の教育機関である諸術調所を実質的に取り仕切っていた武田斐三郎は、同年7月23日からは開成所教授職並となって江戸に召し出されている。よって、政吉は嘗ての上司ともいえる武田斐三郎を頼ったとしても不思議ではない。先の松三郎による喜毅の撮影も斐三郎による支援があったのだろうか。

この頃の開成所での写真術研究のレベルが窺える史料として、蕃書調所から継続して写真やその他の諸科学の研究にあたった蘭学者市川斎宮の「浮天齋日記」(東京大学史料編纂所所蔵)がある。斎宮の技術書の貸し出し記録によると、松三郎が江戸に滞在していた元治元年11月頃には、「見映画」「写像」「映画写像」といった書目が柳川春三に渡っている。おそらくこの頃に『写真鏡図説初編』の参考とした写真術書を春三は読みあさっていたものと考えられる。フォトグラフィーに対して「写像」や「映画」といった訳語が使われていた時代に、「映画」という言葉から連想されるのが、尾張徳川家の徳川慶勝の手にあったとされる前述の『思氏映画鏡論』(名古屋市蓬左文庫所蔵)である。この写真術書には、写真の基礎知識から、コロジオン湿板法などのガラス板写真によるネガやポジ(アンプロタイプ)の作成、また紙焼き写真を得る方法など、1861年出版当時のヨーロッパでの写真技術が包括的に書かれている。慶勝が所持していた『思氏映画鏡論』によると、春三は『思氏映画鏡論』の「序目」を元治元年9月に翻訳している。よって、残る未翻訳の1~9巻のいずれかが斎宮から借りた「見英画」「映画写像」などに該当する可能性もあろう。なかでも、桂川甫策が翻訳を担当²⁹した6巻は紙焼き写真の製法に関するものである。これこそが、松三郎が求めていた写真術の情報であったと考えられる。

『横山先生履歴』には、健順丸で渡航して写真術を学ぶ理由について、既に大方の写真術を得ているが「未タ紙写ノ方法ヲ得ズ」と、新たに紙焼き写真を制作する技術を得たいがためであったと記されている。また横浜で下岡蓮杖に師事して「此二於テ先生始メテ紙取ノ方ニ達セリ」と紙焼き写真の技術を得たとしている。くわえて石版印刷についても蓮杖から情報を得て研究したと『横山先生履歴』にはある。つまり、これまで考察してきたように松三郎は既にコロジオン湿板法によるアンプロタイプの制作にはある程度習熟しており、次にコロジオン湿板法によって紙焼き写真の基となるコロジオン・ネガのガラス板写真を制作して、さらにそのネガを用いて紙焼き写真を制作したいと考えていたのは確かであろう。後年、松三郎の弟子であった本多忠保が「横山先生のこと」³⁰のなかで、元治元年頃の松三郎と蓮杖の写真技術の状況について「硝子撮りは先生〔横山〕が長じて居るし紙撮りは蓮杖の得意とする処だから、各技術を交換し合った様なのです。」と両名の協力関係を語っていることは興味深い。

また日本とスイスの修好通商条約を結ぶために1863（文久3）年に来日したエメ・アンペール（Aimé Humbert）は、同年6月29日に横浜の日本人〔下岡〕のスタジオを訪れて紙焼き写真数枚を購入したことを日記に記している。つまり、元治元年の時点では、蓮杖は写真館の活動として、既に紙焼き写真を制作販売していたことになる。よって、未だ習得できていない紙焼き写真の技術を得るために、松三郎が蓮杖の門を叩いたことはほぼ間違いのないであろう。

そうであるならば、元治元年7月10日に品川帰着から約2ヶ月後となる9月18日に喜毅に示してみせた松三郎のアンプロタイプの写真術は、自身がこれまでに身につけている技術を示すと同時に、開成所でも研究に取り組んでいたと考えられる紙焼き写真の技術を学びたいとする姿勢を打ち出す場でもあったのかもしれない。なぜならば、この時点では、蓮杖から松三郎への紙焼き写真の技術転移は進んでいなかったのではないだろうか。

また別に、木村喜毅が「巧妙可駭」と称した、松三郎が江戸の木村邸で撮影したアンプロタイプには、技術的課題がみえる。それは画像層の上に直接厚く塗布された黒い樹脂（写真10）が、画像層（コロジオン膜）に滲み、画像のコントラスト低下をまねいている点である。この現象とその解決策は、『写真鏡図説初編』の「写真術書目」の筆頭に掲げられている「ホトヒリュス著（P.J.Hollmanのペンネーム）³² 荷蘭文 一千八百五十六年刊」のなかに説明されている。紙製ネガポジ法およびコロジオン湿板法によるガラス板写真と紙焼き写真の技術をホトヒリュス（Photophilus はラテン語で写真愛好家の意味）がまとめた *Photographie op papier en glas*（Photophilus, 1855）³³ は、鍋島家旧蔵の鍋島文庫（鍋島報効会所蔵）にある佐賀藩精錬方の史料で、薬品の使用痕が残る「舎密学語鈔」にその内容の一部が翻訳されているほか、川本幸民による原書筆写本である「蘭文理学書」（横浜市立大学所蔵）のなかに全文が所在する。その他に大野藩洋学館から伝承した写本（福井県立大野高等学校所蔵）なども存在することから、幕府機関と諸藩をつなぐ洋学者のネットワークにより、幕末期に一定の広がりをもって使用された写真術書であるといえる。春三が参照したホトヒリュス著の写真術書と同じ内容と考えられる史料として、徳川慶勝が所持した「波多希累私（ポトヒリュス）」の『紙及ビ玻璃版上ニ物象ヲ写ス方』（名古屋蓬左文庫所蔵）がある。そこには、「偶此竊深く綿液層中ニ滲入シ、画像ヲ茶褐色ニシ、光沢ヲ奪フアリ、先ツ透明ヲ用ヒ、乾後其上ニ黒糍ヲ塗レハ、此患ヲ免ル、図上ニ塗リタル透明竊能ク乾ク後、一片ノ黒布ヲ其後口ニ貼スレハ、尚簡ナリ、又一片ノ常玻璃ニ黒糍ヲ塗り、之ヲ以テ黒布ニ代フナリ、」と、まず透明な樹脂〔ニス〕を下塗りして乾かした後に、黒い樹脂を塗る、あるいは黒布や黒い樹脂を塗った別のガラスを用いることが解決策として記されている。

喜毅には高く評価された松三郎の写真術であったが、松三郎自身にとっては発展途上の段階に過ぎず、そのため市中では触れることのできない幕府機関である開成所による写真術研究に近づきたいと考えていたのではないだろうか。この理解が正しければ、喜毅やその家族、喜毅の邸宅を写した7点のアンプロタイプは、開成所の頭取である木村喜毅に自身の存在を認識してもらうために松三郎が制作した、写真には写らない松三郎の切実な思いを今に伝えているのではないだろうか。元治元年9月18日の喜毅の日記に記された「松三郎ナル者巧妙可駭」からは、松三郎の存在が喜毅の心のうちに刻まれたことが表れている。言葉ではない写真による意思の伝達が成功した、最初期の一例といえよう。

松三郎と同じ元治元年頃に江戸で写真術を習得しようとしていた人物に今治藩医の半井梧菴がいる。梧菴は最初に小石川の信夫司（津）馬のもとで写真術を学んだが、紙焼き写真の技術を得ることは出来ず、その後開成所に入所して舎密術を学び、教授林正十郎のもとで「泰西写真全書」を翻訳したと「半井忠見小傳」にある。³⁴ 横山家伝来の松三郎の「手控」（個人蔵）には、この「泰西写真全書」が「遠西写真術草稿 大日本開成院 法蘭西学教授 林正十郎訳解 製薬局半井梧菴筆記」として書写されている。また、開成所の柳川春三による『写真鏡図説初版』の「第六 没食酸液の事」には、春三がゴシケーヴィチとの面会時に聞いた話として、実践的な薬品の扱いが記されていることも興味深い。春三とゴシケーヴィチとを結び付けたのは松三郎ではないだろうか。いずれの事例も松三郎が開成所の写真術の近くに位置していたことを示しており、そのひとつのきっかけが、江戸の喜毅邸での写真撮影にあったと考えられよう。

おわりに

木村喜毅関係古写真について、中浜万次郎と横山松三郎による幕末期の制作と推定できるアンブロタイプを中心に、写真技術と制作背景からみてきた。僅か9点を対象にただけであるが、様々な論点がさらに湧き出てきた。明治2(1869)年、師匠の英人(ワグマン, Charls Wingman)との同居を希望する洋画家の高橋由一に対する柳川春三の返答書³⁵からは、春三が松三郎を介して由一に接していること、また万次郎を通じて山内容堂への依頼を提案していることが判る。つまり、木村喜毅関係古写真は個人的な記録に留まらず、本邦の画像史にも深く関わる歴史資料であるといえよう。全体で500点を超える古写真について、より多面的視点から研究が進むことで、多くの新知見が得られるものと期待している。

付記

()内は筆者による推定

後註

- 1 横浜開港資料館編『木村芥舟とその資料—旧幕臣の記録』横浜開港資料普及協会、1988年。
- 2 江川文庫編・東京大学史料編纂所古写真プロジェクト編集協力『写真集 日本近代化へのまなざし 葦山代官江川家コレクション』吉川弘文館、2016年。
- 3 註2に同じ。
- 4 『日本歴史』813号、吉川弘文館、口絵解説、2022年。
- 5 山口直邦の肖像写真は、一度も訪れたことがない自分の領地小野路村の名望家である小島家に与えられている。文久3年(1863)3月16日条の「小島日記」(小島資料館所蔵)には「殿様御像を写し候鏡下され床之間きじの箱へ入れ置く」とある。小島日記研究会編『小島日記二八文久三年』小島資料館、1984年。
- 6 本格的な調査は未着手であるが、医師の三宅良斎と良斎の妻遊亀の2点の西洋式ケース入りの肖像写真(東京大学総合研究博物館研究部所蔵)も同様の仕様である可能性が高い。
- 7 谷昭佳「日本写真史における中浜(ジョン)万次郎の位置とその周辺—江川家伝来写真を中心に—」註2に同じ、22-42頁。
- 8 樋口雄彦「大築尚志略伝」『沼津市博物館紀要』11号、沼津市歴史民俗資料館、1-21頁、1987年。
- 9 西村英之氏「福井写真史考—松平家と写真—」『福井市立郷土歴史博物館研究紀要』6号、福井市立郷土歴史博物館、57-73頁、1998年。
- 10 谷昭佳「中浜(ジョン)万次郎の写真事歴にみる江戸の最初期写真事情」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』39号、1-8頁、2011年。
- 11 註7に同じ、31頁。
- 12 United States Patent and Trademark Office, <http://www.uspto.gov/>
- 13 慶應義塾福沢研究センターのご協力により、2019年に同センターにて白岩洋子氏による修理報告書を開覧する機会を得た。
- 14 この写真は、これまで写真家としても活動した「西洋人青年(エドワード・M・カーンカ)」として紹介されてきた。しかし、他に残されているカーンの肖像写真や肖像画とは明らかに人物が異なるため、本目録では「男性」とした。
- 15 Wendy Cunkle Calmenson, 1977, *Likenesses Taken in the Most Approved Style: Wiliam Shew, Pioneer Daguerreotypist*, California Historical Quarterly, Vol.56, No.1 (Spring, 1977), pp.2-19.
- 16 ベルトラン・ラヴェドリン、ジャン＝ポール・ガンドルフ、シビル・モノー著作、白岩洋子翻訳『写真技法と保存の知識 デジタル以前の写真—その誕生からカラーフィルムまで』青幻舎、2017年。
- 17 慶應義塾図書館編『木村撰津守喜毅日記』塙書房、177-178頁、1977年。
- 18 同ガラス板コレクションにあるID010、ID011、ID019の蓋裏には、同じ中川写真館製であることが分かる墨蹟がある。ID010には慶応元年8月1日、ID011、ID019には同年7月24日の日付もみえている。木村の日記(註17に同じ、285-289頁)には、慶応元年7月24日には「此日所獲写真小額二枚」、同年8月1日には「写真一枚出来携帰」とあり、蓋裏の記述とびたりと一致している。
- 19 谷昭佳「高田家伝来横山松三郎・松蔵兄弟の写真史料の概要—北方歴史資料館所蔵資料について」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』60号、22-29頁、2013年。
- 20 箱館のロシア領事館内で元治元年6月撮影されたと伝えられる、函館中央図書館所蔵「林儀助」「林儀助・林忠太郎」(複写)の基となったオリジナル(所在不明)は、ゴシケーヴィチによる撮影の可能性はある。
- 21 「明治元年辰十月 宗門人別調書 神明町」(函館市中央図書館所蔵)に22才とある松蔵の年齢から逆算して推定。
- 22 萬木康博『旧江戸城之図』と横山松三郎『MUSEUM』No349、美術出版、21-31頁、1980年。
- 23 角田拓朗「橋忠助氏旧蔵美術資料群について」『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』37号、神奈川県立歴史博物館、25-68頁、2011年。
- 24 註1に同じ。
- 25 岩下哲典「徳川慶勝の写真研究と撮影写真(上)」『徳川林政史研究所研究紀要』25号、徳川黎明会、222-285頁、1991年。
- 26 註17に同じ、176頁。
- 27 長崎近世文書研究会編「志賀九郎助書翰集」『長崎史料叢書』第5集、長崎近世文書研究会、1994年。
- 28 杉浦梅潭『杉浦梅潭箱館奉行日記：慶応二年—慶応四年』杉浦梅潭日記刊行会、1991年。
- 29 註25に同じ。
- 30 本多忠保「横山先生のこと」『方寸』2巻4号、方寸社、5-6頁、1908年。
- 31 Gregoire Mayoer/Akiyoshi Tani (eds), 2018, *JAPAN IN EARY PHOTOGRAPHS The Aime Humbert Collection at the Museum of Ethnography, Neuchtel*, Stuttgart, ARNOLDSCHHE Art Publishers. Made in Europe, pp.22-24.
- 32 Hans Rooseboom, 2008, *De schaduw van de fotograaf Positie en status van een nieuw beroep: fotografie in Nederland, 1839-1889*, Leiden, Primavera Pers, pp.260, 415. 川上力氏からのご教示による。
- 33 筆者の比較調査から原書は以下であると同定した。Photophilus, 1855, *Photographie op papier en glas : handleiding voor allen, die, onbekend met de schilderkunst, in weinige oogenblikken een portret of landschap op papier of glas willen vervaardigen : beschreven naar de beste en nieuwste handelwijzen van Roman, Cuvelier, Dufour, Laborde, Chevalier, Fau en anderen*, Breda: Broses&Comp. 同書は1855年版しか存在しないことから『写真鏡図説初版』にある1856年刊は1855年刊の誤りと考えられる。
- 34 井上淳「半井梧庵の写真術に関する一考察」『愛媛県歴史文化博物館紀要』第12号、149-155頁、2017年。
- 35 柳源吉編『高橋由一履歴』私家版(非売品)、14-15頁、1892年。

図版編

ガラス板写真



001. John Mercer Brooke



002. 青年



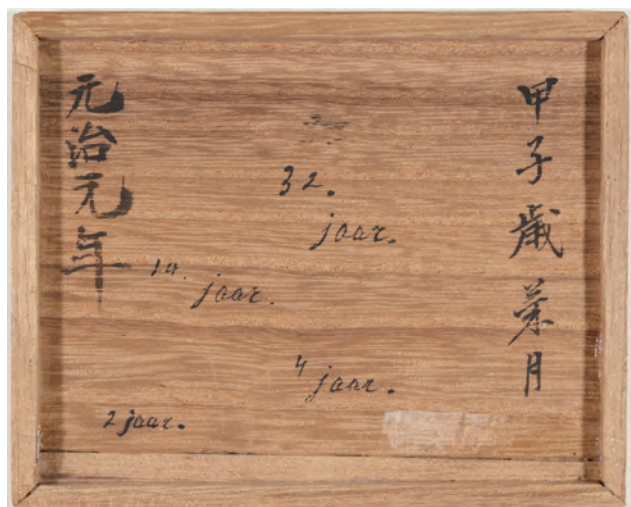
003. 木村喜毅



004. 木村喜毅



005. 木村利子・浩吉・弥重



006. 木村清子・利子・浩吉・弥重



007. 木村弥重



008. 芝新銭座の木村邸



009. 芝新銭座の木村邸 園庭



010. 木村喜毅



011. 木村喜毅



012. 木村喜毅



013. 木村弥重・利子



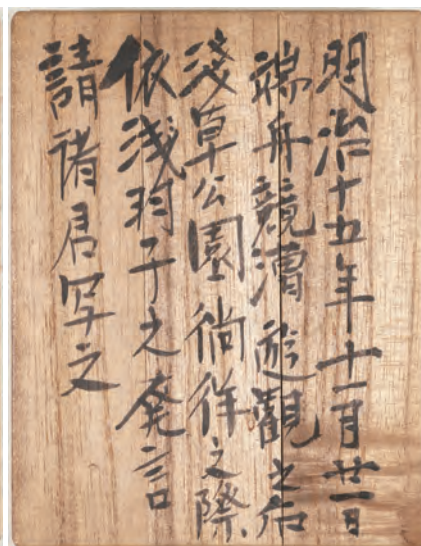
014. 木村弥重



015. 木村弥重



016. 木村浩吉



017. 木村浩吉・学友



018. 木村弥重・家族一同



019. 木村喜毅



020. 木村喜毅・弥重



021. 木村駿吉



022. 木村喜毅

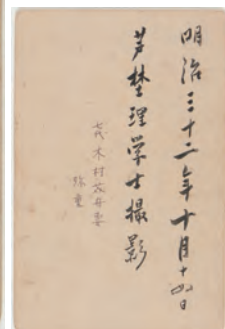
編 版 図
真 寫 き 焼 紙



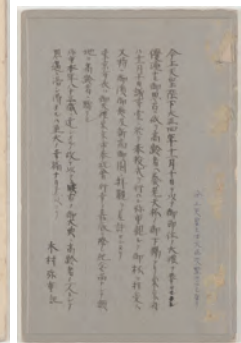
023. 木村喜毅



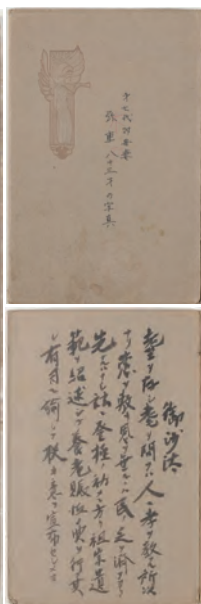
024. 木村喜毅・弥重



025. 木村弥重



026. 木村弥重



027. 木村弥重



028. 木村謙吉



029. 木村浩吉・静子



030. 木村静子



031. 木村よし子



032. 木村家家族



033. 木村家家族



034. 木村浩吉



035. 木村千子



036. 木村浩吉



037. 木村浩吉・千子



038. 木村弥重



039. 木村浩吉



040. 木村浩吉・静子



041. 福沢諭吉



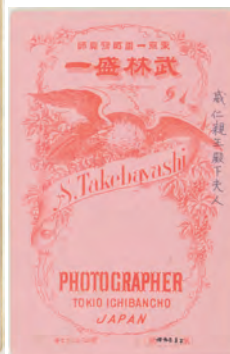
042. 福沢諭吉



043. 有栖川宮威仁親王



044. 有栖川宮威仁親王妃



045. 徳川達孝伯夫人



046. 今泉政子・源幸





047. 女性



048. 長谷川正道



049. 築山清智



050. 神田乃武



051. 濱口英幹



052. 男性



053. 奥山政敬・市川盛三郎



054. 小笠原長生



055. 奥山政敬



056. 久保田彦七



057. 市川兼恭



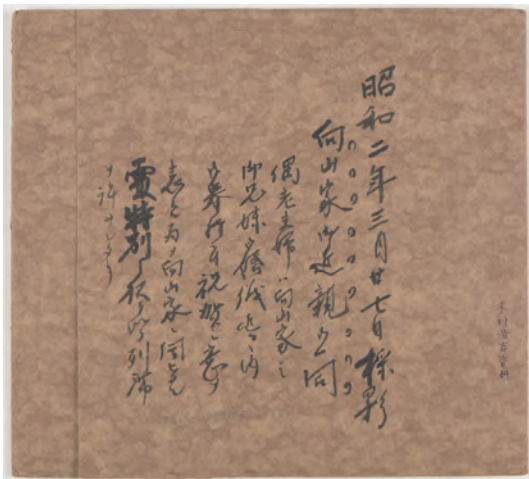
058. 男性



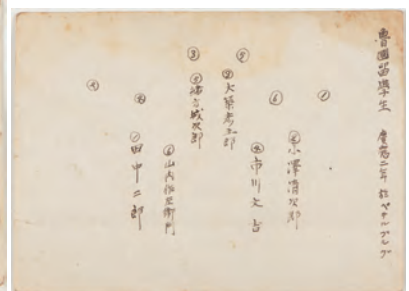
059. 女性



061. 男性



060. 向山家近親一同



062. ロシアへの派遣留学生



064. 朝陽丸



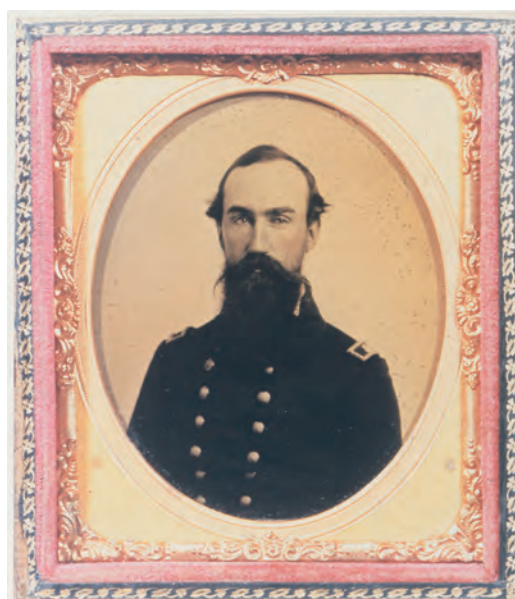
063. 威臨丸



065. カリフォルニア州知事 John G. Downey



066. J.P. Havin



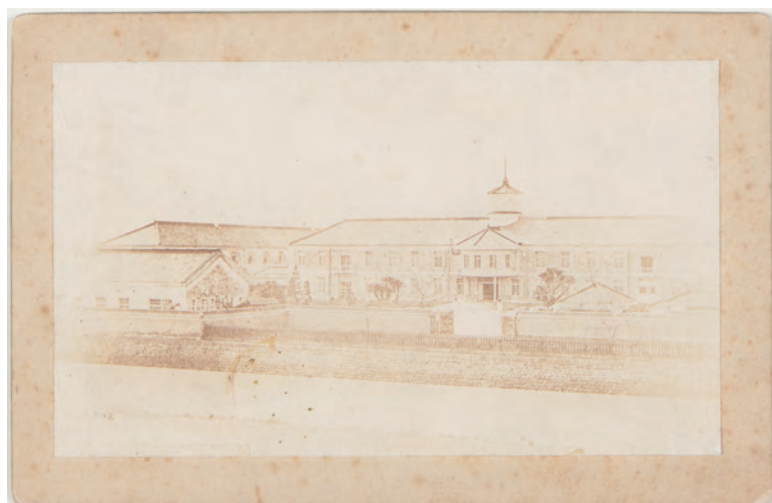
067. John Mercer Brooke



068. フェニモア・クーパー号日本沿岸実測中の図



069. インターナショナルホテル



070. 海軍兵学寮



071. 仏国軍港



072. 軍艦



073. 軍艦



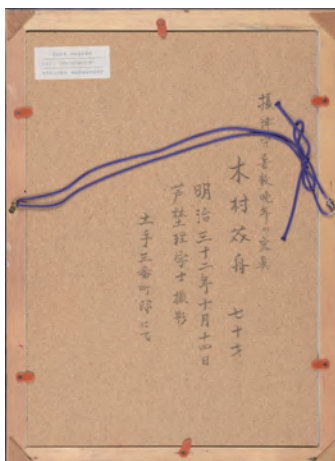
074. 木村喜毅



075. 木村喜毅



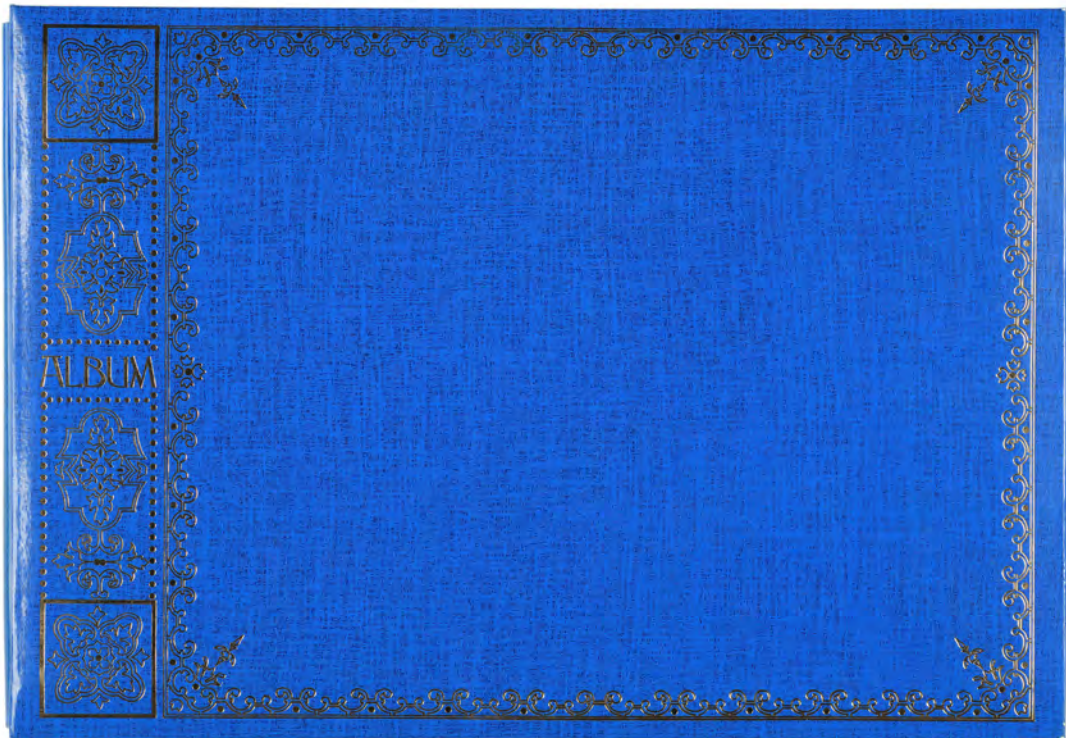
076. 木村喜毅



077. 福沢諭吉

図版編

アルバム1
- 青表紙 -



表表紙



078. 木村喜毅



079. 木村弥重



080. 木村邸の家族



081. ①芝新銭座の木村邸の園庭 ②芝新銭座の木村邸



082. 木村千子・静子



083. 木村喜毅



084. 木村喜毅



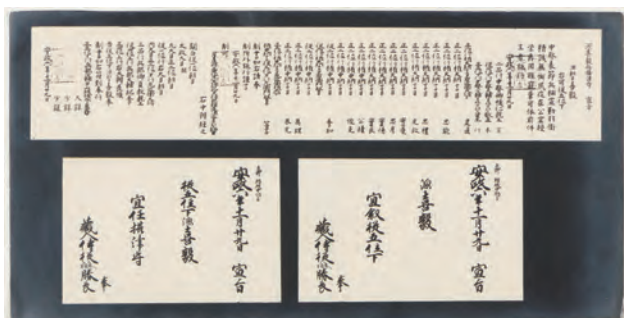
085. 木村弥重



086. 木村喜毅



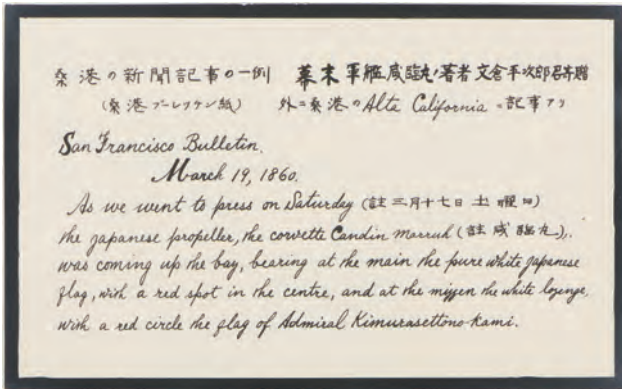
087. 木村喜毅



088. 位記・口宣案



089. 咸臨丸水夫の米国土産品



090. サンフランシスコの新聞記事の抜書き



091. 木村喜毅



092. 木村弥重・清子



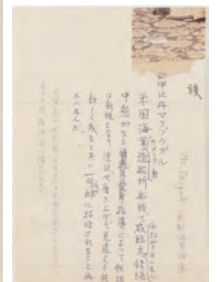
093. メア島海軍造船所



094. ハワイ王自筆の紋章



095. McDougall





096. カリフォルニア州知事 John G.Downey



097.J.P.Havin



098. 勝麟太郎



099.John Mercer Brooke



100. 男性

STUDIO NAME.
WM SEW. MONTG Studio
SAN FRANCISCO 1860
1988-1-14



101.John Mercer Brooke



102. 福沢諭吉



103. 咸臨丸難航図・木村浩吉識語



104. フェニモア・クーバー号日本沿岸実測中の図の複写



105. フェニモア・クーバー号日本沿岸実測中の図の裏面の複写



106. 福沢諭吉



107. 御座船



108. 木村浩吉・弥重・駿吉・利子・清子



109. 向山黄村



110. 大槻磐溪



111. 木村浩吉英国出張記念の家族写真



112. 木村謙吉



113. 赤松則良



114. 東久世通禧



115. 男性



116. 木村浩吉



117. 木村千子



118. 木村千子



119. 木村浩吉



木村千子 鎌吉 (母氏)
明治20年4月21日

120. 木村千子・謙吉



昭和元年十一月十六日 稲妻屋三三様
影写 鎌吉八八
明治三十二年

121. 木村君子・浩吉・千子



122. 木村和歌子・謙吉



123. 木村駿吉・香芽子



124. 木村香芽子・阿蒙・駿吉



125. 鈴木大三郎



126. 鈴木清子

Handwritten Japanese text on a small rectangular card, likely a name tag or a note related to the portrait.



127. 海軍兵学校卒業記念写真

Handwritten Japanese text on a rectangular card, possibly a certificate or a commemorative message.



128. 築地海軍英学校ノ図カ



129. 軍艦筑波



130. 軍艦筑波



131. 巡洋艦千代田



132. 軍艦



133. 軍艦松島



134. 箱根湯元の滝



135. 元箱根旧街道より



136. 箱根宮の下



137. 箱根芦の湯松坂屋



138. 箱根芦の湯紀伊屋



139. 箱根芦の湯紀伊屋



140. 箱根湯本



141. 箱根湯本



142. 箱根塔の沢玉の湯



143. 箱根塔の沢玉の湯

図版編

アルバム2 - 赤表紙 -



表表紙

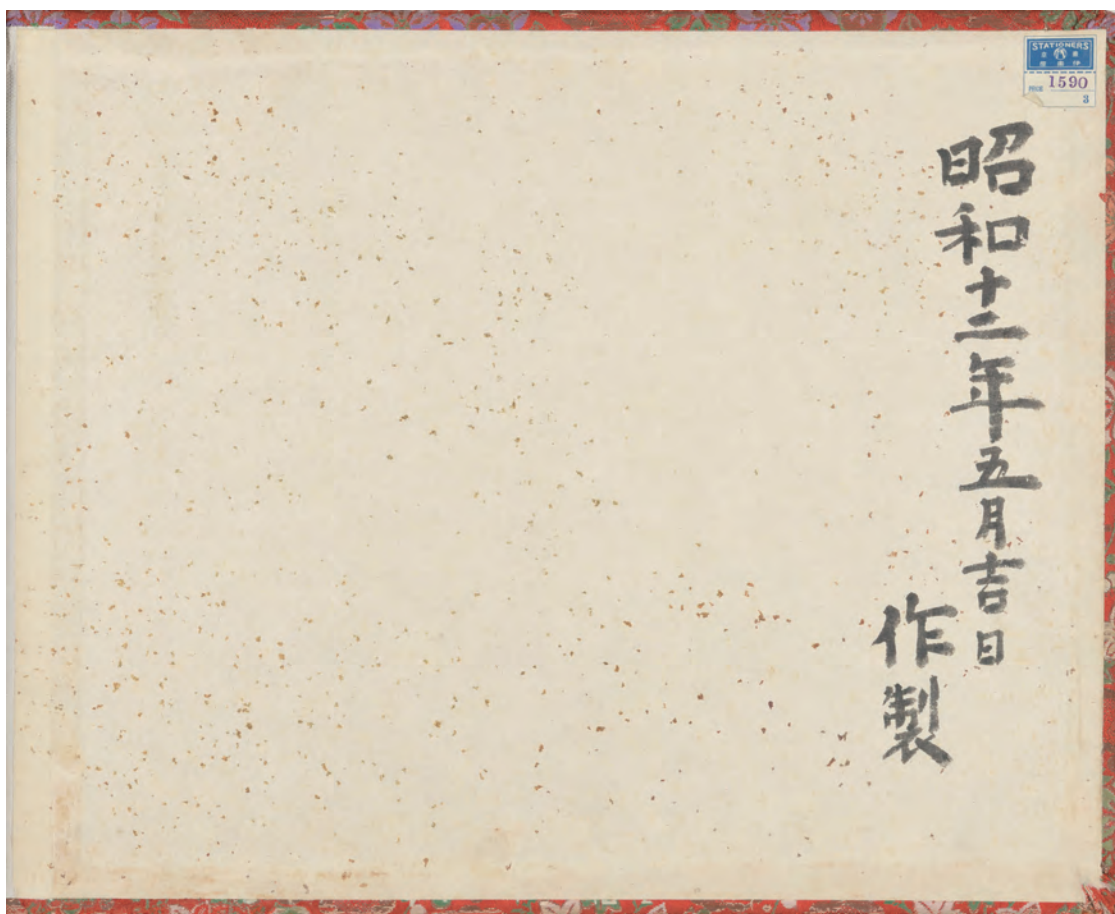
本報告書のノドをアルバムのノドと見立て、アルバム（右綴じ）の見開き状態を再現できるようレイアウトした。
報告書の見開き2頁に上下段でアルバム4頁分の画像を配置しているので、掲載順は上段右→上段左→下段右→下段左となっている。



タイトル「木村家八代浩吉喜字齡記念寫真帖」



144. 咸臨丸難航図と木村喜毅
146. サンフランシスコ市の咸臨丸歓迎決議文 145. 咸臨丸難航図



表表紙見返し



タイトル裏



150. 母子 149. 芝新錢座の木村邸



154. 木村浩吉 153. 木村浩吉



148. 木村喜毅 147. 木村喜毅



152. 兵学校付属練習艦 乾行 151. 木村浩吉



156. 日清戦役 黄海海戦
158. 日清戦役 松島水雷長 157. 日清戦役 黄海海戦



162. 土手三番町の木村邸
164. シャム王宮 163. 木村浩吉



167. 捉拿倭俄奸審問正法の図
169. 雪中人物 4 名 168. 天津城埋伏地雷董軍門大勝西兵の図



174. 木村浩吉・千子 173. 木村浩吉



166. 木村浩吉 165. 木村浩吉



172. 木村浩吉 171. 木村浩吉 170. 木村浩吉



177. 青山高樹町の木村邸 (右) 178. 青山高樹町の木村邸 (左)
179. 麻布筭町の木村邸



183. 木村家家族 184. 木村静子・浩吉・千子



176. 木村浩吉 175. 木村浩吉



180. 木村家墓所
182. 飼犬メリー 181. 飼犬メリー



186. 木村家家族 185. 木村家家族



191. 有馬新一 190. 奥山政敬 189. 福沢諭吉



200. 水雷術教師英人パア 199. 福沢諭吉



206. 錢塘江上近く迫りたるボア (潮津波) 205. 香港
208. 果物 207. 果物



198. 木村栄樹 197. 木村君子 196. 木村和歌子



202. 上海愚園内の茶亭 201. 上海城
204. シンガポールの果物 203. 暹羅王宮内の演戯



212. ロンドン橋 211. パリ凱旋門



217. 女性・男性 216. 信州上林温泉近くの地獄谷 215. 晚翠軒の祝宴



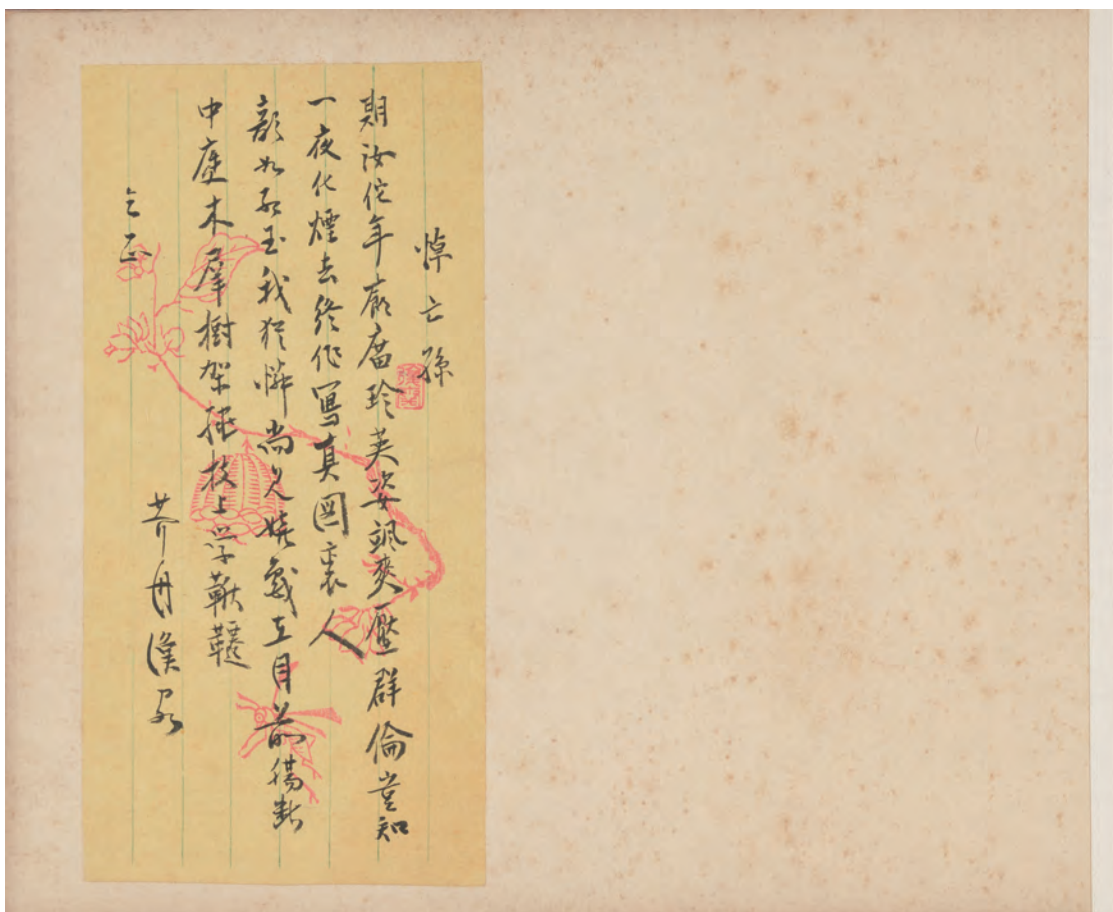
210. ジブラルタル 209. スエズ運河



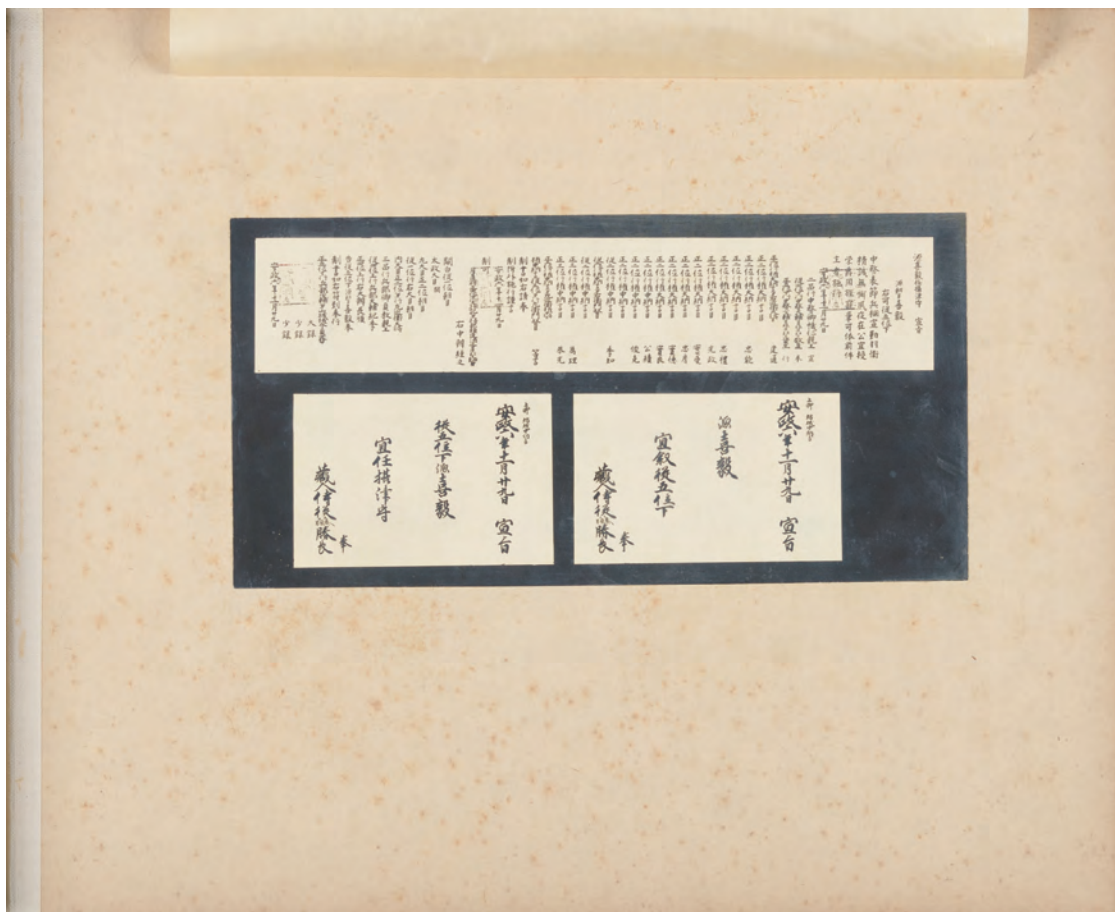
214. 御座船 213. 海防水雷爆発の光景



白紙



木村喜毅自筆「悼亡孫」



218. 位記・口宣案



白紙

安政六年勅を奉し 勉勵して
 渡米せる 咸臨丸司を及木村
 振津守の 功績の正しく 申す
 せざるしを ありき 孝子 浩吉に
 名を 承る心 甲斐ありて 亦
 史実の ぬゝと 此るよしを きて
 波を 承り 海路 ける 舟を 載し ぶと
 何れ ぼし して けり 家名 保ま れを
 此 記 書 記 する あり 然る 是 道 重 の 代 へ
 あり 腰 掛 一 冊 此 記 記 する あり
 とう とう 記 する
 昭和十三年一月十六日
 浩吉 木村 浩吉
 木村 浩吉 様

陸奥広吉から木村浩吉宛の書簡



白紙

木村芥舟翁

は其の九日死したるよし、徳川幕府下の家... 芥舟翁の生涯と業績に関する記事の冒頭部分。

芥舟翁の生涯と業績に関する記事の続き。その学問的貢献と政治的立場について詳しく述べられている。

木村芥舟翁の訃告。氏名、生没年、葬儀の日程、および関係者の連絡先が記載されている。

『時事新報』木村喜毅追悼記事切り抜き
木村喜毅死亡広告切り抜き

謝恩帖
伯爵 陸奥廣吉閣下ノ御關係ニ就テ、幕末軍艦威風丸ノ上梓以前ハ全く未知ノ... 追悼記事の切り抜き部分。故人の功績と自身の感謝を述べた文章。

謝恩帖



裏表紙見返し



白紙



裏表紙

図版編

アルバム 3 - 黒大型 -



表表紙

縦型のアルバムであるため、本報告書を90度回転させた状態で、1頁ごと見開き状態を再現できるようレイアウトした。



表表紙見返し



224. 水雷術教師パー 221. 市川盛三郎
225. 水雷術教師パー妻子 222. 小林元吉 219. 鈴木郁子
223. 木村千子・市川寛子 220. イノストレイキ博士



233. 今泉利量 229. ハーモント・四方田栄太郎 226. 谷雅四郎
234. 今泉秀子 230. 佐藤・佐伯 227. 土屋保
235. 幼児 232. 幼児 231. 中松完一 228. 内藤五十三



241. 女性 238. 女性・幼児
239. 寿水男 236. 二本真子・幼児
240. 男児 237. 為範



247. 女性 244. 女児 242. イリストレ・家族
 248. 女性 245. 女児 243. イリストレ
 249. 男性・女性 246. 女性



250. 男性



258. 西紳六郎 255. 築山清智 252. 小倉鉄一郎
 259. ストウラ 256. 末川将常 253. 谷雅四郎
 260. 坂元常英 257. 斉藤利昌 254. 斉藤利昌 251. 沢鑑之丞



263. 荒川規志 261. 満喜
 264. 男姓 3 名 262. 佐伯理二郎



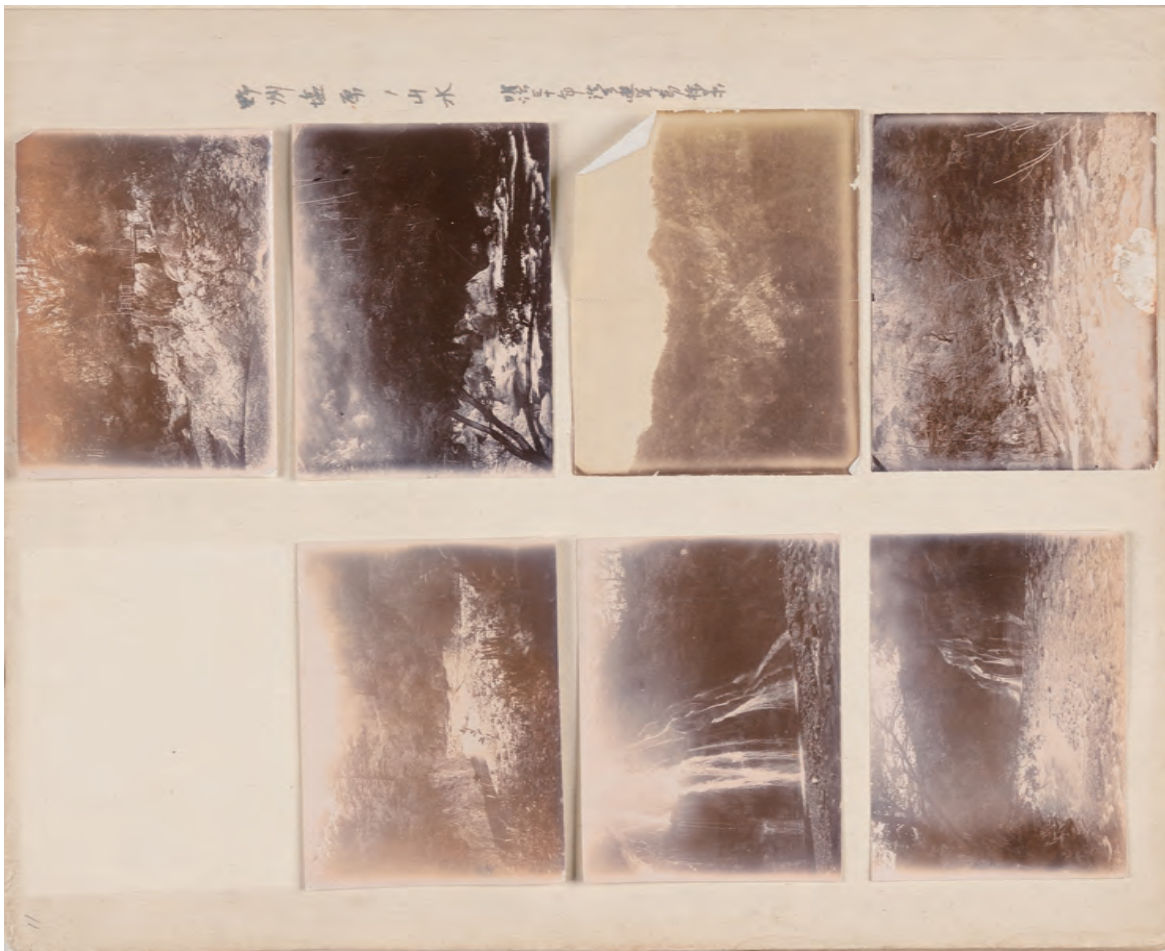
274. 愛子 271. 五六 268. 嘉一 265. 奥山政敬
 275. 五六 272. 女子 3名 269. 愛子 266. 奥山老母堂
 273. 雪子 270. 雪子 267. 曆子



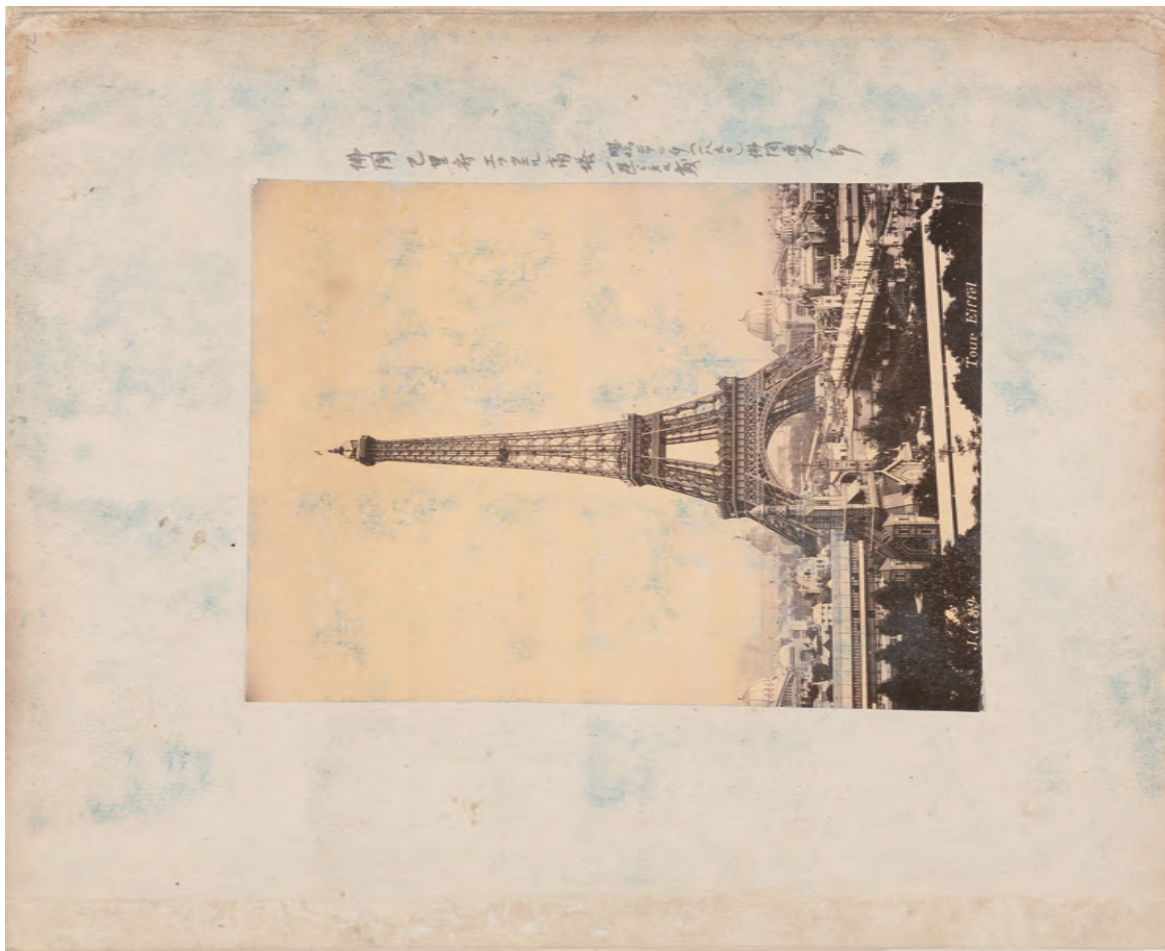
277. 小田原梅園 276. 河原の風景
 279. 奈良春日大社 278. 小田原梅園
 281. 小田原梅園 280. 奈良公園



285. 塩原雨中の景 282. 熱海新浜海岸
 286. 熱海梅園 283. 熱海大橋
 287. 新浜玉屋別荘 284. 熱海梅園
 289. 軍艦松島 288. 清国芸妓 (上海)



290. 野州塩原の山水
 294. 野州塩原の山水 291. 野州塩原の山水
 295. 野州塩原の山水 292. 野州塩原の山水
 296. 野州塩原の山水 293. 野州塩原の山水



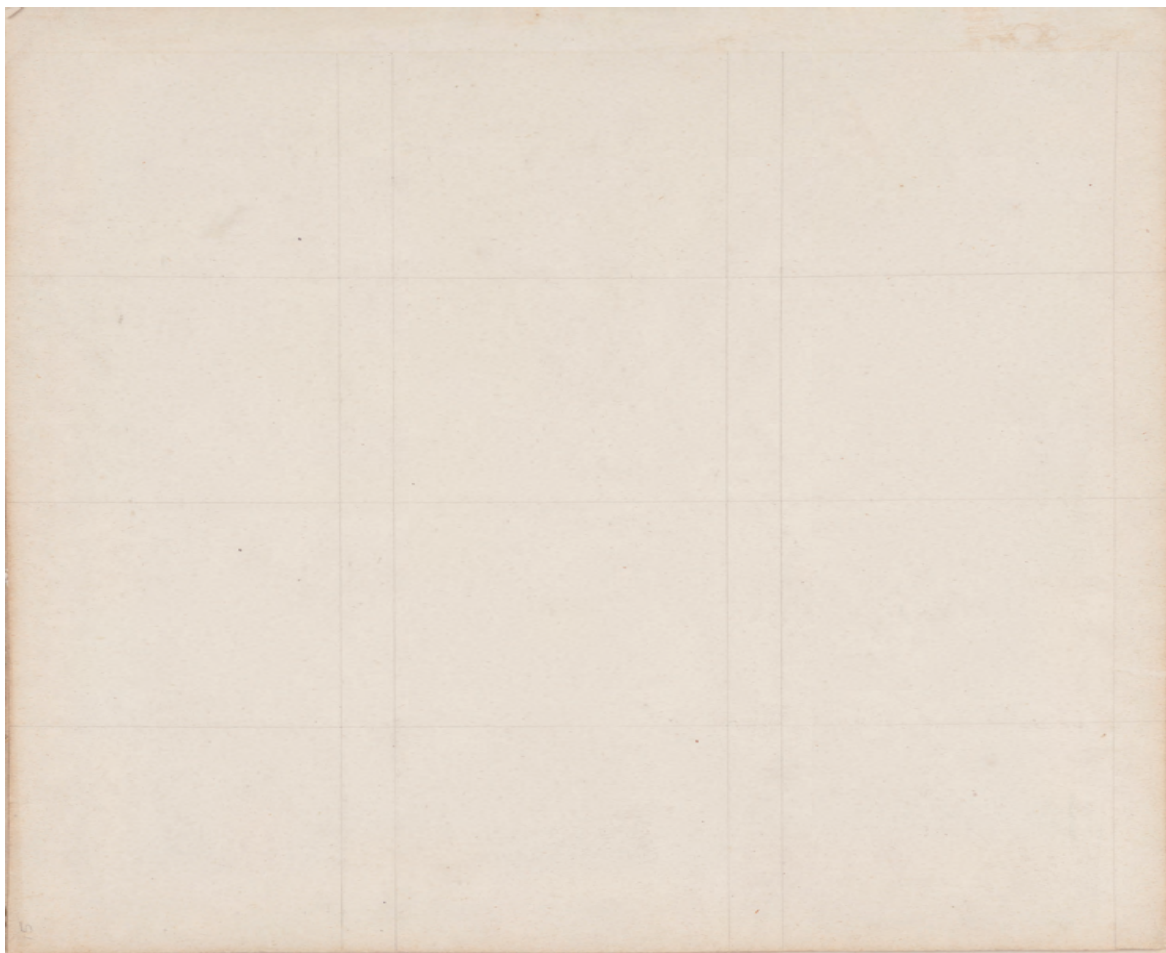
297. エッフェル塔



306. 女性 303. 女性 300. 吉村克二
 304. 美和子 301. 女児 298. 吉村峰子
 305. 美智子 302. 女児 299. 美和子



309. 木村浩吉 307. 男性
308. 男性



白紙

16



同志會 (明治十三年海軍兵學校第一年度)

↑ 不
↑ 名
↑ 訓
↑ 聲
↑ 中
↑ 大



官士組 (新島松島組)
(中隊職役中)

310. 明治十三年海軍兵學校第一年生徒同志會
311. 軍艦松島兼組士官 (日清戰役中)



新島 雷備 組 四人 山比羅金



會 慶 靜

手前右四人 田木 則 隆 重

312. 金比羅山四人組 (立川・木村・津田・飯田)
313. 靜慶會會員



白紙



314. 軍艦松島乗組士官(白清戦役中)



315. 顔写真 46 枚の複写写真



北海道アイヌの一族

316. 北海道アイヌの一族



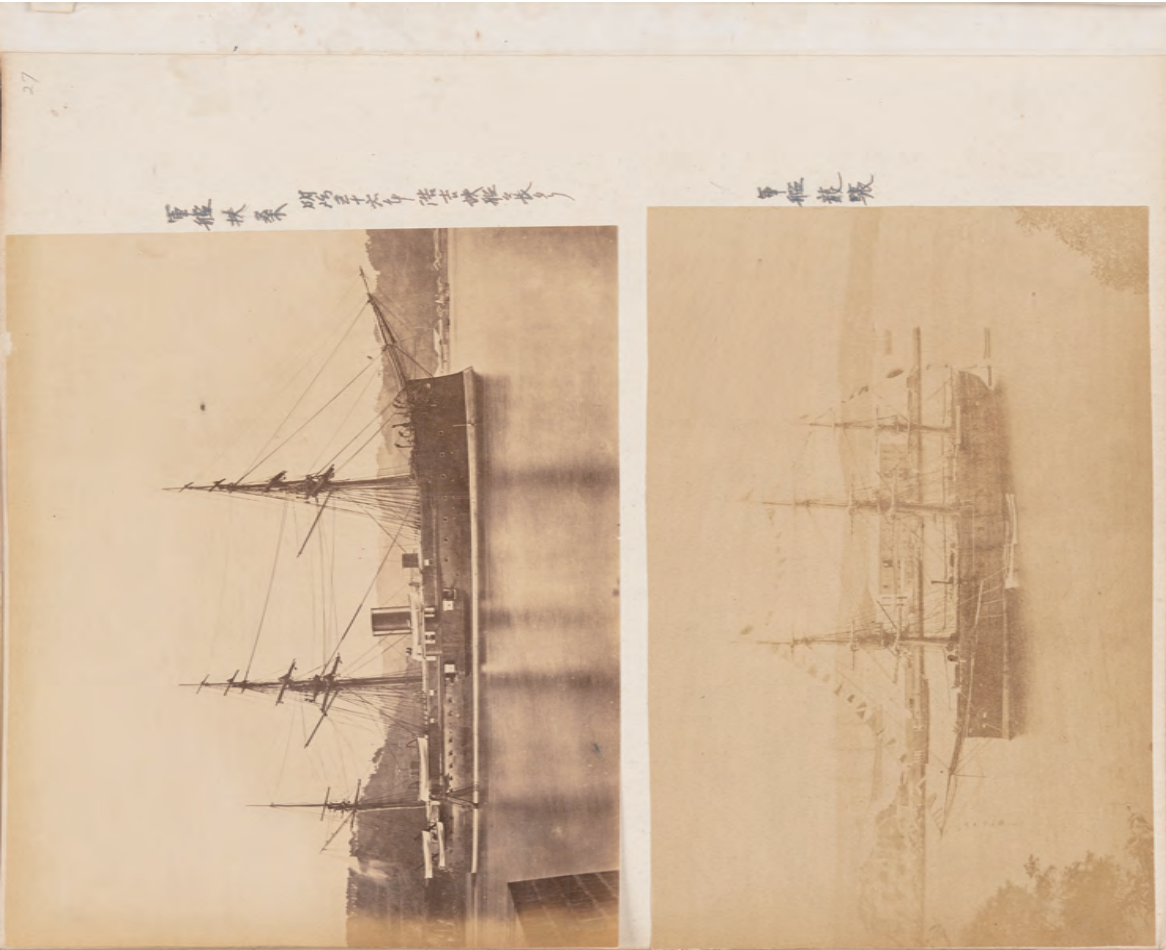
白紙



323. 静陵会員
324. 海軍大学校長教官及学生 (卒業式)



325. 駿州清水港
326. 駿州龍華寺大蘇鉄
327. 駿州龍華寺大蘇鉄





332. 函館港 (右部)
 333. 函館市公園
 334. 五稜郭水切出し



337. 海防地雷爆発の光景 335. 函館港 (左部)
 338. 軍艦 336. 函館市
 340. アイヌ熊祭 339. アイヌ住家
 341. 画像不詳



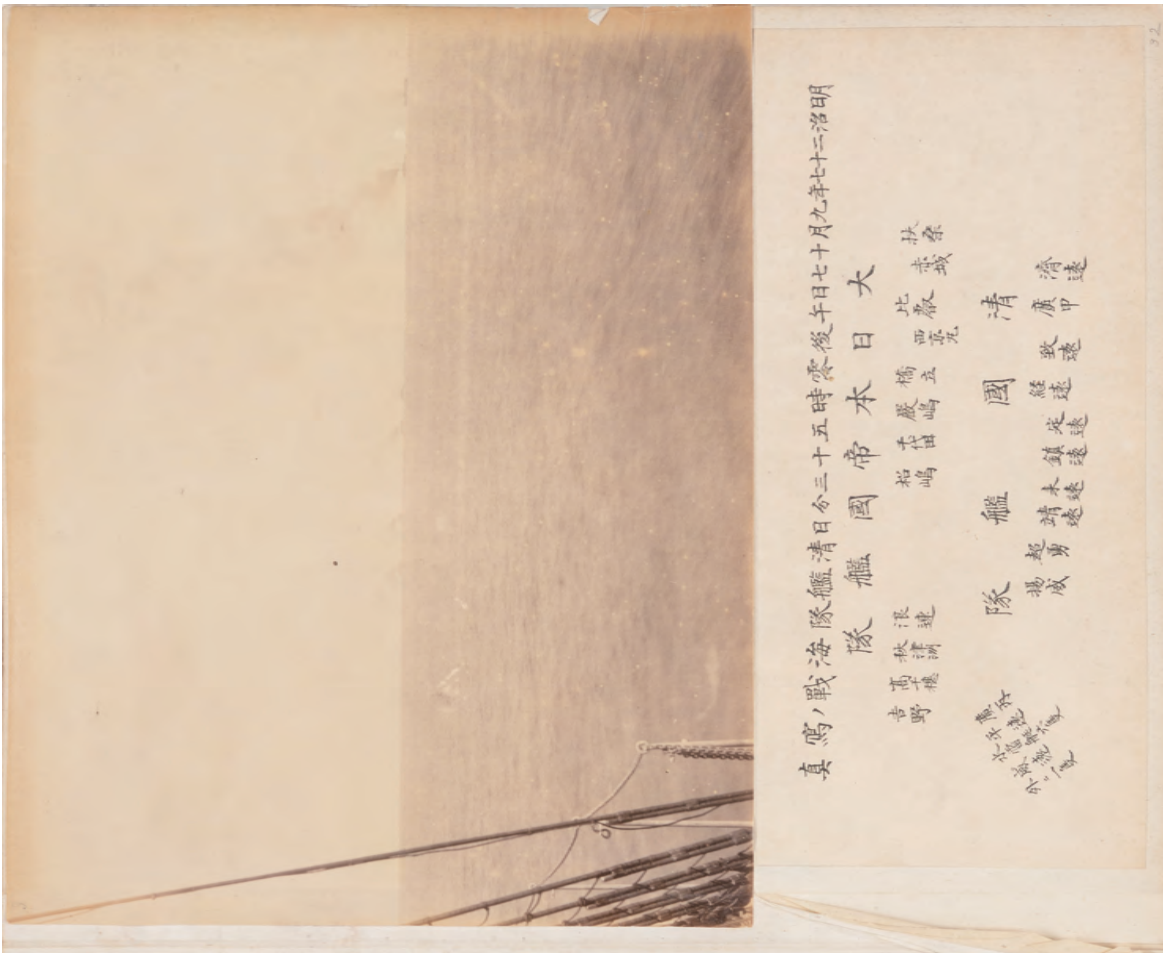
大日本帝國艦隊根拠地長直路仮設砲臺寫真

342. 大日本帝國艦隊根拠地長直路仮設砲臺



大日本帝國艦隊根拠地長直路集會
明治廿七年九月九日寫真

343. 大日本帝國艦隊根拠地長直路に集會



344. 日清艦隊海戦



345. 日清艦隊海戦



時四后午日八十月九年七世治明
真寫，旗凱城赤艦軍國帝本日大

348. 軍艦赤城凱旋

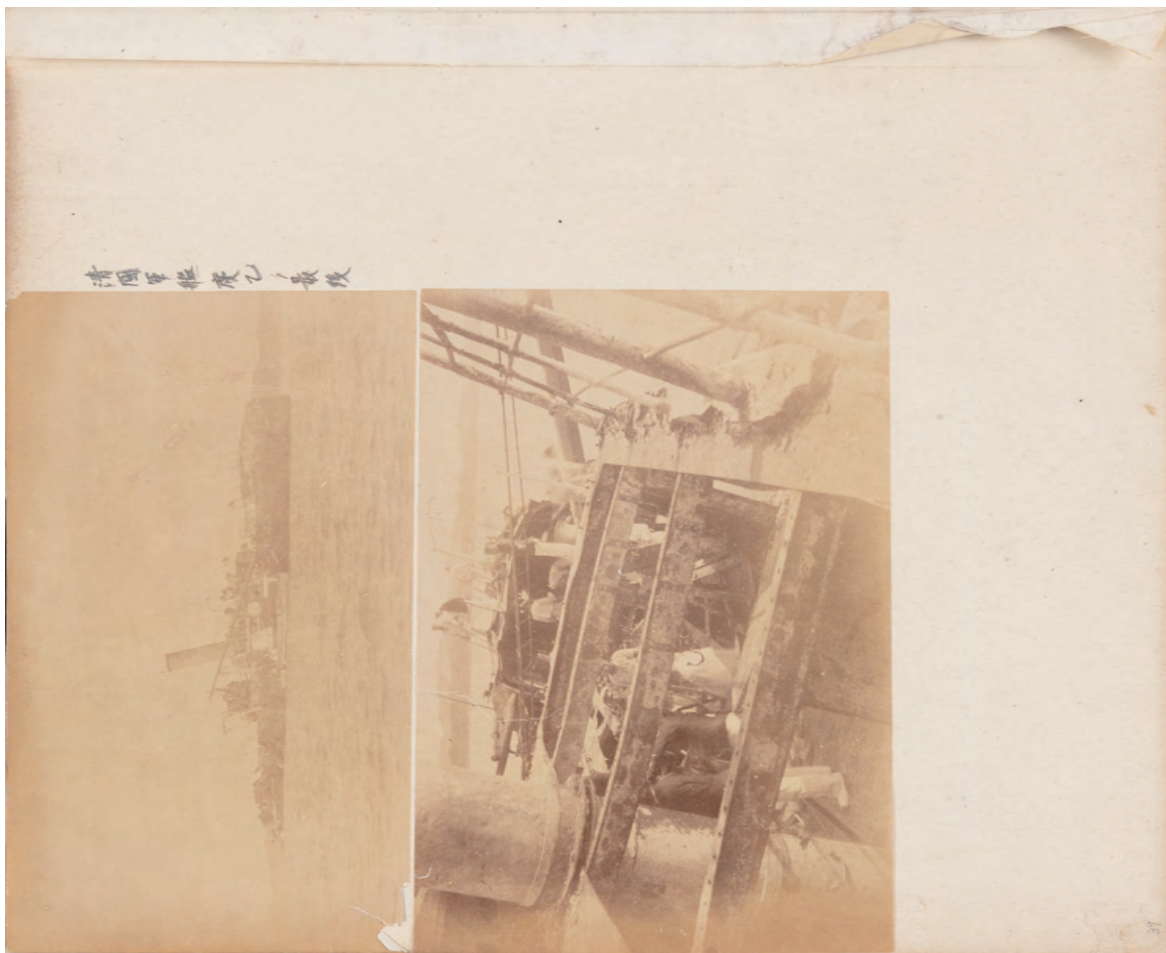


真寫，部後板甲上城赤艦軍國帝本日大

349. 軍艦赤城上甲板後部



350. 黄海大海戦
351. 黄海大海戦カ



清国軍艦乙ノ最後

352. 清国軍艦乙
353. 清国軍艦乙カ



354. 大日本帝國艦隊大同江外假根地へ凱旋



357. 幼兒 355. 木村浩吉
358. 二木家幼兒 3名 356. 木村浩吉



365. 木村浩吉 362. 木村浩吉 359. 木村浩吉
 366. 木村浩吉 360. 木村浩吉
 367. 木村浩吉 364. 木村浩吉 363. 木村浩吉 361. 木村浩吉



377. 新井次郎 374. 井上保 371. 齋藤・荒井・木村 368. 谷雅四郎
 378. 新井令息 375. 土屋株 372. 室田習三 369. 高木正年
 379. 有馬良橋 376. 服部雄吉 373. 但馬惟孝 370. 近藤末四郎



382. 川村常子 380. 川村鉄太郎
383. 川村常子

385. 木村浩吉・千子 384. 市川實子 381. 大坪・中松・女性・幼児

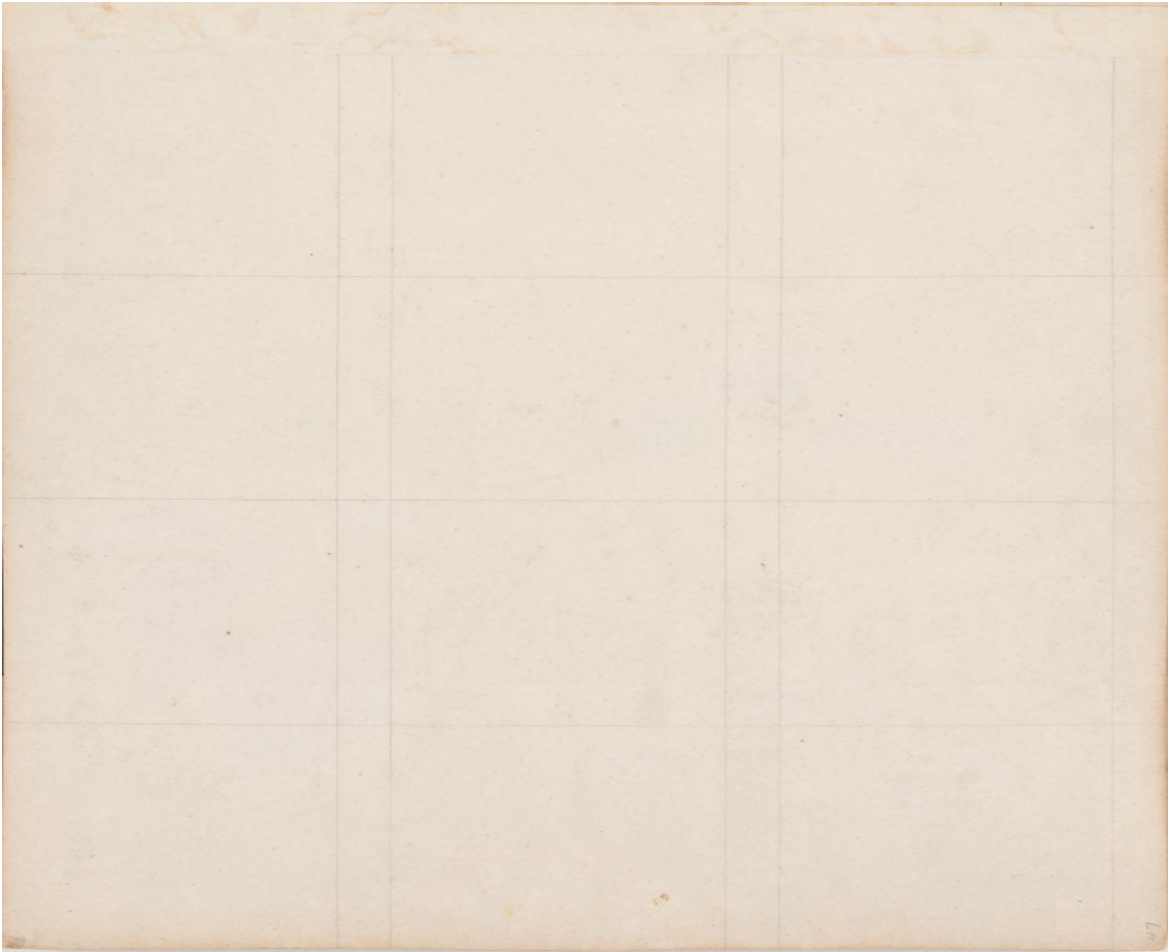


392. ダビットリー 389. 女性 386. 蒙州タスマニア島タスマニア市民レツキス
393. ダビットリー夫人 390. ヘンリー・ラビポート 387. レツキス夫人

391. 男性 388. 男性



398. 市川政子 395. 市川谷子・政子
 396. 女児
 397. 市川政子 394. 幼児 2名



白紙



有栖川威仁親王殿下

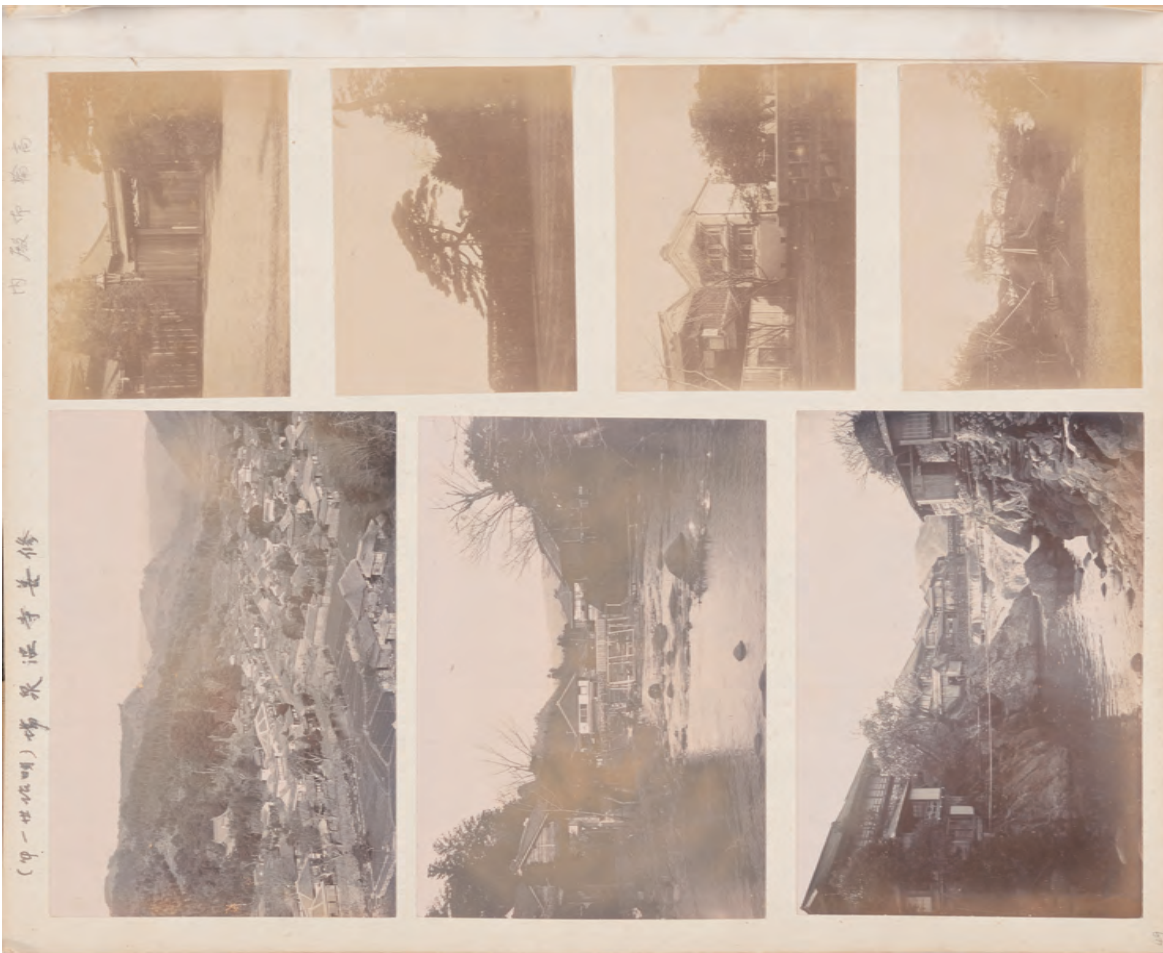
常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿

常宮周宮
両殿下御親写

常宮周宮

御親写

- 402. 常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿 (井戸)
- 399. 有栖川宮威仁親王
- 403. 常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿 (プランコ)
- 400. 常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿
- 404. 常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿 (加賀藁ノ御用掛)
- 401. 常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿
- 405. 常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿 (御女中)



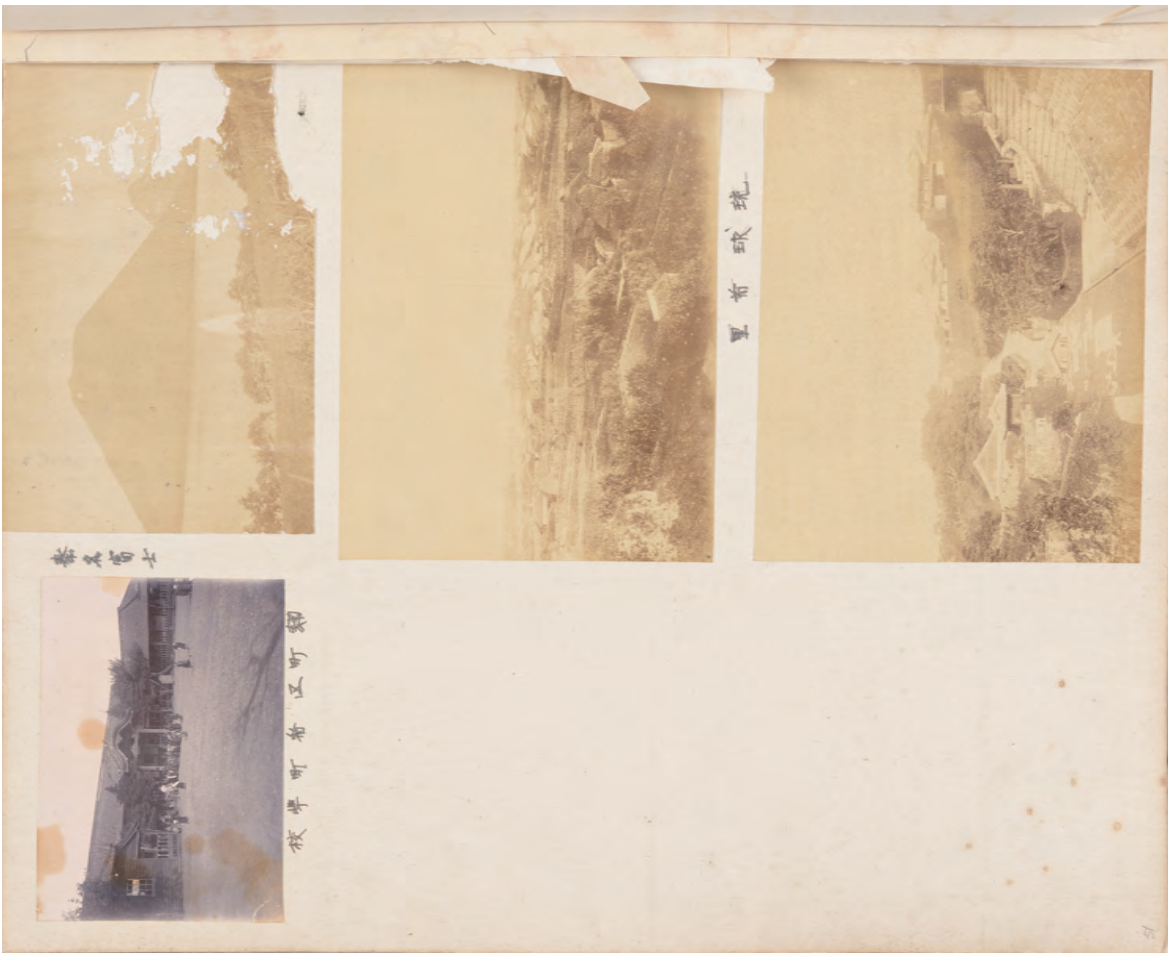
高輪市役所

(明治一十年) 修善寺温泉

- 410. 修善寺温泉
- 406. 常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿
- 411. 修善寺温泉
- 407. 常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿
- 412. 修善寺温泉
- 408. 常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿
- 409. 常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿



白紙



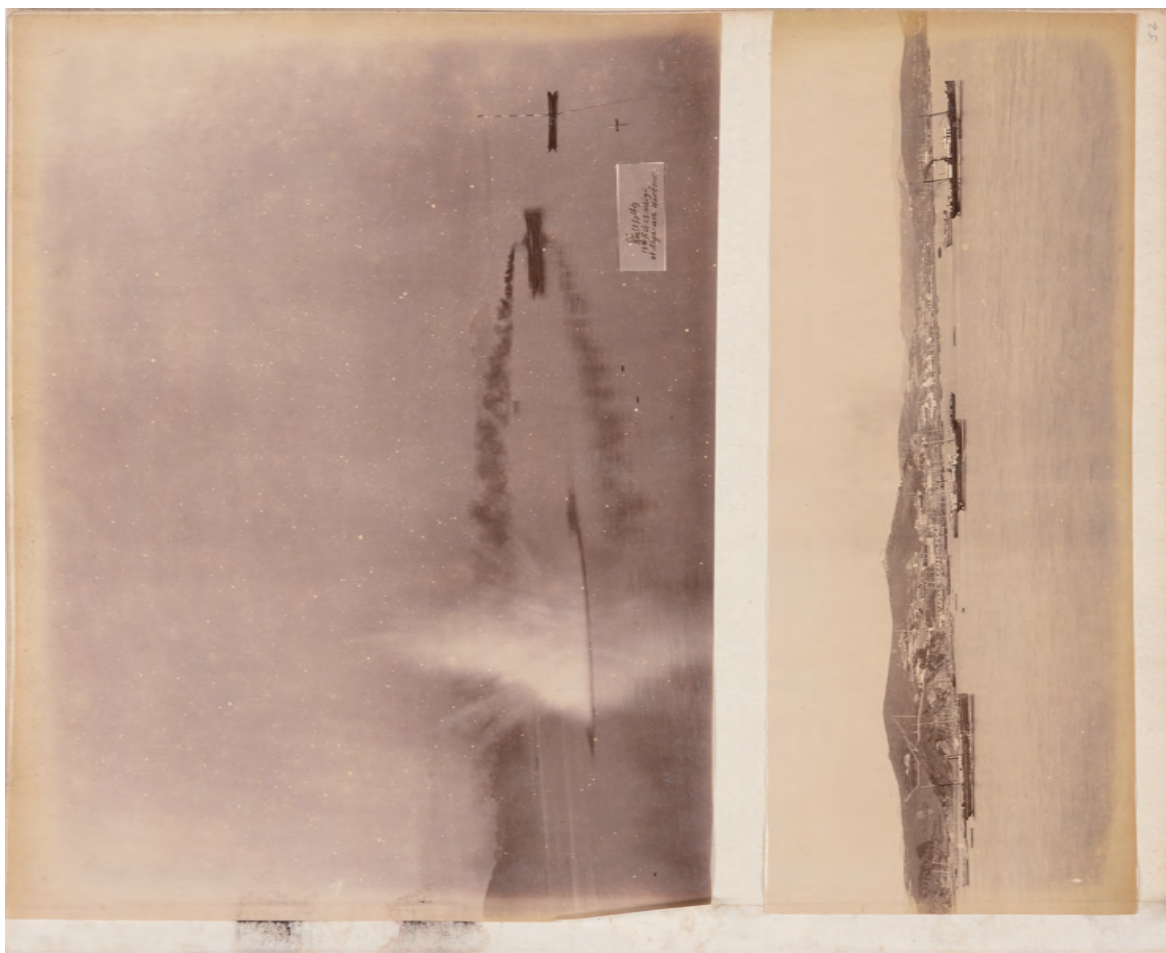
416. 支那町番学校
 413. 秦名富士
 414. 琉球首里
 415. 琉球首里



420. 龍華寺 清水港附近 417. 琉球首里の城門
 418. 瀬戸の弁天嶋
 421. 朝鮮人 419. 水雷艇



422. ナガラウラ港
 424. 朝鮮の素人 423. 人物 6名



425. ナガウラ港
426. 港



427. 海軍大学校内
429. 琉球首里 428. 朝鮮京城



島宮川登

430. 海軍大学校内カ
431. 芸州宮島



河内南浦春登閣聖運

ニエカトワツ春登閣聖運



春登閣聖運

432. フット・アールン
433. 安芸国廣島紅葉谷



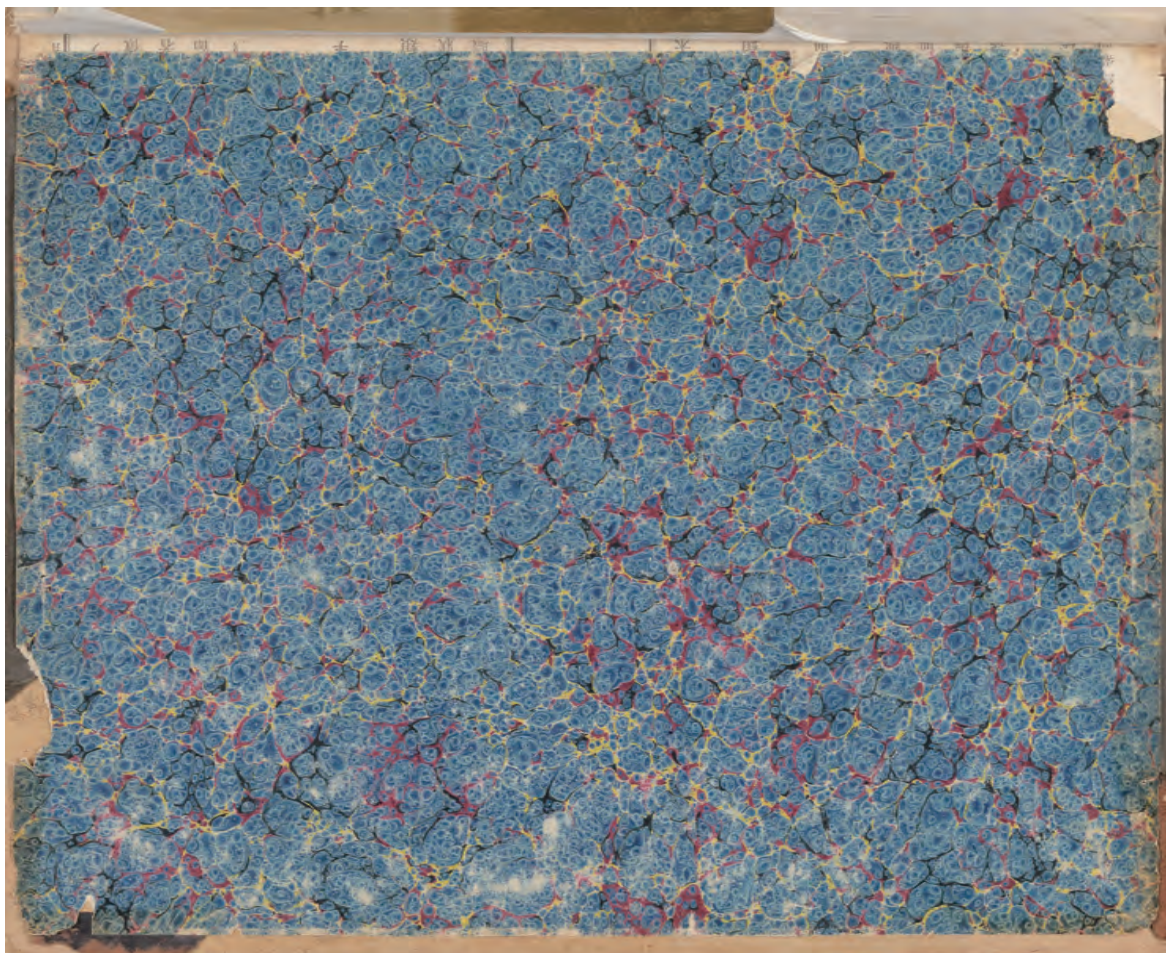
434. 築地海軍大学校内
 437. 軍艦敷島上の赤道祭
 435. 軍艦敷島上の赤道祭
 436. 練習艦乾行
 438. 画像不詳



439. 軍艦愛宕
 441. 軍艦上の相撲
 440. 軍艦
 442. 画像不詳



443. 白蝕観測カ
444. 宮殿カ

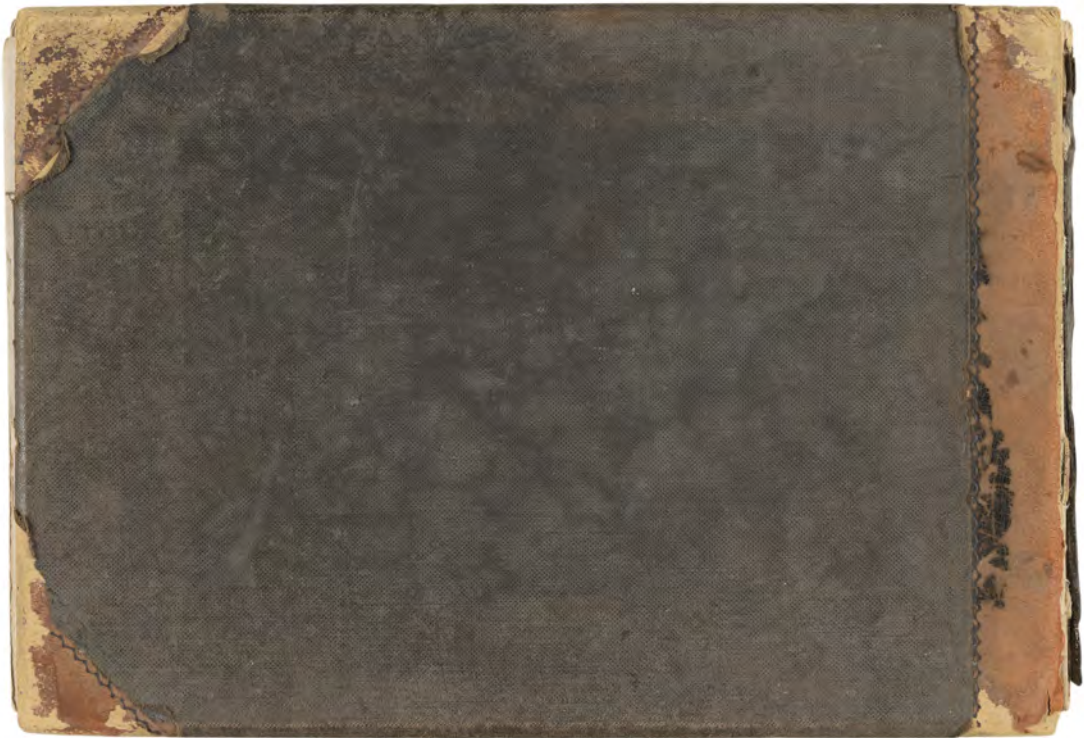


裏表紙見返し



裏表紙

図版編
アルバム4
- 黒小型 -



表表紙

本報告書のノドをアルバムのノドと見立て、アルバム（右綴じ）の見開き状態を再現できるようレイアウトした。
報告書の見開き2頁に上下段でアルバム4頁分の画像を配置しているので、掲載順は上段右→上段左→下段右→下段左となっている。



白紙



446. 軍艦愛宕 445. 木村浩吉
447. 軍艦愛宕上海英泊中の状況



表表紙見返し



白紙



453. 綿花輸出の状況 451. イギリス艦ピーク
454. 綿花輸出の状況 452. 綿花輸出の状況



458. 上海海関前の埠頭
459. フランス租界の埠頭



450. 日本陸軍上海駐屯軍 448. イギリス東洋艦隊司令長官副官
449. 艦員



457. 上海ガーデンブリッジ 455. 上海日本領事館・ドイツ領事館
456. 上海日本郵船会社の埠頭



464. 上海公園門外のドイツ艦イルチス号記念 463. 上海公園
462. 葬儀の行列



469. 上海ホンキウ区の市場 468. 上海ホンキウ区の市場
470. 水道管および貯水塔



460. 浦東の埠頭
461. 葬儀の行列



467. 上海愚園内の茶亭 465. 上海近郊の宝塔
466. 葬儀の行列



478. 杭州西湖 (左上) 476. 杭州府呉山より西湖を眺む
479. 杭州西湖 (左下) 477. 杭州西湖 (右下)



483. 銭塘江のボアを観る人々 482. 銭塘江のボア (潮津波)(左)
485. 呉山より西湖の蘇堤を眺む



杭州領事館内の四角亭

蘇州北寺塔

蘇州吳山西施洞

杭州府吳山より西湖を眺む

蘇州寒山寺

474. 杭州領事館内の四角亭 472. 蘇州北寺塔 471. 蘇州吳山西施洞
475. 杭州府吳山より西湖を眺む 473. 蘇州寒山寺



ル邊+近 Bore

錢塘江の潮の波

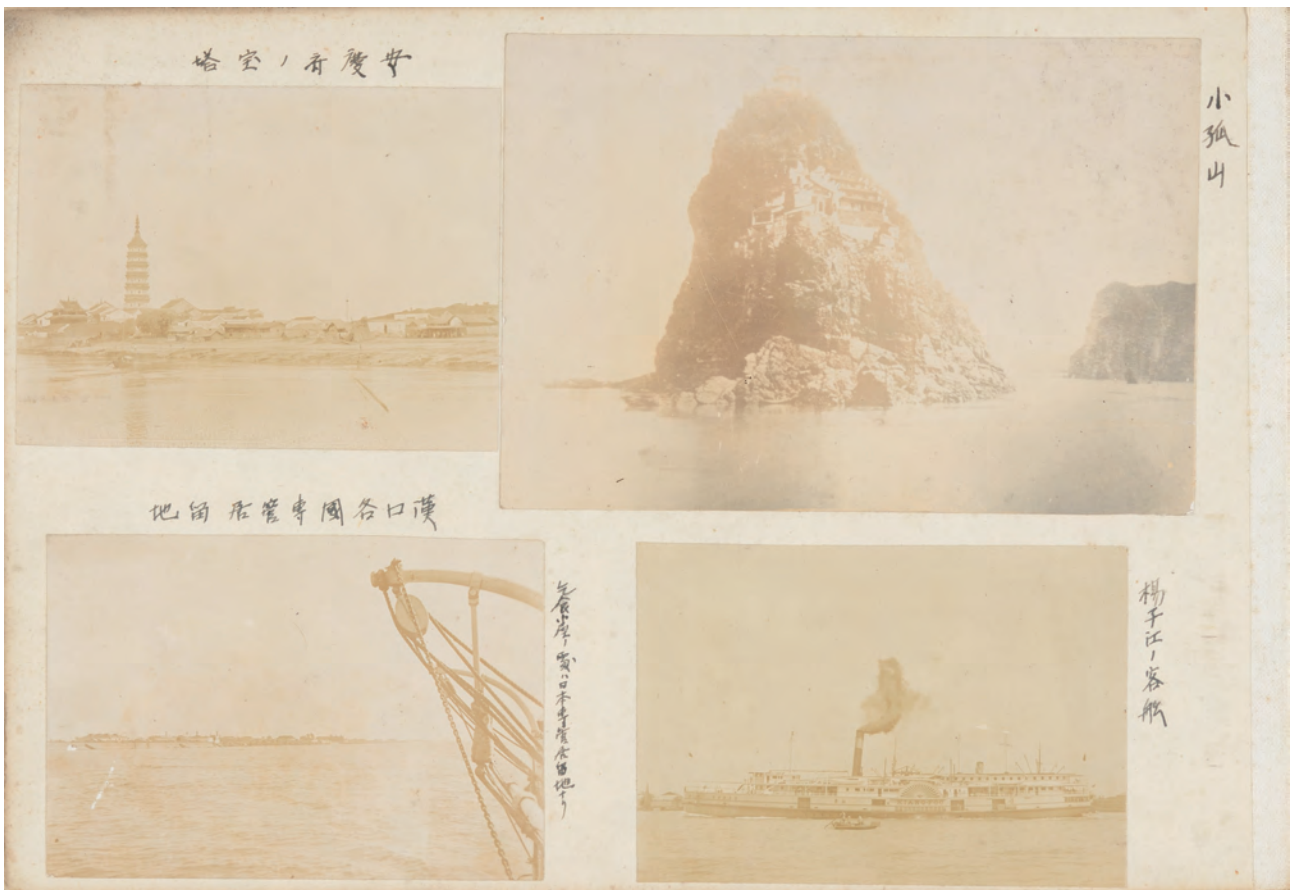
錢塘江の潮の波

吳山より杭州府を眺む

481. 錢塘江のボア(潮津波)(中央) 480. 錢塘江のボア(潮津波)(右)
484. 吳山より杭州府を眺む



489. 北京城内の天文堂
490. 墓所 488. 北京城



497. 安慶府の宝塔 495. 小孤山
498. 漢口の各国專管居留地 496. 楊子江の客船 KIANG-FOO



白紙



502. 上海における天長節祝賀会



上海競馬所
毎年七月初旬、催す

上海端艇競漕

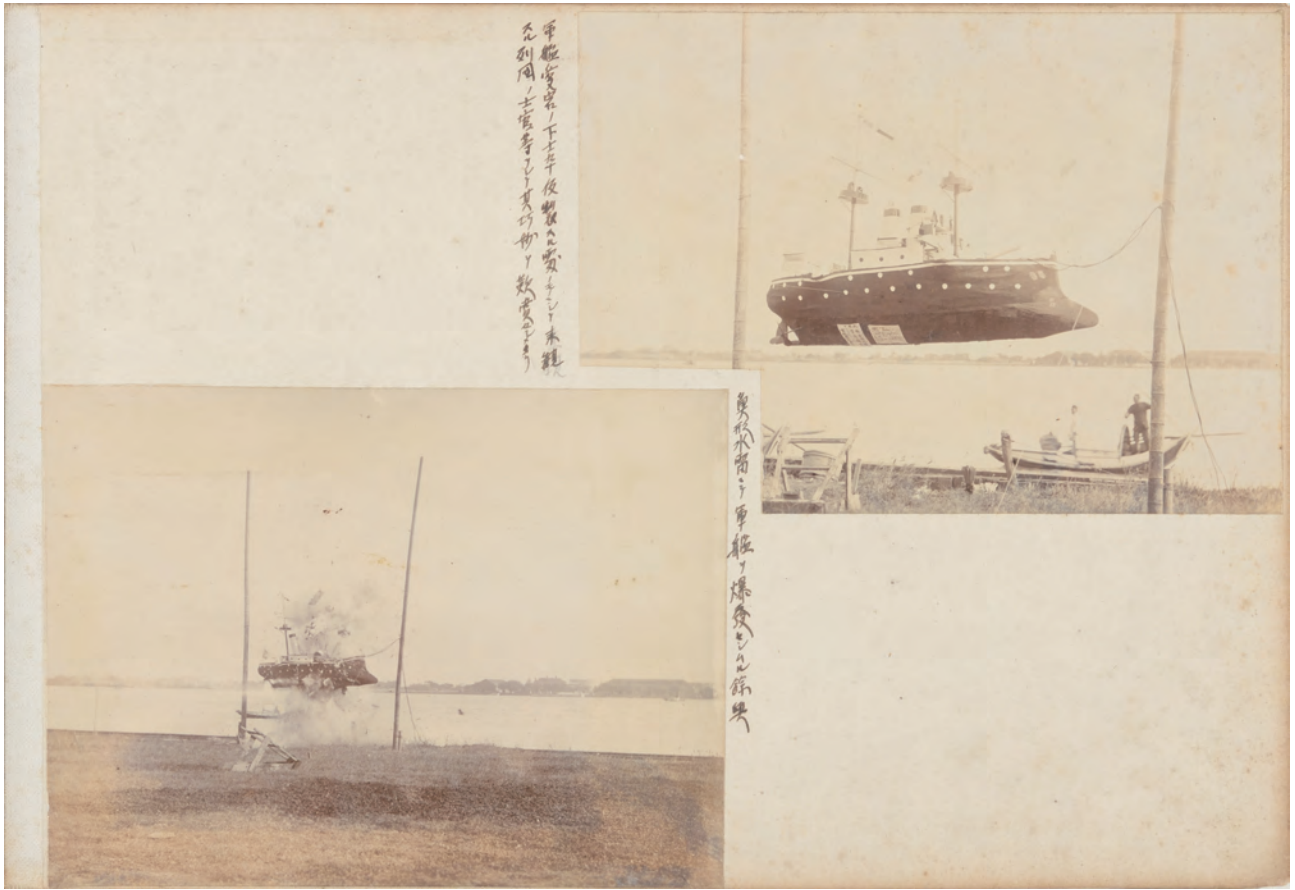
505. 上海競馬所
506. 上海端艇競漕



明治三十四年七月、嚴島副長時代、釜山、於て、戯、字、す、
齡、四、十

明治三十五年九月、愛宕艦長時代、上海、於て、字、す、
齡、四、十、一

508. 木村浩吉 507. 木村浩吉



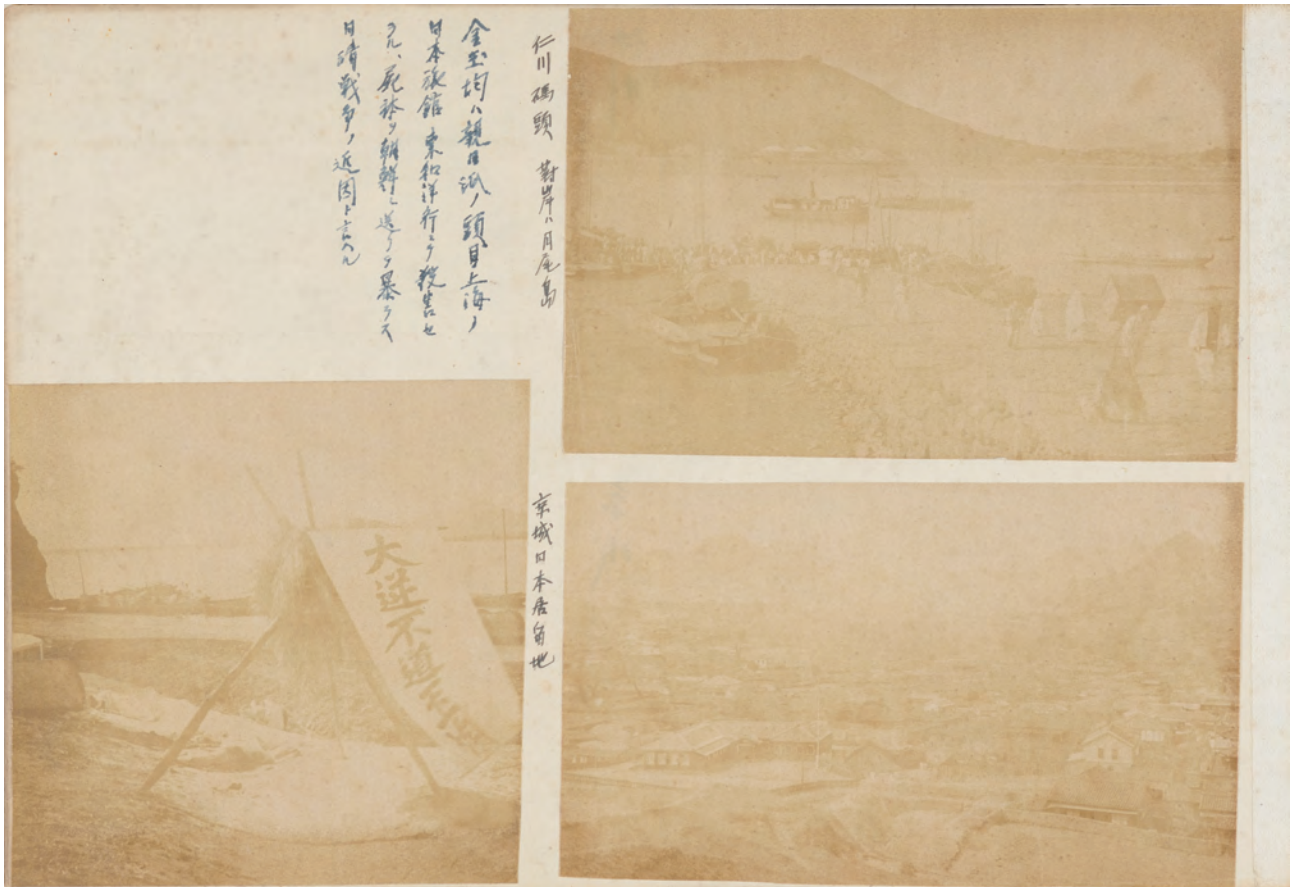
503. 軍艦模型 504. 水雷による軍艦模型爆破の余興



白紙



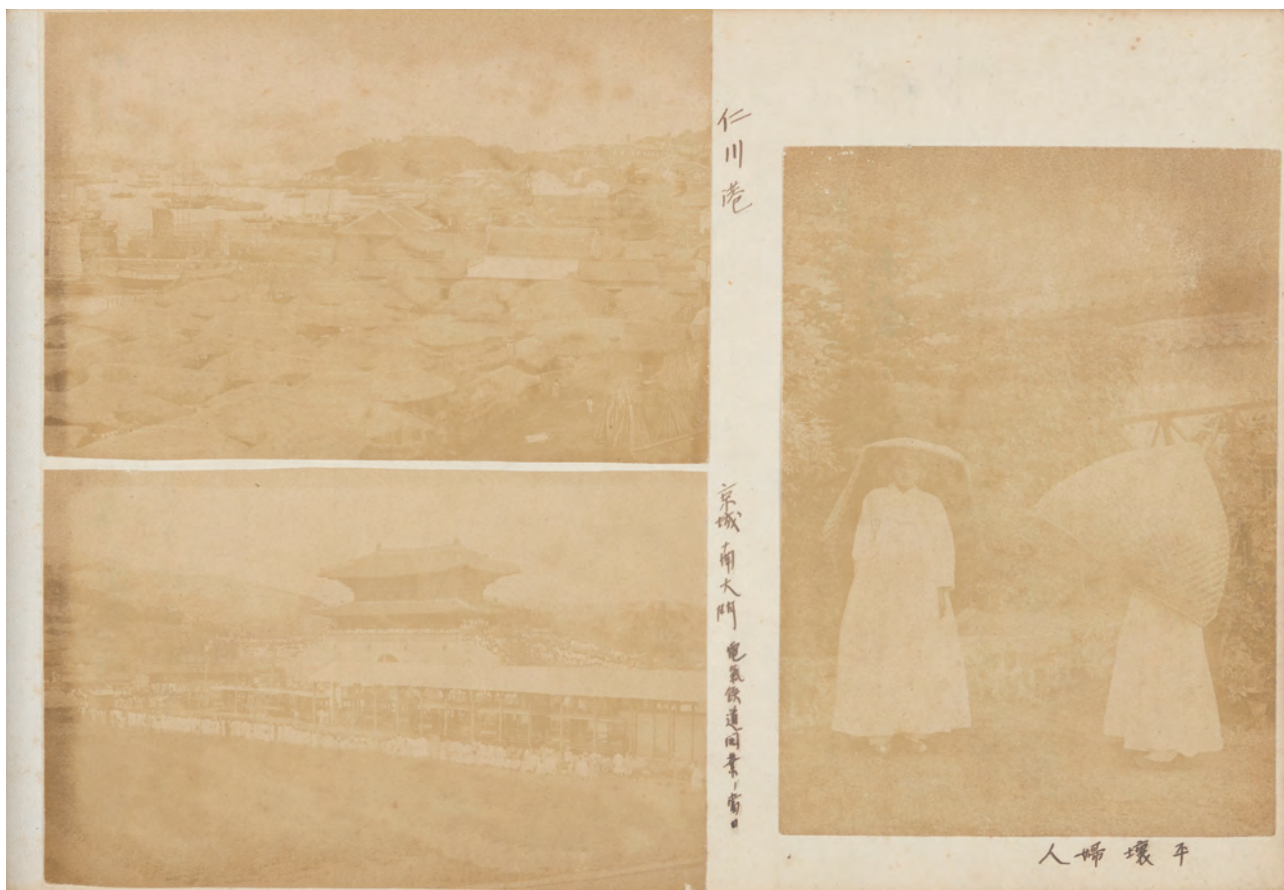
510. 釜山港 (左部) 514. 朝鮮官人夫婦 513. 京城南山の日本公使館



518. 仁川の埠頭 520. 金玉均の晒首の現場 519. 京城の日本居留地



509. 釜山港 (右部)
512. 京城南山の日本公使館カ 511. 飲酒中の朝鮮人



516. 仁川港
517. 京城南大門 515. 平壤の婦人



522. シヤム王宮



王命ノ演戯

首府バンコク王宮内

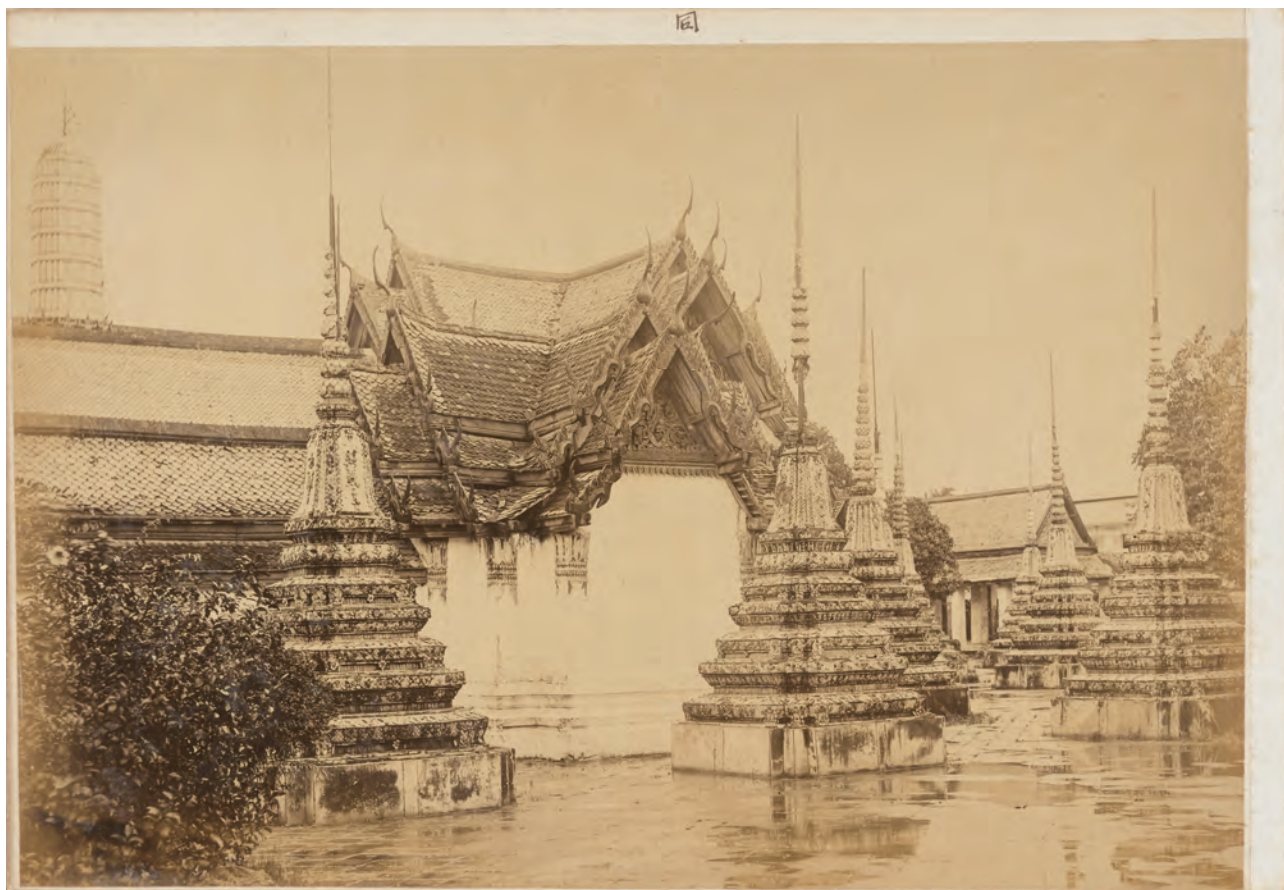
524. バンコク王宮内の演戯



521. シャム国王・王妃



523. 湄南河畔離宮



526. 寺院



529. シヤムの下流社会の婦人 528. シヤムの上流社会の令嬢



525. 寺院



527. ワット・アルン



531. 水牛の休憩



533. マニラ BINONDO



530. マニラ・パシグ河口



532. マニラ PACIG RIVER



535. ビノンド教会カ



白紙



534. マニラ PLAZA DE MORAGA ST.



536. 軍艦扶桑乗組士官



白紙

踏破ノ地

本邦諸島 小笠原群島父島、奄美大島、沖縄島、鹿児島

朝鮮 仁川、釜山、元山、鎮海、京城、平壤、長湍、江華、南浦、海州、鎮南浦、新義州

露領 ウラジストク、大連、小樽島、旅順港、大出羽島

支那 安東縣、奉天、上海、南京、杭州、蘇州、吳城、青島、九江、漢口、岳州、長沙

英領 香港、新嘉坡、コロムボ、アムン、ホーランド、スマタ、ジャバネー

佛國 アレキサンダリア、マニラ、フィリピン、バグ、アムン、アレキ

英國 龍巖、ハルビン、モスクワ、シベリア、エチオピア、フランス、ドイツ、オーストリア

南洋 マニラ、瓜哇、ハバネー、バタヴィヤ、暹羅、スマタラ

支那 北京、天津、ハルビン、バフコト、新西伯リア、タイランド

生地 武蔵國江戸、芝新渡庄 父文尾年辛酉七月廿二日誕生

父 士敏、木村友井 母長子八重 幸市川十善、新早名子、茶畑子、乾

奉職履歴

明治十四年十月 兵部省 兵部官給使漢字ノ為ニ就任、警部省 警部官給使

明治十五年二月 土音 漢字 航海 (シベリア、海軍) 兵部省、兵部 兵部官給使、兵部 兵部官給使

明治十六年二月 土音 朝鮮國 警備ノ為ニ出使、朝鮮國 警備 五月十日 假朝

明治十八年八月 土音 海軍 少将、銃正八位

明治十九年二月 土音 水雷 海軍 九月六日 假准、海軍 少将

明治廿一年十月 土音 任海軍 大尉、銃正 任官 立書

英領 (支那) 明治廿二年 水雷 海軍 警備 巡警 警備 官 立書 立書 立書 立書 立書 立書 立書 立書 立書 立書

明治廿四年 一月 土音 警備 支那 警備 官 立書 立書 立書 立書 立書 立書 立書 立書 立書 立書

木村浩吉「踏破ノ地」および「奉職履歴」



537. 水雷母艦日光丸



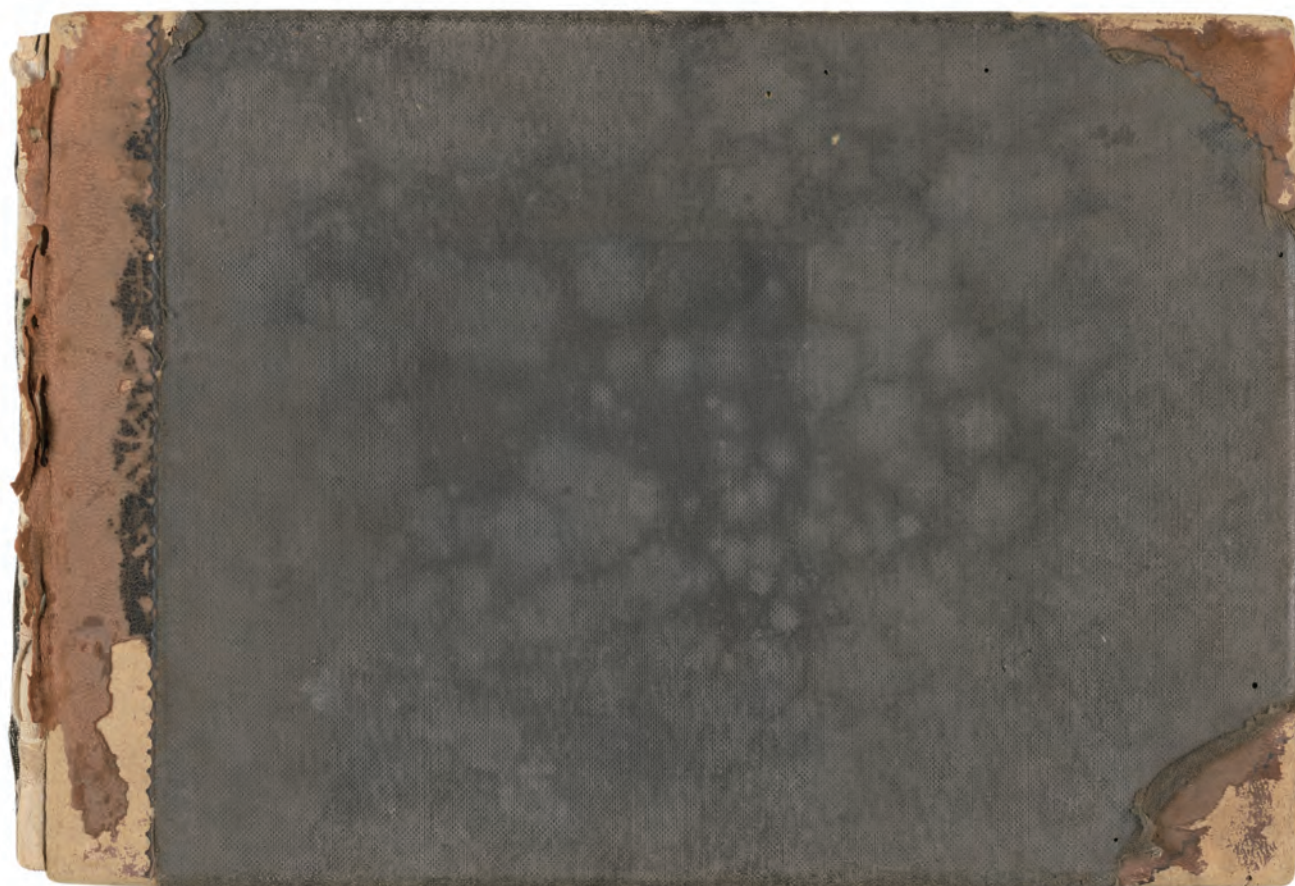
白紙



白紙



裏表紙見返し



裏表紙

目録編

木村喜毅関係古写真資料目録

ガラス板写真

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	厚み mm	年代	制作者・写真館等	備考
001	John Mercer Brooke	コロジオン湿板 アンプロタイプ	9.75 × 8.99 × 2.07	6.9 × 5.5				ID067・ID099と同一イメージ
002	男性	コロジオン湿板 アンプロタイプ	11.7 × 9.3 × 2.21	8.7 × 5.3			William Shew	ID100と同一イメージ、旧目録では、被写体をエドワード・M・カーンと推定
003	木村喜毅	コロジオン湿板 アンプロタイプ	13.1 × 11.0 × 2.28	8.1 × 5.0		元治元(1864)年 9月	横山松三郎	ID022・ID074・ID086・ID148と同一イメージ、木箱蓋裏墨書「撰陽心斎橋北街/写真師/中川伸輔(花押)㊦」
004	木村喜毅	コロジオン湿板 アンプロタイプ	12.8 × 9.3 × 1.87	8.8 × 5.7		元治元(1864)年 9月	横山松三郎	木箱蓋裏墨書「甲子菊秋/35jaar」
005	木村利子・浩吉・弥重	コロジオン湿板 アンプロタイプ	9.3 × 11.7 × 1.88	6.2 × 8.8		元治元(1864)年 9月	横山松三郎	ID150に部分複写あり、木箱蓋裏墨書「甲子菊秋/35jaar」、ID003の蓋と推定される
006	木村清子・利子・浩吉・弥重	コロジオン湿板 アンプロタイプ	9.4 × 11.8 × 1.88	5.4 × 8.8		元治元(1864)年 9月	横山松三郎	木箱蓋裏墨書「甲子歳菊月/32jaar/4jaar/14jaar/2jaar/(翼筆)元治元年」
007	木村弥重	コロジオン湿板 アンプロタイプ	10.2 × 8.2 × 1.83	8.6 × 5.7	1.5	元治元(1864)年 9月	横山松三郎	木箱蓋裏墨書「甲子菊月/32jaar」
008	芝新钱座の木村郎	コロジオン湿板 アンプロタイプ	11.6 × 9.2 × 1.91	8.8 × 6.5		元治元(1864)年 9月	横山松三郎	ID081㉔・ID149と同一イメージ、木箱蓋裏墨書「甲子九月/神仙座」
009	芝新钱座の木村郎 團體	コロジオン湿板 アンプロタイプ	11.7 × 9.3 × 1.9	10.0 × 8.0	2.2	元治元(1864)年 9月	横山松三郎	ID081㉔・ID149と同一イメージ、木箱蓋裏墨書「甲子九月/神仙座團體」
010	木村喜毅	コロジオン湿板 アンプロタイプ	13.0 × 10.8 × 2.11	10.7 × 8.8	2.6	慶応元(1865)年 8月1日	中川信輔	ID147と同一イメージ、木箱蓋裏墨書「乙丑秋八月初一日写真于浪華客舎/楷堂/時年卅又六」撰陽心斎橋北街/写真師/中川伸輔(花押)㊦
011	木村喜毅	コロジオン湿板 アンプロタイプ	13.0 × 10.8 × 2.20	10.6 × 9.0	1.8	慶応元(1865)年 7月24日	中川信輔	木箱蓋裏墨書「慶応元秋孟念四日写真于浪華客舎/楷堂/36jaar」撰陽心斎橋北街/写真師/中川伸輔(花押)㊦
012	木村喜毅	コロジオン湿板 アンプロタイプ	9.2 × 7.8 × 1.92	6.5 × 5.0			中浜万次郎カ	ID091と同一イメージ、万延元(1860)年と推定
013	木村弥重・利子	コロジオン湿板 アンプロタイプ	9.2 × 8.0 × 1.93	6.5 × 5.0			中浜万次郎カ	ID092と同一イメージ、万延元(1860)年と推定
014	木村弥重	コロジオン湿板 アンプロタイプ	9.7 × 7.5 × 1.67	7.3 × 5.3				
015	木村弥重	コロジオン湿板 アンプロタイプ	9.6 × 7.3 × 1.87	6.8 × 4.8				
016	木村浩吉	コロジオン湿板 アンプロタイプ	9.7 × 7.3 × 1.68	7.0 × 5.0		明治11(1873)年 8月18日		木箱裏墨書「明治十一年、木箱裏墨書「明治十一年八月十八日写之/海軍兵学校生徒木村浩吉/十六年十一月ヶ月」、木箱蓋裏墨書「光陰如駛箭独槐(挿入)「学」無成肖像星霜見雄飛約朧程/戊寅 新生書」
017	木村浩吉・学友	コロジオン湿板 アンプロタイプ	11.5 × 9.0 × 1.72	10.3 × 7.6	2.1	明治15(1882)年 11月21日		木箱裏墨書「明治十五年十一月廿一日/端舟競漕遊覧之后浅草公園尙存之際依浅羽子之筭言請諸君写之」、木箱蓋裏墨書「浅羽金三郎/遠山政行/加藤定吉/大城源三郎/井上保 木村浩吉/㊦(東京浅草公園地内 渡辺)」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	厚み mm	年代	制作者・写真館等	備考
018	木村弥重・家族一同	コロジオン湿板 アンプロタイプ	11.0 × 14.0 × 1.66	8.6 × 12.0	2			
019	木村喜毅	コロジオン湿板 アンプロタイプ	10.7 × 9.1 × 2.16	9.0 × 7.7	1.4	慶応元(1865)年 7月24日	中川信輔	木箱蓋裏墨書「乙丑秋七月念四日写真/於浪華寓舎/毅」[36 jaaren]「撰 陽心斎橋北街/写真師/中川信輔(花押) ㊦」
020	木村喜毅・弥重	ゼラチン乾板	16.3 × 12.0		1.8			包紙裏墨書「木村家行、包紙裏墨書「きむら / 撰津守 / 御夫妻」
021	木村駿吉	ゼラチン乾板	16.3 × 12.0		1.5			包紙裏墨書「木村駿吉 / 文官で / 旭日勲三等を受けることは特別の事也」
022	木村喜毅	ゼラチンシルバー プリント		9.3 × 7.0				複写、ID003・ID074・ID086・ID148と同一イメージ

紙焼き写真

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	制作者・写真館等	備考
023	木村喜毅	POP	10.9 × 6.6	9.6 × 6.3		丸木利陽	台紙裏墨書「木村芥舟」
024	木村喜毅・弥重	POP	16.2 × 11.9	14.4 × 10.2	明治27(1894)年		墨書「明治貳拾七年写ス / 八重子(弥重) / 芥舟翁」
025	木村弥重	鶏卵紙	16.6 × 10.9	14.4 × 10.3	明治32(1899)年 10月14日		ID079と同一イメージ、台紙裏墨書「明治三十二年十月十四日 / 芦荳理 学士撮影」、ペン書「七代 木村芥舟妻 弥重」
026	木村弥重	ゼラチンシルバー プリント	21.8 × 14.0	13.7 × 9.5	大正4(1915)年	小石川安藤坂下 / 吉見節	台紙裏墨書「今上天皇陛下大正四年十一月十日ヲ以テ御即位ノ大札 (...) 木村弥重記」
027	木村弥重	ゼラチンシルバー プリント	22.7 × 14.9	13.0 × 9.1	大正11(1922)年 10月	小石川安藤坂下 / 吉見写真館	台紙裏墨書「御沙汰 / 養存ヲ嘗ラ問フハ人ニ孝ヲ教フル所以ナリ (...) (大正4年11月10日 養老并賑恤につき天皇沙汰の写し)、墨書内容は ID160と同一
028	木村謙吉	POP	10.8 × 6.6	9.5 × 6.3	明治27(1894)年 10月12日	丸木利陽	台紙裏墨書「木村謙吉 / 二年九月 / 明治廿七年十月十二日新影」
029	木村浩吉・静子	POP	10.8 × 6.6	8.9 × 5.8	明治31(1898)年 10月16日	丸木利陽	
030	木村静子	POP	10.8 × 6.6	8.9 × 5.8	明治31(1898)年 10月16日	丸木利陽	台紙裏墨書「明治卅一年十月十六日写ス / 静子満四年」
031	木村よし子	POP	10.7 × 6.4	8.9 × 5.8		東京九段坂 / 佐藤華江	
032	木村家家族	ゼラチンシルバー プリント	12.2 × 14.8	9.6 × 13.9	明治44(1911)年 1月		ID185と同一イメージ
033	木村家家族	ゼラチンシルバー プリント	20.3 × 24.5	9.6 × 13.8	大正4(1915)年 1月1日	小石川安藤坂下 / 吉見節	ID186と同一イメージ
034	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	26.0 × 32.3	14.2 × 9.9	明治38(1905)年		墨書「日露戦争ノ節水雷母艦日光丸艦長トシテ長崎港ニ碇泊中 / 明治 三十八年 / 年齢四十四」、ID035と同一台紙の表裏に貼付
035	木村千子	POP	26.0 × 32.3	8.8 × 5.5	明治38(1905)年7月	丸木利陽	墨書「昭和五年四月三十日 莽町より」、ID034と同一台紙の表裏に貼付
036	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	31.3 × 24.4	20.1 × 13.8	明治43(1910)年 3月31日		台紙裏墨書「静子ニ与フ / 海軍少将(抹消)「正五位」(朱書)「従四位」 勲三等功四級 / 木村浩吉 / 年齢四十八年七ヶ月(朱書)「文久元年七月廿 三日生」 / 明治四十三年三月末日写ス」
037	木村浩吉・千子	ゼラチンシルバー プリント	32.6 × 23.1	19.2 × 13.2	昭和6(1931)年 5月3日	A.MORIKAWA	台紙裏墨書「昭和六年五月三日写ス / 七十一歳翁 木村浩吉 / 文久元年七 月廿三日生 / 六十一歳媼 木村千子 / 明治四年一月三十日生」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	制作者・写真館等	備考
038	木村弥重	POP	10.8 × 6.6	9.2 × 6.1		広島市細工町 / 松井	
039	木村浩吉	鶏卵紙	16.5 × 10.6	14.3 × 10.2		GLASGOW/ WRALSTON	ID154と同一イメージ、台紙裏ペン書「明治十四年 英国グラスゴー府」 アルバム2のうち同一の貼紙2点あり
040	木村浩吉・静子	鶏卵紙	10.8 × 6.6	9.0 × 5.8		丸木利陽	
041	福沢諭吉	POP	16.7 × 11.6	14.1 × 9.8	明治 33(1900) 年 5月	丸木利陽	台紙裏墨書「明治三十三年五月写真 / 諭吉 / 木村芥舟様」
042	福沢諭吉	ゼラチンシルバー プリント	25.9 × 20.0	17.0 × 11.9			
043	有栖川宮威仁親王	鶏卵紙	16.7 × 10.9	14.0 × 9.8	明治 30(1897) 年 11 年 25日	丸木利陽	墨書「Yorihito/Le 25. Nov / 97」
044	有栖川宮威仁親王妃	鶏卵紙	16.5 × 10.8	14.7 × 10.2		東京一番町 / 武林盛一	
045	徳川達孝伯夫人	鶏卵紙	17.2 × 12.8	14.5 × 10.3			
046	今泉政子・源幸	鶏卵紙	10.8 × 6.6	9.2 × 5.9	明治 27(1894) 年 3月	鹿児島西本願寺脇 / 春日仲朝	台紙裏墨書「明治二十七年三月写之 / 今泉政子 / 五年ハヶ月 / 同源幸 / 二 年五ヶ月 / 木村興様へ」
047	女性	鶏卵紙	10.8 × 6.4	9.4 × 5.9		仙台市東一番町 / 白崎民治	旧目録では今泉政子と推定
048	長谷川正道	鶏卵紙	11.3 × 6.6	8.9 × 5.9			墨書「長谷川正道殿」
049	築山清智	鶏卵紙	11.3 × 6.6	9.6 × 5.9			墨書「築山清智殿」
050	神田乃武	鶏卵紙	11.4 × 6.7	9.5 × 5.9			墨書「神田乃武殿」
051	浜口英幹	鶏卵紙	11.3 × 6.6	9.1 × 5.8			墨書「浜口英幹殿」
052	男性	POP	10.9 × 6.7	9.3 × 5.9		丸木利陽	
053	奥山政敬・市川盛三郎	鶏卵紙	10.4 × 6.3	9.2 × 5.7		OSAKA/ NAKAMURA MASSATOMO	台紙裏墨書「奥山政敬 / 市川盛三郎」
054	小笠原長生	鶏卵紙	16.2 × 10.5	14.8 × 9.8		鈴木真一	台紙裏墨書「呈 木村浩吉君 / 海軍大尉従四位子爵小笠原長生」
055	奥山政敬	鶏卵紙	16.6 × 10.7	14.9 × 10.3			墨書「奥山政敬殿」
056	久保田彦七	ゼラチンシルバー プリント	18.5 × 9.6	15.1 × 8.0	明治 41(1908) 年	香港	台紙裏墨書「木村老先ニ進呈ス / 四十一年九月三十日 / 久保田彦七」
057	市川兼恭	鶏卵紙	15.7 × 11.9	14.7 × 10.0			墨書「学士会員市川兼恭殿及夫人富子」
058	男性	POP	16.7 × 11.7	14.1 × 9.8		丸木利陽	
059	女性	POP	16.6 × 11.6	14.1 × 9.8		丸木利陽	
060	向山家近親一同	ゼラチンシルバー プリント	24.8 × 27.4	13.2 × 20.1		牛込区甲良町 / 橋本	台紙裏墨書「昭和二年三月廿七日採影 / 向山家御近親御一同 / 偶老夫婦ハ 向山家之御兄妹御嬢備近々ノ内御奉行ニ付祝賀之意ヲ表スル為メ向山家 ニ伺ヒタル如特別之訳ヲ以テ列席ヲ許サレタリ」
061	男性	鶏卵紙	21.5 × 13.2	19.0 × 12.5			
062	ロシアへの派遣留学生	ゼラチンシルバー プリント		11.0 × 15.2			写真ペン書「魯国留学生 慶応二年於ベテルブルグ (...)」
063	威臨丸	ゼラチンシルバー プリント	22.8 × 32.0	14.0 × 23.9			台紙墨書「徳川幕府軍艦威臨丸」、印刷物の複写

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸（印画紙・イメージ） 縦×横 cm	年代	制作者・写真館等	備考
064	朝陽丸	ゼラチンシルバー プリント	19.3 × 24.3	10.5 × 14.9			台紙裏墨書「軍艦朝陽/朝陽の写真入用の為め威臨丸之船型ニ視リ描写の 拙筆御覧に入れ候/昭和八年十一月/文倉平次郎」、絵画の複写
065	カリフォルニア州知事 John G. Downey	鶏卵紙	34.2 × 27.9	27.0 × 20.0			ID096 と同一イメージ
066	J.P. Havin	鶏卵紙	34.2 × 27.8	29.7 × 23.1			ID097 と同一イメージ
067	John Mercer Brooke	発色現象方式印画		23.6 × 20.3			複写、ID001・ID099 と同一イメージ
068	フェニモア・クーパー号日本沿岸実測中の図	発色現象方式印画		20.7 × 30.5			ID104 と同一イメージ
069	インターナショナルホテル	鶏卵紙	28.7 × 37.7	23.2 × 31.9			
070	海軍兵学家	POP	10.7 × 16.5	8.5 × 14.5	明治 7・8 (1874・1875) 年頃		台紙裏墨書「海軍教授小花万次君贈与/海軍兵学家/明治七八年頃ノ撮影」
071	仏国軍港	鶏卵紙		19.8 × 27.0		RICHARD ELLIS	
072	軍艦	鶏卵紙	21.0 × 27.9	20.7 × 27.3			
073	軍艦	鶏卵紙	21.0 × 27.9	20.3 × 26.7			
074	木村喜毅	ゼラチンシルバー プリント	52.3 × 40.7	43.2 × 35.5			複写、ID003・ID022・ID086・ID148 と同一イメージ
075	木村喜毅	ゼラチンシルバー プリント		50.8 × 38.8			ID083 と同一イメージ、写真鉛筆書「文久元年三十二才 威臨丸乗組水 兵の撮影せるものと云はれる」
076	木村喜毅	ゼラチンシルバー プリント	額サイズ 50.3 × 46.7	38.7 × 27.9			ID078 の部分拡大イメージ、額裏墨書「摂津守嘉毅晩年の写真/木村芥 舟 七十才/明治三十二年十月十四日/芦荳理学士撮影/土手三番町邸にて」
077	福次論吉	コロタイプ印刷	50.0 × 37.5	38.4 × 28.2			

アルバム 1

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸（印画紙・イメージ） 縦×横 cm	年代	備考
-	青表紙アルバム		34.7 × 24.0 × 1.6 ~ 2.5			
078	木村喜毅	鶏卵紙	14.0 × 10.1		明治 32(1899) 年 10 月 14 日	台紙裏鉛筆書「木村芥舟」、ID076 は ID078 の部分拡大プリント
079	木村弥重	鶏卵紙	13.6 × 10.1		明治 32(1899) 年 10 月 14 日	ID024 と同一イメージ
080	木村邸の家族	鶏卵紙	10.1 × 14.0		明治 32(1899) 年	ID162 と同一イメージ
081	①芝新銭座の木村邸の團體 ②芝新銭座の木村邸	ゼラチンシルバー プリント	9.2 × 14.0	① 8.5 × 6.2 ② 8.5 × 6.3		①：複写、ID009・ID149 と同一イメージ ②：複写、ID008・ID149 と同一イメージ
082	木村千子・静子	鶏卵紙	14.2 × 10.1		明治 32(1899) 年	写真鉛筆書「木村千子 小女静子」
083	木村喜毅	鶏卵紙	8.8 × 5.6			ID075 と同一イメージ
084	木村喜毅	鶏卵紙	9.8 × 5.9	印画紙：8.9 × 5.9 イメージ：7.6 × 5.5		鉛筆書「木村芥舟」
085	木村弥重	鶏卵紙	9.6 × 5.8			写真鉛筆書「芥舟妻弥重」
086	木村喜毅	POP またはゼラチン シルバープリントカ	9.5 × 7.0			複写、ID003・ID022・ID074・ID148 と同一イメージ

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
087	木村喜毅	鶏卵紙	9.0 × 5.4			写真鉛筆書「木村図書」
088	位記・口宣案	ゼラチンシルバー プリント	10.6 × 21.0			ID218と同イメージ、上：位記 (木村喜毅叙従五位下) 下右：口宣案 (木村喜毅叙従五位下) 下左：口宣案 (木村喜毅任摂津守)
089	咸臨丸水夫の米国土産品	ゼラチンシルバー プリント	10.0 × 7.8			
090	サンフランシスコの新聞記事の抜書き	ゼラチンシルバー プリント	9.2 × 14.9			キャプション「幕末軍艦咸臨丸ノ著者文倉平次郎君寄贈」(San Francisco Bulletin 1860.3.19.号の抜粋)
091	木村喜毅	発色現像方式印画	9.1 × 7.9			複写、ID012と同イメージ
092	木村弥重・清子	発色現像方式印画	8.7 × 7.5			複写、ID013と同イメージ
093	メーア島海軍造船所	ゼラチンシルバー プリント	9.5 × 13.6			キャプション「ケビチインブルック氏 咸臨丸便乗者」(複写未成)「姓名不詳」(John G. Downey, Governor of California)
094	ハワイ王自筆の紋章	発色現像方式印画	8.2 × 11.6			キャプション「木村氏蔵」(亡父木村芥舟ノ遺物)
095	McDougall	鶏卵紙	16.4 × 11.2	14.4 × 9.8 附：4.1 × 4.4		墨書「マッキ・ゾーガル君」、裏面に鶏卵紙片 (4.1 × 4.4cm) が貼付されている
096	カリフォルニア州知事 John G. Downey	発色現像方式印画	9.7 × 6.6			ID065と同イメージ
097	J.P.Havin	発色現像方式印画	9.7 × 7.1			ID066と同イメージ
098	勝麟太郎	鶏卵紙	8.3 × 5.3			
099	John Mercer Brooke	発色現像方式印画	9.1 × 7.8			複写、ID001・ID067と同イメージ
100	男性	発色現像方式印画	9.0 × 7.1			複写、ID002と同イメージ、写真裏ペン書「STADIO NAME. WM SEW. MONTG stadio SAN FRANCISCO 1860 1988.1.14」
101	John Mercer Brooke	鶏卵紙	9.0 × 5.4			
102	福沢諭吉	鶏卵紙	9.1 × 5.9			ID189と同イメージ
103	咸臨丸難航図・木村浩吉識語	ゼラチンシルバー プリント	14.5 × 10.5			
104	フェモア・クーパー号日本沿岸実測中の図	刷物	11.6 × 15.5			ID068と同イメージ
105	フェモア・クーパー号日本沿岸実測中の図裏面	発色現像方式印画	14.3 × 10.7			墨書「福澤先生ニ托シテ送りタルモノ」(千八百六十七年五月二日ワシントンに於てカピタンジョンエムブルックより木村撰津守夫人江藤呈、キャプション「亡父木村芥舟ノ遺物」) 「慶應義塾図書館」
106	福沢諭吉	鶏卵紙	6.0 × 9.7	7.5 × 5.3	明治15(1882)年	
107	御座船	鶏卵紙	11.5 × 15.7	10.4 × 15.3		ID214と同イメージ
108	木村浩吉・弥重・駿吉・利子・清子	鶏卵紙	8.5 × 10.0	6.1 × 9.3	明治7(1874)年	
109	向山黄村	鶏卵紙	8.5 × 5.5			
110	大槻馨溪	鶏卵紙	8.9 × 5.9	7.6 × 5.4		
111	木村家家族	ゼラチンシルバー プリント	10.9 × 14.7		明治22(1889)年 5月27日	ID183と同イメージ、写真鉛筆書「東京芝白金清正公前ノ電高輪六七五〇番ノ唐沢写真館撮影」
112	木村謙吉	鶏卵紙	9.5 × 6.1			
113	赤松則良	鶏卵紙	8.8 × 5.4			
114	東久世通謙カ	鶏卵紙	8.8 × 5.5			
115	男性	鶏卵紙	9.0 × 5.6		明治3(1870)年 閏10月14日	写真墨書「庚午閏十月十四日写」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸(印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
116	木村浩吉	鶏卵紙	14.2 × 10.1		明治 22(1889) 年	ID154 と同一イメージ
117	木村千子	鶏卵紙	15.1 × 9.8		明治 22(1889) 年	ID155 と同一イメージ
118	木村千子	鶏卵紙	9.7 × 6.2			
119	木村浩吉	POP	14.8 × 10.7			
120	木村千子・謙吉	鶏卵紙	14.6 × 10.3		明治 25(1892) 年 4 月	裏書「明治 25 年 4 月写す」
121	木村君子・浩吉・千子	ゼラチンシルバー プリント	10.1 × 6.7		昭和 3(1928) 年 6 月 16 日	写真裏書「昭和参年六月十六日稲木繁之君撮影シテ贈与セラル」
122	木村和歌子・謙吉	鶏卵紙	9.0 × 5.9			
123	木村駿吉・香芽子	ゼラチンシルバー プリント	14.5 × 9.6			
124	木村香芽子・阿蒙・駿吉	鶏卵紙	14.0 × 10.1			
125	鈴木大三郎	鶏卵紙	8.5 × 6.3	7.6 × 5.4		
126	鈴木清子	鶏卵紙	9.5 × 5.8	7.6 × 5.2		
127	海軍兵学校卒業記念写真	POP	12.0 × 16.4	10.4 × 14.4	明治 6(1873) 年 1 月	裏書「海軍兵学校 設立明治三年 1870」「明治六年一月写 1873」, 写真裏書「原板八明治六年一月 昭和八年澤艦之丞道兵中尉家ニ於テ見出サレ復写サレシモノナリ 昭和十年三月現存ノモノ僅カニ二名 山田中将・細谷少将...」, 撮影者は内田九一カ
128	築地海軍英学校ノ図カ	POP	7.3 × 14.7			写真ペン書「水路部ノ山下鉄也君贈ルル 高島屋ニ催サレタル海軍博覧会ニ出品セラレタル尾佐竹博士君ノ錦絵ヲ写セシモノニアラザルカ 築地海軍英学校ト題セリ」
129	軍艦筑波	鶏卵紙	9.8 × 14.1		明治 20(1887) 年 11 月	
130	軍艦筑波	鶏卵紙	9.3 × 14.0	8.7 × 12.5	明治 20(1887) 年 11 月	
131	巡洋艦千代田	鶏卵紙	9.6 × 14.4			
132	軍艦	鶏卵紙	9.5 × 13.7			
133	軍艦松島	鶏卵紙	11.1 × 20.5			
134	箱根湯元の滝	POP	10.1 × 14.2		明治 26(1893) 年	
135	元箱根旧街道より	鶏卵紙	9.4 × 13.8			
136	箱根宮の下	鶏卵紙	9.4 × 13.8			
137	箱根声の湯松坂屋	鶏卵紙	9.8 × 14.0			
138	箱根声の湯紀伊国屋	鶏卵紙	9.3 × 13.7			
139	箱根声の湯紀伊国屋	鶏卵紙	6.0 × 9.6			
140	箱根湯本	鶏卵紙	9.4 × 14.0			
141	箱根湯本	鶏卵紙	9.4 × 13.8			
142	箱根塔の沢玉の湯	鶏卵紙	9.2 × 14.2		明治 26(1893) 年頃	
143	箱根塔の沢玉の湯	鶏卵紙	9.2 × 13.6			写真裏印「工藤」

アルバム 2

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸(印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
-	赤表紙アルバム 「木村家八代浩吉善字跡記念写真帖」		27.5 × 39.0 × 6.0		昭和12(1937)年 5月作成	
-	表表紙					
-	表表紙見返し					墨書「昭和十二年五月吉日作製」
-	タイトル「木村家八代浩吉善字跡記念写真帖」					
-	タイトル裏					
144	威臨丸離航図と木村善毅	グラビア印刷	9.2 × 14.2			貼紙「一先考ト渡米ノ威臨丸」(同ID145・ID146)、絵葉書(タイトル「威臨丸離航図と木村善毅守」)
145	威臨丸離航図	コロタイプ印刷	9.1 × 14.1			貼紙(同ID144・ID146)、絵葉書(タイトル「威臨丸離航図」)
146	サンフランシスコ市の威臨丸歓迎法議文	鶏卵紙	11.7 × 10.3			貼紙(同ID144・ID145)、1860年3月21日の決議文と推定
147	木村善毅	ゼラチンシルバー プリント	14.6 × 10.2			複写、ID010と同一イメージ、ペン書「善毅36才の時」鉛筆書「大阪写真師中川信輔作」
148	木村善毅	ゼラチンシルバー プリント	14.1 × 11.4			複写、ID003・ID022・ID074・ID086・ID148と同一イメージ、ペン書「万延元年31才、米国より帰国の記念写真」(注：オリジナルは元治元年撮影)
149	芝新錢座の木村邸	ゼラチンシルバー プリント	9.3 × 14.1			複写、ID008・ID009・ID081と同一イメージ、貼紙「二芝新錢座ノ木村邸」、鉛筆書「…写真は左のものと同様函館の写真師撮影 硝子板より複写す」
150	母子	ゼラチンシルバー プリント	14.3 × 9.9			部分複写、ID005と一部同一イメージ、貼紙「三母子」、鉛筆書「元治元年九月(一八六四年)大阪の写真師横山松三郎来り硝子板に生取すものなり」(注：文中の“大阪”は函館の誤記)
151	木村浩吉	POP	14.0 × 9.0			貼紙「四 海軍生徒時代」、鉛筆書「明治七年十月海軍兵学校予科入学」
152	兵学校付属練習艦 乾行	ゼラチンシルバー プリント	11.2 × 15.4			貼紙「五 兵学校付属練習艦 乾行」
153	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	13.8 × 9.6			貼紙「六 海軍少尉補時代」鉛筆書「明治十五年十一月十日任命せらる」
154	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	14.4 × 10.3		明治22(1889)年	ID116と同一イメージ、貼紙「七 海軍大尉時代 英国出張」ID039に同一の貼紙あり、鉛筆書「明治二十二年五月」
-	木村善毅による歌の短冊	刷物	18.1 × 3.7		明治23(1890)年	ID039に同内容の貼紙あり、鉛筆書「母上とは芥舟妻弥重のこと」、
155	木村千子	ゼラチンシルバー プリント	14.5 × 9.6		明治22(1889)年	ID117と同一イメージ、貼紙「八 留守ノ内子」、鉛筆書「(浩吉妻 勢ん)二十才」「浩吉英国留学中母弥重より送り来る写真 明治二十年六月三日 市川茂吉ノ妹せんと結婚す」
156	日清戦役 黄海海戦	ゼラチンシルバー プリント	5.7 × 14.7			貼紙「十二 日清戦役 黄海海戦」(同ID157)
157	日清戦役 黄海海戦	ゼラチンシルバー プリント	9.7 × 15.1			貼紙(同ID156)、ペン書「川村清雄画伯筆」
158	日清戦役 松島水雷長	ゼラチンシルバー プリント	13.7 × 9.1		明治27(1894)年	貼紙「十三 日清戦役 松島水雷長」、ペン書「明治 27年」
159	木村善毅による詩の掛軸	ゼラチンシルバー プリント	15.2 × 5.4		明治27(1894)年	貼紙「十四 家君ノ満足、署名「芥舟老人毅」、鉛筆書「明治二十七年九月十七日黄海々戦の大勝利の号外を読み歎喜し詩を作る」
160	木村善毅	ゼラチンシルバー プリント	13.3 × 9.2		大正4(1915)年 11月10日	墨書「御沙汰書」「御沙汰/書ヲ存シ書ヲ問フハ人ニ孝ヲ教フル所以ナリ (...)(大正4年11月10日 善老并賑恤につき天皇沙汰の写し)、墨書内容はID27と同一
161	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	13.5 × 9.4		明治29(1896)年	貼紙「十六 軍令部時代」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸(印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
162	土手三番町の木村邸	ゼラチンシルバー プリント	10.4 × 14.0		明治 32(1899) 年	ID080 と同一イメージ、貼紙「十七老父母ノ為メ急造シタル土手三番邸」ペン書「明治三十二年撮影」、鉛筆書「明治三十四年四月四谷坂町より移転す」
163	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	13.9 × 9.9		明治 31(1898) 年	貼紙「十八 飯島副長時代 鮮人姿」、ペン書「朝鮮釜山にて四十一才」
164	シャム王宮	コロタイプ印刷	8.7 × 14.1			写真絵葉書(タイトル「Bangkok (Siam)」)、貼紙「十九 暹羅王宮」
165	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	14.0 × 9.4			貼紙「二十 愛宕艦長時代 上海撮影」、鉛筆書「明治三十五年 四十二才」
166	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	14.3 × 10.1			貼紙「廿一 愛宕艦長時代 支那人姿」、鉛筆書「明治二 (三) 十五年六月上海にて写ス」
167	捉拿倭俄奸審問正法の図	ゼラチンシルバー プリント	8.2 × 15.3		明治 33(1900) 年	キャプション「北清事変 (...) 木村浩吉記 (...)」
168	天津城埋伏地雷軍門大勝西兵の図	ゼラチンシルバー プリント	8.7 × 14.3		明治 33(1900) 年	
169	雪中人物 4 名	鶏卵紙	10.2 × 14.8			
170	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	14.4 × 9.7			貼紙「廿四 拿捕艦長」
171	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	14.5 × 9.8			貼紙「廿五 水雷学校長ト怪物水雷」(同 ID171)、鉛筆書「明治三十九年三月」
172	木村浩吉	POP	10.5 × 7.8			貼紙 (ID170 と同一)
173	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	14.1 × 9.7		大正 4(1915) 年	貼紙「廿七 御大典参列後」、鉛筆書「大正四年」
174	木村浩吉・千子	ゼラチンシルバー プリント	19.2 × 13.2			ペン書「木村家八代浩吉妻千子」
175	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	14.6 × 10.1	13.4 × 9.3		貼紙「廿九 悠々自適」
176	木村浩吉	ゼラチンシルバー プリント	13.7 × 9.5		大正 3(1914) 年	貼紙「三十 韓満旅行」、鉛筆書「大正三年 (五十四才) 旧友と共に旅行す」
177	青山高樹町の木村邸 (右)	ゼラチンシルバー プリント	9.5 × 13.6		大正 12(1923) 年	ペン書「東京青山 高樹町邸 大震災ニカハル (大正十二年)」、鉛筆書「大正五年拾月小石川大和町より新築移転す」
178	青山高樹町の木村邸 (左)	ゼラチンシルバー プリント	9.4 × 13.6		大正 12(1923) 年	
179	麻布笄町の木村邸	ゼラチンシルバー プリント	14.6 × 10.3		昭和 14(1939) 年頃	貼紙「卅一 麻布笄町邸」、鉛筆書「大正十五年八月高樹町より新築移転す」「昭和十四年頃、昭和十八年の大戦により焼失す」
180	木村家墓所	ゼラチンシルバー プリント	10.6 × 15.9			貼紙「卅二 木村家ノ墓所及墓誌」
181	飼犬メリー	ゼラチンシルバー プリント	12.7 × 9.0			貼紙「別飼犬メリー」(同 ID181)
182	飼犬メリー	ゼラチンシルバー プリント	12.8 × 9.0			貼紙 (同 ID180)
183	木村家家族	ゼラチンシルバー プリント	11.1 × 14.6	10.8 × 14.4		ID111 と同一イメージ、ペン書「明治二十二年七月 浩吉海軍大尉英国に注文の軍艦千代田引取のための記念撮影」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸(印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
184	木村静子・浩吉・千子	ゼラチンシルバー プリント	14.3 × 9.0			
185	木村家家族	ゼラチンシルバー プリント	9.7 × 13.9		明治44(1911)年 1月	ID032 と同一イメージ、ペン書「鎌倉邸」鉛筆書「○明治三十九年東京麹町区土手三番町より鎌倉に移転す ○大正二年拾壹月東京四谷区北伊賀町ニ移転す ○大正三年壹月小石川区大和町ニ移転す」
186	木村家家族	ゼラチンシルバー プリント	9.6 × 13.7	9.3 × 13.4	大正4(1915)年 1月	ID033 と同一イメージ、鉛筆書「大正五年頃?」
187	木村家家族とジョン・M・ブルック氏子息	ゼラチンシルバー プリント	9.5 × 13.7	9.3 × 13.5	大正2(1913)年	ペン書「ジョンブルック氏御令息訪問記念写真(大正二年)」「於小石川宅木村家」「(注)フルック氏は咸臨丸にて米国に帰国の人なり」
188	徳川慶喜と男女	ゼラチンシルバー プリント	14.0 × 9.2			
189	福沢諭吉	ゼラチンシルバー プリント	10.4 × 6.8	9.8 × 6.4		ID102 と同一イメージ、ペン書「福沢諭吉 文久二年(一八六二年) オランダにて写す」
190	奥山政敬	ゼラチンシルバー プリント	13.8 × 9.6	13.7 × 9.5		ペン書「奥山政敬」、鉛筆書「市川家次女御主人」
191	有馬新一	POP	13.7 × 9.6			ペン書「有馬中将」「佐世保鎮守府司令長官 海軍中将正三位勲一等功二級 男爵有馬新一」「明治四十二年十二月五日薨去 十二月十三日青山墓地ニ葬ル」
192	小野胡山・男性・木村喜毅	POP	14.1 × 9.6			ペン書「木村芥舟 小野胡山」
193	木村静子・昌之	ゼラチンシルバー プリント	13.8 × 9.7	13.3 × 9.3		ペン書「浩吉長女静 昌之」
194	木村謙吉	POP	9.6 × 6.3			ペン書「浩吉長男謙吉 早死」
195	木村喜毅詩「悼亡孫」	ゼラチンシルバー プリント	10.3 × 6.0			アルバム内に複写原本と推定される自筆原稿あり
196	木村和歌子	POP	10.5 × 7.1	10.4 × 7.0		ペン書「浩吉妻 和歌子」
197	木村君子	ゼラチンシルバー プリント	13.8 × 9.3			ペン書「浩吉四女 君子」、鉛筆書「谷井千次郎長男谷井毅夫と結婚す」
198	木村栄樹	POP	8.9 × 5.9			ペン書「栄樹 九代乾養子」
199	福沢諭吉	ゼラチンシルバー プリント	12.2 × 8.7	11.6 × 8.3		ペン書「福沢諭吉」
200	水雷術教師英人バア	POP	12.8 × 9.6			ID224 と同一イメージ、ペン書「水雷術教師英人バア」
201	上海城	POP	9.6 × 13.0			ペン書「上海城」
202	上海愚園内の茶亭	POP	9.7 × 14.2			ID467 と同一イメージ
203	運羅王宮内の演戯	POP	10.3 × 13.3			ペン書「運羅王宮内ノ演戯」
204	シンガポールの果物	POP	10.0 × 12.9			
205	香港	POP	10.0 × 14.1			ペン書「香港」
206	銭塘江上近く迫りたるボア(潮津波)	POP	10.1 × 14.3			ID481 と同一イメージ、ペン書「銭塘江上近ク迫リタル Bore」「毎年旧ノ八月十五日大海ヨリ襲来ス其速カ十五節(ノット) 高サ拾五呎」
207	果物	POP	10.3 × 13.5			
208	果物	POP	8.3 × 6.2			
209	スエズ運河	POP	10.3 × 14.4			ペン書「蘇士運河(スエスカナール)」
210	ジブラルタル	POP	9.1 × 13.6			ペン書「ジブラルタル」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸(印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
211	バリ勤旋門	POP	10.6 × 13.3		明治 23(1890) 年	ペン書「巴里府勤旋門」鉛筆書「明治二十三年」
212	ロンドン橋	POP	9.0 × 14.2		明治 23(1890) 年	ペン書「明治廿三年 千八百九十年 龍動橋」
213	海防水雷爆発の光景	POP	13.3 × 9.8			ペン書「海防水雷爆発ノ光景」
214	御座船	POP	9.0 × 13.2			ID107 と同一イメージ、ペン書「御座船」
215	晩翠軒の祝宴	ゼラチンシルバー プリント	8.8 × 11.9	7.6 × 11.2		ペン書「晩翠軒ノ祝宴」
216	信州上林温泉近くの地獄谷	ゼラチンシルバー プリント	10.3 × 7.3	9.8 × 6.8	昭和 12(1937) 年頃	ペン書「信州上林温泉ニ近キ地獄谷」「昌之撮影」鉛筆書「昭和十二年頃」
217	女性・男性	ゼラチンシルバー プリント	15.4 × 10.7	15.1 × 10.4		
218	位記・口宣案	ゼラチンシルバー プリント	10.7 × 21.3			ID088 と同一イメージ
-	白紙					
-	白紙					
-	木村喜毅自筆「悼亡孫」	和紙/墨書	23.8 × 11.8			ID195 に複写あり
-	『時事新報』木村喜毅追悼記事切り抜き	刷物	上 8.9 × 31.1 下 7.1 × 31.4		明治 34(1901) 年 12 月 12 日	
-	木村喜毅死亡告切り抜き	刷物	7.5 × 8.8			
-	陸奥広吉から木村浩吉宛の書簡	罫紙インク書き	23.0 × 30.0		昭和 13(1938) 年 11 月 16 日	「安政六年勅を奉し難航して渡米せる威臨丸司令官木村撰津守の功績の正しく世に伝えられしをなげき(…)」昭和十三年十一月十六日 陸奥広吉 木村幸吉様
-	謝恩帖	刷物	19.6 × 23.1			
-	白紙					
-	白紙					
-	裏表紙見返し					
-	裏表紙					

アルバム 3

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸(印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
-	黒大型アルバム		35.0 × 30.4 × 3.5			
-	表表紙「写真帖」					
-	表表紙見返し					
219	鈴木郁子	鶏卵紙	11.4 × 7.7			ペン書「鈴木郁子殿」
220	イーストレイキ博士	鶏卵紙	11.3 × 7.9			ペン書「博士イーストレイキ殿」
221	市川盛三郎	鶏卵紙	9.6 × 6.0			ペン書「市川盛三郎殿」
222	小林元吉	鶏卵紙	9.7 × 5.8			ペン書「小林元吉殿」
223	木村千子・市川貞子	鶏卵紙	9.9 × 5.8			ペン書「市川貞子殿・同千子」
224	水雷術教師パー	鶏卵紙	13.0 × 10.2			ID200 と同一イメージ、ペン書「水雷術教師パー君」
225	水雷術教師パー妻	鶏卵紙	13.0 × 10.2			ペン書「同氏妻女」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
226	谷雅四郎	鴉卵紙	7.7 × 5.3			ペン書「谷雅四郎殿」
227	土屋保	鴉卵紙	9.6 × 5.9			ペン書「土屋保殿」
228	内藤五十三	鴉卵紙	9.0 × 5.9			ペン書「内藤五十三殿」
229	ハーモント・四方田栄太郎	鴉卵紙	8.9 × 5.9			ペン書「四方田栄太郎殿・ハーモント君」
230	佐藤・佐伯	鴉卵紙	9.2 × 5.8			ペン書「佐伯殿・佐藤殿」
231	中松完一	鴉卵紙	8.8 × 5.8			ペン書「中松完一殿」
232	幼児	鴉卵紙	8.9 × 5.8			
233	今泉利量	鴉卵紙	9.2 × 6.1			ペン書「今泉利量殿」
234	今泉秀子	鴉卵紙	9.5 × 5.9			ペン書「今泉秀子殿」
235	幼児	鴉卵紙	9.3 × 6.2			
236	二本貢子・幼児	鴉卵紙	9.4 × 6.2			ペン書「二本貢子殿」「千子姉」
237	為範	鴉卵紙	9.6 × 6.3	8.1 × 5.1		ペン書「為範殿」
238	女性・幼児	鴉卵紙	8.9 × 6.0			
239	寿水男	鴉卵紙	9.0 × 6.0			ペン書「為水男殿」
240	男児	鴉卵紙	9.6 × 6.3			
241	女性	鴉卵紙	9.4 × 6.2			
242	イリストレ・家族	鴉卵紙	14.0 × 9.3			ペン書「法律家イリストレ君家族」
243	イリストレ	鴉卵紙	14.7 × 10.1	10.1 × 8.2		
244	女児	鴉卵紙	8.3 × 5.7			
245	女児	鴉卵紙	8.5 × 5.6			
246	女性	鴉卵紙	9.6 × 5.8	6.9 × 4.7		
247	女性	鴉卵紙	10.6 × 7.9			
248	女性	鴉卵紙	9.1 × 5.6			
249	男性・女性	鴉卵紙	9.2 × 5.5			
250	男性	鴉卵紙	14.3 × 9.9			
251	沢鑑之丞	鴉卵紙	9.6 × 6.1			ペン書「澤鑑之丞殿」
252	小倉兵一郎	鴉卵紙	9.4 × 6.2			ペン書「小倉兵一郎殿」
253	谷雅四郎	鴉卵紙	9.1 × 6.1			ペン書「谷雅四郎殿」
254	斎藤利昌	鴉卵紙	9.4 × 5.9	7.9 × 5.2		ペン書「斎藤利昌殿」
255	築山清智	鴉卵紙	9.5 × 6.2			ペン書「築山清智殿」
256	末川将常	鴉卵紙	9.5 × 6.2			ペン書「末川将常殿」
257	斎藤利昌	鴉卵紙	8.9 × 6.1			ペン書「全右 (斎藤利昌)」
258	西紳六郎	鴉卵紙	10.0 × 6.1	7.7 × 5.4		ペン書「西紳六郎殿」
259	ストウラ	鴉卵紙	9.2 × 6.0			ペン書「ストウラ嬢」
260	坂元常英	鴉卵紙	9.1 × 6.1			ペン書「坂元常英殿」
261	満書	鴉卵紙	14.4 × 10.3			ペン書「満書大主計」
262	佐伯理一郎	鴉卵紙	14.7 × 10.5			ペン書「佐伯理一郎殿」サイン「R. Saiki」
263	荒川規志	鴉卵紙	13.0 × 10.1			ペン書「荒川規志殿」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
264	男性3名	鶏卵紙	14.3 × 10.3			
265	奥山政敬	鶏卵紙	9.1 × 5.8			ペン書「奥山政敬殿」
266	奥山老母堂	鶏卵紙	8.5 × 5.8			ペン書「奥山老母堂」
267	厩子	鶏卵紙	9.3 × 5.9			ペン書「厩子殿」
268	嘉一	鶏卵紙	8.9 × 6.0			ペン書「嘉一殿」
269	愛子	鶏卵紙	8.9 × 6.0			ペン書「愛子殿」
270	雪子	鶏卵紙	9.2 × 6.0			ペン書「雪子殿」
271	五六	鶏卵紙	9.4 × 6.0			ペン書「五六殿」
272	女性3名	鶏卵紙	9.4 × 6.0			
273	雪子	鶏卵紙	9.0 × 5.9			ペン書「雪子殿」
274	愛子	鶏卵紙	9.0 × 5.9			ペン書「愛子殿」
275	五六	鶏卵紙	8.6 × 5.8			ペン書「五六殿」
276	河原の風景	鶏卵紙	10.9 × 14.7			京都鴨川カ
277	小田原梅園	POP	8.0 × 10.4			ペン書「小田原梅園」
278	小田原梅園	POP	8.0 × 10.4			ペン書「小田原梅園」
279	奈良春日神社	鶏卵紙	10.9 × 14.7			ペン書「奈良春日神社」
280	奈良公園	鶏卵紙	10.9 × 14.7			ペン書「奈良公園」
281	小田原梅園	POP	8.1 × 10.6			ペン書「小田原梅園」
282	熱海新浜海岸	鶏卵紙	7.0 × 9.6			ペン書「熱海新浜海岸」
283	熱海大楠	鶏卵紙	7.0 × 6.2			ペン書「熱海大楠」
284	熱海梅園	鶏卵紙	7.2 × 9.4			ペン書「熱海梅園」
285	塩原雨中ノ景	鶏卵紙	7.5 × 10.3			ペン書「塩原雨中ノ景」
286	熱海梅園	POP	7.0 × 9.6			ペン書「熱海梅園」
287	新浜玉屋別荘	鶏卵紙	7.0 × 9.5			ペン書「新浜玉屋別荘」
288	清国芸妓(上海)	鶏卵紙	8.7 × 11.5			ペン書「清国芸妓(上海)」
289	軍艦松島	鶏卵紙	9.3 × 14.0	8.2 × 11.8		ペン書「軍艦松島」
290	野州塩原の山水	POP	7.5 × 10.1		明治30(1897)年	ペン書「野州塩原ノ山水」「明治三十年浩吉遊覧ノ節探景」(同ID291・ID292・ID293・ ID294・ID295・ID296)
291	野州塩原の山水	POP	7.5 × 10.3		明治30(1897)年	ペン書(同ID290・ID292・ID293・ID294・ID295・ID296)
292	野州塩原の山水	鶏卵紙	8.4 × 10.6		明治30(1897)年	ペン書(同ID290・ID291・ID293・ID294・ID295・ID296)
293	野州塩原の山水	POP	8.3 × 10.4		明治30(1897)年	ペン書(同ID290・ID291・ID292・ID294・ID295・ID296)
294	野州塩原の山水	POP	7.6 × 10.1		明治30(1897)年	ペン書(同ID290・ID291・ID292・ID293・ID295・ID296)
295	野州塩原の山水	POP	7.6 × 10.1		明治30(1897)年	ペン書(同ID290・ID291・ID292・ID293・ID294・ID296)
296	野州塩原の山水	POP	7.5 × 10.2		明治30(1897)年	ペン書(同ID290・ID291・ID292・ID293・ID294・ID295)
297	エッフェル塔	コロタイプ印刷	21.6 × 15.5		明治22(1889)年	写真印刷(タイトル「C89 Tour Eiffel」)、ペン書「仏国巴里府エッフェル高塔」「明治 二十二年(一八九〇)仏国通過ノ節一遊シタル処」
298	吉村峰子	鶏卵紙	9.5 × 6.0			ペン書「吉村峰子殿」
299	美和子	鶏卵紙	9.5 × 6.0			ペン書「美和子殿」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
300	吉村完二	鶏卵紙	9.5 × 6.0			ペン書「吉村完二殿」
301	女兒	鶏卵紙	9.5 × 6.0			
302	女兒	鶏卵紙	9.4 × 6.0			
303	女性	鶏卵紙	9.5 × 6.0			
304	美和子	鶏卵紙	9.4 × 6.0			ペン書「美和子殿」
305	美智子	鶏卵紙	9.0 × 6.0			ペン書「美和子殿」
306	女性	鶏卵紙	9.6 × 6.0			
307	男性	鶏卵紙	14.5 × 10.3			
308	男性	鶏卵紙	14.8 × 10.2	11.8 × 9.0		
309	木村浩吉	POP	27.3 × 13.2			
—	白紙					
310	明治十三年海軍兵学校第一年生徒同窓会	鶏卵紙	18.8 × 22.6		明治13(1880)年	ペン書「同窓会(明治十三年海軍兵学校第一年生徒)」
311	軍艦松島乗組士官(日清戦役中)	鶏卵紙	10.3 × 15.7			ペン書「軍艦松島乗組士官(日清戦役中)」
312	金比羅山四人組(立川・木村・津田・飯田)	鶏卵紙	19.5 × 14.5	17.4 × 12.3		ペン書「金比羅山四人組 立川・木村・津田・飯田」
313	静陵会会員	鶏卵紙	10.0 × 14.2	9.9 × 12.4		ペン書「静陵会々員」
—	白紙					
314	軍艦松島乗組士官(日清戦役中)	鶏卵紙	23.3 × 29.0			ペン書「軍艦松島乗組士官(日清戦役中)」
315	顔写真46枚の複写写真	鶏卵紙	25.8 × 34.0			
316	北海道アイヌの一族	鶏卵紙	21.9 × 27.7			ペン書「北海道土人アイヌノ一族」
317	宇治平等院	鶏卵紙	10.7 × 14.7			ペン書「宇治平等院」
318	宇治	鶏卵紙	11.1 × 14.6			ペン書「宇治」
319	常宮・周宮殿下御採彩の小田原梅園	POP	8.9 × 10.5			ペン書「常宮・周宮殿下御採彩ノ小田原梅園」
320	小田原梅園	POP	8.0 × 10.4			ペン書「小田原梅園」(同ID321)
321	小田原梅園	POP	8.0 × 10.5			ペン書「小田原梅園」(同ID320)
322	大阪天満宮祭礼	鶏卵紙	10.9 × 14.7			ペン書「大阪天満宮祭礼」
—	白紙					
323	静陵会会員	鶏卵紙	20.8 × 26.3		明治15(1882)年	ペン書「静陵会員(明治十五年写之)」
324	海軍大学校校長教官及学生(卒業式)	鶏卵紙	10.3 × 24.9		明治33(1900)年	ペン書「海軍大学校々長教官及学生(明治三十三年卒業式当日写ス)」
325	駿州清水港	鶏卵紙	10.4 × 15.7			ペン書「駿州清水港」
326	駿州龍華寺大蘇鉄	鶏卵紙	10.4 × 15.7			ペン書「駿州龍華寺大蘇鉄」(同ID327)
327	駿州龍華寺大蘇鉄	鶏卵紙	10.4 × 15.7			ペン書(同ID326)
328	軍艦高千穂	鶏卵紙	15.1 × 21.3			
329	軍艦敵傍	鶏卵紙	16.7 × 21.0			鉛筆書「敵傍艦」
330	軍艦扶桑	鶏卵紙	7.9 × 21.0			ペン書「軍艦扶桑」「明治三十六年浩吉該艦々長タリ」
331	軍艦龍驤	鶏卵紙	14.8 × 21.7			ペン書「軍艦龍驤」
332	函館港(右部)	鶏卵紙	10.1 × 14.5		明治29(1896)年	次頁ID335と対のバノラマ写真、ペン書「函館港(明治貳拾九年)」(同ID335)
333	函館市公園	鶏卵紙	10.2 × 14.4		明治29(1896)年	ペン書「函館市公園」「明治貳拾九年一月所用ヲ以テ巖寒中函館市へ滞在ス」
334	五稜郭氷切出し	鶏卵紙	10.1 × 14.6			ペン書「五稜郭氷切出し」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
335	函館港 (左部)	鶏卵紙	10.1 × 14.5		明治 29(1896) 年	前頁 ID332 と対のバノラマ写真、ペン書 (同 ID332)
336	函館市	鶏卵紙	10.1 × 14.6			ペン書「函館市」
337	海防水雷爆発の光景	鶏卵紙	15.0 × 10.9			ペン書「海防水雷爆発の光景」「実地演習ナリ」
338	軍艦	POP	5.5 × 9.5			ペン書「アイノ一住家」
339	アイノ一住家	鶏卵紙	10.2 × 13.3			ペン書「アイノ一熊祭、ペン書きの下に鉛書き文字があるが判読不能
340	アイノ熊祭	鶏卵紙	9.8 × 13.8			上部に写真 (ID335・ID336・ID337・ID338) が貼付されているため、画像の確認不能
341	画像不詳		計測不能			貼紙「大日本帝国艦隊根拠地長直路仮設砲台ノ写真」
342	大日本帝国艦隊根拠地長直路仮設砲台	鶏卵紙	21.6 × 27.2			
343	大日本帝国艦隊根拠地長直路に集合	鶏卵紙	21.4 × 28.6		明治 27(1894) 年 9月 9日	貼紙「明治廿七年九月九日 大日本帝国艦隊根拠地長直路二集合ノ寫真」
344	日清艦隊海戦	鶏卵紙	21.8 × 27.2		明治 27(1894) 年 9月 17日	貼紙「明治二十七年九月十七日午後零時五十三分日清艦隊海戦ノ写真」
345	日清艦隊海戦	鶏卵紙	21.8 × 28.7		明治 27(1894) 年 9月 17日	貼紙「明治二十七年九月十七日午後零時五十六分日清艦隊海戦ノ写真」
346	日清艦隊海戦	鶏卵紙	21.7 × 28.9		明治 27(1894) 年 9月 17日	貼紙「明治二十七年九月十七日午後一時三十分 日清艦隊海戦中敵ノ軍艦超勇号我カ砲弾ノ為メ火災ヲ起シ沈没セントスル時ノ写真」
347	日清艦隊海戦	鶏卵紙	21.9 × 26.9		明治 27(1894) 年 9月 17日	貼紙「明治二十七年九月十七日午後二時二十分 日清艦隊海戦中西京丸敵ノ砲弾ノ為メ撃破セラレタル上甲板及舵機ニ通スル汽管ノ写真」
348	軍艦赤城凱旋	鶏卵紙	21.3 × 27.0		明治 27(1894) 年 9月 18日	貼紙「明治二十七年九月十八日午后四時 大日本帝国軍艦赤城凱旋ノ写真」
349	軍艦赤城上甲板後部	鶏卵紙	21.9 × 27.6			貼紙「大日本帝国軍艦赤城上甲板後部ノ写真」
350	黄海大海戦図	POP	11.0 × 16.3			絵画複写、旧目録では日清海戦と推定
351	黄海大海戦図カ	POP	11.7 × 16.7			絵画複写、旧目録では日清海戦と推定
352	清国軍艦乙カ	鶏卵紙	11.8 × 19.3			ペン書「清国軍艦乙カノ最後」
353	清国軍艦乙カ	鶏卵紙	13.9 × 19.5			
354	大日本帝国艦隊大同江外仮根拠地へ凱旋	鶏卵紙	21.6 × 27.5		明治 27(1894) 年 9月 19日	貼紙「明治廿七年九月十九日午前七時大日本帝国艦隊大同江外仮根拠地へ凱旋」 「橋立、千代田、蔵島、扶桑、浪速、秋津州、高千穂、吉野」
355	木村浩吉	鶏卵紙	14.3 × 10.0		明治 27(1894) 年 9月 19日	ペン書「明治廿七年黄海海戦記念ノ為メ海戦当時ノ服装ニテ採影」
356	木村浩吉	鶏卵紙	14.3 × 9.8		明治 29(1896) 年	ペン書「明治廿九年写ス」
357	幼児	鶏卵紙	14.6 × 10.0			ペン書「吉村」
358	幼児 3 名	鶏卵紙	11.8 × 8.0			ペン書「二本家子女」
359	木村浩吉	鶏卵紙	9.3 × 5.8	7.2 × 5.0	明治 13(1880) 年	ペン書「明治十三年写ス」
360	木村浩吉	鶏卵紙	9.0 × 5.4			
361	木村浩吉	鶏卵紙	8.9 × 5.1		明治 1 年	ペン書「明治十 年」
362	木村浩吉	鶏卵紙	9.3 × 5.6		明治 15(1882) 年	ペン書「明治十五年写ス (濠洲メルボルン市ニ於テ)」
363	木村浩吉	鶏卵紙	9.0 × 5.8			
364	木村浩吉	鶏卵紙	10.0 × 5.7			
365	木村浩吉	鶏卵紙	8.2 × 5.2			
366	木村浩吉	鶏卵紙	9.3 × 5.1			

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
367	木村浩吉	鶏卵紙	10.1 × 7.0			
368	谷雅四郎	鶏卵紙	9.0 × 5.7			ペン書「谷雅四郎殿」
369	高木正年	鶏卵紙	9.5 × 6.0			ペン書「高木正年殿」
370	近藤未四郎	鶏卵紙	9.1 × 6.0			ペン書「近藤未四郎殿」
371	斎藤・荒井・木村	鶏卵紙	9.1 × 6.0			ペン書「木村・荒井君・斎藤君」
372	室田習三	鶏卵紙	9.3 × 5.8	8.0 × 5.1		ペン書「室田習三殿」
373	但馬惟孝	鶏卵紙	9.4 × 5.6			ペン書「但馬惟孝殿」
374	井上保	鶏卵紙	8.9 × 6.0			ペン書「井上保殿」
375	土屋妹	鶏卵紙	9.1 × 6.0			ペン書「土屋妹君」
376	服部雄吉	鶏卵紙	9.8 × 5.8			ペン書「服部雄吉殿」「三十三年清国ニ於テ戦死」
377	新井次郎	鶏卵紙	8.8 × 5.7			ペン書「新井次郎殿」
378	新井命息	鶏卵紙	9.5 × 6.2			ペン書「新井命息」
379	有馬良橘	鶏卵紙	7.2 × 6.0			ペン書「有馬良橘殿」
380	川村鉄太郎	鶏卵紙	14.3 × 9.9			ペン書「川村鉄太郎殿」鉛筆書「(子爵)」
381	大坪・中松・女性・幼児	鶏卵紙	14.0 × 10.0			ペン書「大坪殿中松殿」
382	川村常子	鶏卵紙	9.8 × 6.0			ペン書「川村常子殿」
383	川村常子	鶏卵紙	9.7 × 6.0			ペン書「全上 (川村常子)」
384	市川寅子	鶏卵紙	8.8 × 6.0	7.5 × 4.8		ペン書「市川寅子殿」
385	木村浩吉・千子	鶏卵紙	11.8 × 7.4			ペン書「千 浩吉」
386	蒙州タスマニア島タスマニア市民レッキス	鶏卵紙	9.2 × 5.4	6.9 × 4.6		ペン書「蒙州タスマニア島タスマニア市民」「レッキス君」
387	レッキス夫人	鶏卵紙	9.2 × 5.5	8.8 × 5.2		ペン書「レッキス妻君」
388	男性	鶏卵紙	9.1 × 5.5	6.8 × 4.7		
389	女性	鶏卵紙	7.9 × 5.7			
390	ヘンリー・ラビホート	鶏卵紙	9.4 × 5.8	7.3 × 5.0		ペン書「ヘンリー ラビホート君」
391	男性	鶏卵紙	9.7 × 5.9			
392	ダビットリー	鶏卵紙	14.5 × 10.5	11.5 × 8.7		ペン書「ダビットリー夫妻君」、サイン「Your faithful David ■■■」
393	ダビットリー夫人	鶏卵紙	14.8 × 10.3			
394	幼児2名	鶏卵紙	9.1 × 5.8			
395	市川谷子・政子	鶏卵紙	9.7 × 6.4			ペン書「市川政子殿 谷子殿」
396	女兒	鶏卵紙	8.8 × 6.0			
397	市川政子	鶏卵紙	8.9 × 5.9			鉛筆書「政子」
398	市川政子	鶏卵紙	9.0 × 5.9			鉛筆書「政子」
—	白紙					
399	有徳川宮威仁親王	鶏卵紙	14.0 × 10.0			ペン書「有徳川威仁親王閣下」
400	常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿	鶏卵紙	7.0 × 9.5			ペン書「常宮周宮両殿下御親写ノ高輪御殿十景」「御下賜ニナリタルモノ」
401	常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿	鶏卵紙	7.0 × 9.5			
402	常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿(井戸)	鶏卵紙	7.0 × 9.6			
403	常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿(ブランコ)	鶏卵紙	7.0 × 9.6			

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
404	常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿 (加賀藁ノ御用掛)	鵝卵紙	7.0 × 9.5			ペン書「加賀藁ノ御用掛」
405	常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿 (御女中)	鵝卵紙	7.0 × 9.6			ペン書「御女中」
406	常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿	鵝卵紙	7.0 × 9.5			
407	常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿	鵝卵紙	7.0 × 9.6			
408	常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿	鵝卵紙	7.0 × 9.5			
409	常宮周宮両殿下御親写の高輪御殿	鵝卵紙	7.0 × 9.5			
410	修善寺温泉	POP	10.0 × 14.3		明治 31(1898) 年	ペン書「修善寺温泉 (明治卅一年)」(同 ID411・ID412)
411	修善寺温泉	POP	10.2 × 14.6		明治 31(1898) 年	ペン書 (同 ID410・ID412)
412	修善寺温泉	POP	10.0 × 14.8		明治 31(1898) 年	ペン書 (同 ID410・ID411)
—	白紙					
413	森名富士	鵝卵紙	9.1 × 13.7			ペン書「森名富士」
414	琉球音里	鵝卵紙	10.9 × 14.4			ペン書「琉球音里」
415	琉球音里	鵝卵紙	11.2 × 14.4			
416	麹町区番町学校	POP	7.1 × 10.0			ペン書「麹町区番町学校」
417	琉球音里の城門	鵝卵紙	10.7 × 14.2			ペン書「琉球音里ノ城門」
418	針尾の瀬戸弁天嶋	鵝卵紙	9.8 × 13.1			ペン書「針尾ノ瀬戸」 「弁天嶋」
419	水雷艇	鵝卵紙	10.1 × 15.8			ペン書「水雷艇」
420	龍華寺清水港附近	鵝卵紙	15.7 × 10.3			ペン書「龍華寺」 「清水港付近」
421	朝鮮人	鵝卵紙	13.8 × 10.2			ペン書「朝鮮人」
422	ナガウラ港	鵝卵紙	20.8 × 26.0		明治 23(1890) 年 2月 17 日	写真内キャプション「EC.m (100lbs) 17th Feb. 23 meiji at Naga-ura Harbor」
423	人物 6 名	鵝卵紙	10.2 × 13.8			
424	朝鮮の菜人	鵝卵紙	10.2 × 13.9			ペン書「朝鮮ノ菜人」
425	ナガウラ港	鵝卵紙	20.5 × 26.8		明治 23(1890) 年 2月 18 日	写真内キャプション「C.C.B.m. (250lbs) 18th Feb.23 meiji at Naga-ura Harbor」
426	港	鵝卵紙	10.8 × 26.5			
427	海軍大校内	鵝卵紙	21.6 × 26.3			ペン書「海軍大校内」
428	朝鮮京城	鵝卵紙	11.2 × 13.6			ペン書「朝鮮京城」
429	琉球音里	鵝卵紙	10.1 × 13.8			ペン書「琉球音里」
430	海軍大校内カ	鵝卵紙	22.1 × 27.2			
431	芸州宮島	鵝卵紙	11.3 × 16.2			ペン書「芸州宮島」
432	ワット・アルン	鵝卵紙	21.7 × 26.3			ペン書「暹羅盤谷府ワット・チェン」 「暹羅國盤谷瀨南河岸」
433	安芸国厳島紅葉谷	鵝卵紙	10.3 × 14.4			ペン書「安芸国厳島紅葉谷」
434	築地海軍大校内	鵝卵紙	7.6 × 14.2			鉛筆書「築地海軍大校内」
435	軍艦厳島上の赤道祭	POP	10.7 × 15.8		明治 34(1901) 年	写真上ペン書「明治三十四年軍艦厳島赤道通過ノ節行ヒタル赤道祭」
436	練習艦乾行	鵝卵紙	14.8 × 20.5			写真上ペン書「乾行艦」・鉛筆書「兵学校附属練習艦乾行」
437	軍艦乗組員	鵝卵紙	10.1 × 11.0			軍艦八雲または八島の乗組員カ

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
438	画像不詳		21.1 × 27.0			上部に写真 (ID434・ID435・ID436・ID437) が貼付されているため、画像の確認不能、 ペン書「象皮病 (九州ノ時疫病)ペン書「白河冬籠ノ軍艦愛宕」
439	軍艦愛宕	鶏卵紙	16.2 × 20.0			
440	軍艦	鶏卵紙	14.5 × 20.3			
441	軍艦上の相撲	POP	10.9 × 6.8			
442	画像不詳	計測不能				上部に写真 (ID439・ID440・ID441) が貼付されているため、画像の確認不能
443	日触測測カ	鶏卵紙	20.9 × 26.6			旧目録では日触測測と推定
444	宮殿カ	鶏卵紙	11.0 × 22.1			
-	裏表紙見返し					
-	裏表紙					

アルバム 4

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
-	黒小型アルバム		18.5 × 27.5 × 5.0		木村浩吉海軍在職中 アジア各地	旧目録では「木村浩吉のアルバム・浩吉の自筆説明入り、裏表紙見返しに「蘭栄樹父」とあるから、 浩吉→乾→栄樹と伝えられたもの」との記載あり
-	表表紙					墨書「蘭栄樹父」
-	表表紙見返し					
-	白紙					
-	白紙					
445	木村浩吉	POP	14.0 × 10.0		明治 35(1902) 年 9 月	ペン書「明治三十五年九月乗艦愛宕上海碇泊中記念、為メ戯ニ写ス齡四十一」
446	軍艦愛宕	ゼラチンシルバー プリント	7.6 × 10.3		明治 35(1902) 年 9 月	ペン書「軍艦愛宕 海軍用地前ニ碇泊」
447	軍艦愛宕上海碇泊中の状況	POP	7.8 × 7.4		明治 35(1902) 年カ	ペン書「上海碇泊中潮流上昇ノ勢力右舷々梯ニ激スル状況」
448	イギリス東洋艦隊司令長官副官	POP	10.6 × 7.4		明治 35(1902) 年カ	ペン書「英国東洋艦隊司令長官海軍中將ブリッグ特ニ副官ヲ遣シ吾カ病況ヲ尋問セシメラル」
449	艦員	POP	6.7 × 10.3		明治 35(1902) 年カ	ペン書「射的ノ為メ上陸シタル艦員」
450	日本陸軍上海駐屯軍	POP	9.5 × 14.2		明治 35(1902) 年カ	ペン書「上海大日本駐屯軍」「明治三十五年十二月東京へ帰還 隊長ハ陸軍歩兵少佐稲村新六」
451	イギリス艦ビーク	POP	7.2 × 10.1		明治 35(1902) 年カ	ペン書「英艦ビーク」「上海ニ碇泊中」
452	綿花輸出の状況	POP	7.1 × 10.3		明治 35(1902) 年 11 月カ	ペン書「綿花輸出状況 上海十一月」
453	綿花輸出の状況	POP	7.2 × 10.1		明治 35(1902) 年 11 月カ	ペン書「同」
454	綿花輸出の状況	POP	7.3 × 9.7		明治 35(1902) 年 11 月カ	ペン書「同」
455	上海日本領事館・ドイツ領事館	POP	10.0 × 14.3			ペン書「上海日本領事館 独逸領事館」
456	上海日本郵船会社の埠頭	POP	5.8 × 17.9			ペン書「上海日本郵船会社碼頭」
457	上海ガーデンブリッジ	POP	7.5 × 10.4			ペン書「上海ガーデンブリッジ」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸 (印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
458	上海海関前の埠頭	POP	9.8 × 14.2			ペン書「上海海関前ノ埠頭」
459	フランス租界の埠頭	POP	5.6 × 18.2			ペン書「仏租界ノ埠頭」
460	浦東の埠頭	POP	10.1 × 14.2			ペン書「浦東埠頭」 「対岸ハ上海公園 支那人ノ觀覽ヲ禁セラル」
461	葬儀の行列	POP	5.7 × 17.7			ペン書「葬儀ノ行列」・ID462・ID466と連作
462	葬儀の行列	POP	5.6 × 18.0			ID461・ID466と連作
463	上海公園	POP	10.0 × 14.2			ペン書「上海公園内」 「支那人ノ觀覽ヲ禁ス」
464	上海公園門外のドイツ艦イルチス号記念碑	POP	7.7 × 10.3			ペン書「公園門外ノ独艦イルチス号記念碑」
465	上海近郊の宝塔	POP	10.0 × 9.9			ペン書「上海近郊ノ宝塔 (パゴダ)」
466	葬儀の行列	POP	5.6 × 18.0			ID461・ID462と連作
467	上海愚園内の茶亭	POP	9.7 × 14.2			ID202と同一イメージ、ペン書「愚園内ノ茶亭」 「(支那人ノ公園)」
468	上海ホンキウ区の市場	POP	14.2 × 10.0			ペン書「上海ホンキウ区ノ市場」
469	上海ホンキウ区の市場	POP	9.5 × 14.1			ペン書「同」
470	水道管および貯水塔	POP	7.8 × 14.0			ペン書「自來水管及貯水塔」
471	蘇州呉山西施洞	POP	9.9 × 7.4			ペン書「蘇州呉山西施洞」
472	蘇州北寺塔	POP	9.9 × 7.6			ペン書「蘇州北寺塔」
473	蘇州寒山寺	POP	7.1 × 10.0			ペン書「蘇州寒山寺」
474	杭州領事館内の四角亭	POP	9.9 × 7.5			ペン書「杭州領事館内ノ四角亭」
475	杭州府呉山より西湖を眺む	POP	7.1 × 10.0			ペン書「杭州府呉山ヨリ西湖ヲ眺ム」
476	杭州府呉山より西湖を眺む	POP	7.9 × 10.3			ペン書「呉山ヨリ西湖ヲ眺ム」
477	杭州西湖 (右下)	POP	7.4 × 10.2			ペン書「杭州西湖」 (同 ID478・ID479) 西湖に関する対連が添えられている
478	杭州西湖 (左上)	POP	7.4 × 10.3			ペン書 (同 ID477・ID479) 西湖に関する対連が添えられている
479	杭州西湖 (左下)	POP	7.8 × 10.3			ペン書 (同 ID477・ID478) 西湖に関する対連が添えられている
480	銭塘江のボア (潮津波) (右)	ゼラチンシルバー プリント	9.3 × 11.9			ペン書「銭塘江堤上ニ遙ニ潮 (ボア) ノ來襲ヲ望ム」
481	銭塘江のボア (潮津波) (中央)	ゼラチンシルバー プリント	9.3 × 11.8			ID206と同一イメージ、ペン書「Bore 近キ迫ル」 「銭塘江ノ潮ハ龍ノ如シ」
482	銭塘江のボア (潮津波) (左)	ゼラチンシルバー プリント	9.5 × 11.8			ペン書「Bore 過ク速力十五節高サ拾五呎」 「毎年旧八月大海ヨリ襲來ス」
483	銭塘江のボアを観る人々	ゼラチンシルバー プリント	9.4 × 11.9			ペン書「浙江省銭塘江ノ觀潮」
484	呉山より杭州府を眺む	POP	5.4 × 18.1			ペン書「呉山ヨリ杭州府ヲ眺ム」
485	呉山より西湖の蘇堤を眺む	POP	5.6 × 18.1			ペン書「呉山ヨリ西湖ノ蘇堤ヲ眺ム」
486	西湖北岸の文瀾閣	POP	5.7 × 18.3			ペン書「浙江省杭州府西湖北岸ノ文瀾閣」 「三万六千冊ノ四庫全書ヲ納ム乾隆帝ノ造タル処ナリ」 「離宮内ノ美人石」
487	北京城	POP	9.9 × 14.2			ペン書「北京城」 「風船上ヨリ取シ写リシモノナリト云フ」・ID488と連作
488	北京城	POP	10.1 × 14.1			ID487と連作
489	北京城内の天文堂	POP	9.6 × 14.0			ペン書「北京城内ノ天文堂」 「北清事変ノ後独逸軍ノ奪フ処トナリ」 「ベルリン」 物議ヲ生ス
490	墓所	POP	6.9 × 10.3			ペン書「墓所」

ID	資料名	技法等	外寸 縦×横×厚 cm	内寸(印画紙・イメージ) 縦×横 cm	年代	備考
516	仁川港	鶏卵紙	9.1 × 13.5			ペン書「仁川港」
517	京城南大門	鶏卵紙	8.4 × 13.5			ペン書「京城南大門」「電気鉄道開業ノ当日」
518	仁川の埠頭	鶏卵紙	9.2 × 13.7			ペン書「仁川埠頭」「対岸八月尾島」
519	京城の日本居留地	鶏卵紙	8.2 × 13.7			ペン書「京城日本居留地」
520	金玉均の晒首の現場	鶏卵紙	10.2 × 10.6			ペン書「金玉均ハ親日派ノ頭目上海ノ日本旅館東和洋行ニテ殺害セラレ、屍体ヲ朝鮮ニ送リテ暴ラス、日清戦争ノ近因ト言ヘル」
521	シャム国王・王妃	POP	16.3 × 22.7			ペン書「暹羅国王及女王」「ニ認見ス 明治卅四年三月 巖島副長時代」
522	シャム王宮	鶏卵紙	17.2 × 25.1			ペン書「王宮」
523	湄南河畔離宮	鶏卵紙	16.9 × 24.9			ペン書「湄南河畔離宮」
524	バンコク王宮内の演戯	鶏卵紙	17.9 × 22.3			ペン書「王命ノ演戯」「首府バンコック王宮内」
525	寺院	鶏卵紙	7.0 × 25.0			ペン書「寺内」
526	寺院	鶏卵紙	17.0 × 25.2			ペン書「同」
527	ワット・アルン	POP	13.8 × 10.1			ペン書「ワットチエンタラ」
528	シャムの上流社会の令嬢	POP	14.0 × 9.4			ペン書「暹羅上下ノ風俗」(同ID529)「上流社会ノ令嬢」
529	シャムの下流社会の婦人	POP	14.0 × 10.3			ペン書(同ID528)「下流社会ノ婦人」
530	マニラ・パツク河口	ゼラチンシルバー プリント	12.3 × 17.0			ペン書「米領フヒリビン群島首府マニラ」「パツク河口」
531	水牛の休憩	ゼラチンシルバー プリント	12.4 × 17.0			ペン書「水牛ノ休憩」
532	マニラ PACIG RIVER	鶏卵紙	16.9 × 24.4			キャプション「32 PACIG RIVER MANILA」
533	マニラ BINONDO	鶏卵紙	17.0 × 24.7			キャプション「BINONDO IN MANILA」
534	マニラ PLAZA DE MORAGA ST.	鶏卵紙	17.1 × 24.2			キャプション「PLAZA DE MORAGA ST. MANILA」
535	ピンンド教会カ	鶏卵紙	17.0 × 24.2			
536	軍艦扶桑乗組士官	ゼラチンシルバー プリント	11.1 × 15.6		明治 36(1903) 年 3 月 1 日	ペン書「初代 軍艦扶桑」「明治三十六年三月一日海軍大演習参加ノトキ」「扶桑艦長木村浩吉 輪四十二 海軍中佐 同副長東伏見宮依仁親王殿下 海軍少佐」
-	白紙					
537	水雷母艦日光丸	ゼラチンシルバー プリント	9.0 × 14.9			ペン書「日露戦役中艦長トシテ乗込ミタル水雷母艦日光丸 老万巻千頓」「母艦ハ艦隊ニ附属シ 向度濃霧中数百海里ヲ航行シ暗黒裡若クハ晴夜ニ浦塩港口ニ機械水雷ヲ沈置スル命ニ服ス同 行汽船ニ配布スル数万個ノ機械水雷ハ悉ク日光丸ニテ装備スル処ナリ、又本務外対馬海軍警備 中浦塩ニ密輸セントスル英国及瑞典国汽船三隻ヲ拿捕ス 水雷母艦ノ本務ハ駆逐艦及水雷艇ノ 修理、兵器弾薬、糧食被服其他軍需品供給ナリ」
-	白紙					
-	白紙					
-	木村浩吉「踏破ノ地」および「奉職履歴」	野紙インク書き				
-	木村浩吉「踏破ノ地」および「奉職履歴」	野紙インク書き				
-	白紙					
-	白紙					
-	裏表紙見返し					
-	裏表紙					

木村喜毅関係古写真資料の撮影仕様について

高山 さやか
東京大学史料編纂所

はじめに

本稿では、2022年から2度に渡っておこなわれた、横浜開港資料館所蔵木村喜毅関係古写真資料の調査過程で実施したデジタル撮影について、その趣旨と仕様を紹介する。

当該資料のデジタル化はこれまでに一度もおこなわれておらず、1988年に刊行された資料集¹のみにより資料の内容と姿が知れる状態であった。そのため、今回は撮影作業だけでなく原本調査も同時におこなった。初年度である2022年度はガラス板写真を、翌2023年度は紙焼き写真・アルバム類の調査・撮影をし、前述の資料集に掲載された目録²（以下、旧目録と称す）に未掲載の22点を含む537点の写真資料の撮影と目録作成を完了させたところである。目録作成に関しては別項の桑田コラムに譲り、本稿では写真撮影について解説する。

史料写真とは

まず「史料写真」とは、『歴史的価値のあるものを撮影した写真』もしくは『写真そのものに歴史的価値のあるもの』の2種類を指して語られることが多い。本調査の場合、被写体が「木村喜毅関係古写真」という後者で、それを撮影して前者とするという関係にある。よって、本稿での「史料写真」は基本的に前者を指す。

『歴史的価値のあるものを撮影した写真』としての史料写真を撮影する動機づけとして最も有力なのが、利用と保全を目的としたものであろう。大抵の歴史資料は、誰もがアクセス可能な場所で保管・運用されているとは限らず、その姿を永劫に留める保証もない。また経年変化や修理に伴う形状変更、最悪の事態としての散逸や消失など、歴史資料を取り巻く環境は得てして不安定になりがちである。そう考えると、歴史的価値のあるものを写真におさめる活動が写真の黎明期から当然のようにおこなわれてきたことは、歴史資料の利用と保全の観点からも極めて自然な流れであったといえる。

筆者が所属する東京大学史料編纂所（以下、本所）でも、明治期より歴史資料を写真におさめた「台紙付き写真」と呼ばれる紙焼き写真を多数収集・作成し、利用に供して

きた。その後本所における史料写真は収集形態を様々に変えつつ、現代では媒体をデジタルの世界に移し、データベース上での画像公開をおこなっている。

このような現状をふまえて、現代の史料写真とはどのような要件を満たしている必要があるか考えてみると、基本は次の3点であろう。

1) 史料に負担なく撮影されている（安全性）

史料撮影において最も重要なのが、安全性である。のちに述べる代替品としての機能も重要であるが、史料原本を危険に晒すような撮影をしてしまえば主客転倒である。カメラを真俯瞰に構えることが多い平面史料の撮影では、安定感のある機材を使用するのはもちろんのこと、カメラとPCをケーブルで接続するテザー（リモート）撮影により史料の上方での手作業を最小限にするなどの工夫が求められる。また、常に史料の状態をよく観察し、場合によっては負担の少ない撮影手法を選定するなど、臨機応変な対応が必要となる。

2) 史料原本に対して忠実である（再現性）

写真を史料原本の代替品として機能させるためには、再現性は欠かすことのできないファクターである。色や寸法の基準となるカラーチャート、メジャーを史料と共に撮影するほか、歪みの少ないレンズで史料とカメラとを正対させて形を忠実に表現すること、演色性の高い光源で均一なライティングをすること等が重要になる。撮影仕様・設計の決定には、この再現性の要素が必須である。

3) シンプルで持続可能な手法で撮影されている（持続性）

撮影の機会が複数回・複数年に及んでも、同等のクオリティで撮影が継続できるような撮影設計を意識しなければならない。本所では、一般に流通している写真機材を組み合わせて使用し、極めてシンプルな撮影手法をベースにすることでたとえ撮影者や機材の変更があっても一定のクオリティを維持できるよう努めている。

木村喜毅関係古写真資料撮影の仕様

前項の要件にのっとり、通常の史料撮影に準じた手法で撮影をすすめた。資料の特性に合わせた入力解像度を確保するため、情報量が多いとされるガラス板写真には中判デジタルバックカメラを、アルバムや台紙付き写真などの紙焼き写真には35mmフルサイズセンサーのデジタルカメラを用いた。使用レンズは各カメラメーカー純正のマクロレンズを選定し、資料の大きさによって画角を調整した。

撮影は全点、横浜開港資料館内の外光が入らないスペースを借用し、資料の真上にカメラを構える真俯瞰でテザー

撮影をおこなった。反射光撮影は左右から同角度で同じ光源を照射する最もスタンダードなライティングを採用し、透過光撮影は高演色性のライトパネルを使用して、資料の濃度に合わせて段階露光で撮影した。撮影・現像処理はすべて各カメラメーカー純正のソフトウェアを用いた。

使用機材

	ガラス板写真 (ID001-022)	紙焼き写真・アルバム (ID023-357)
カメラ	PhaseOne XF + 150MP (1億5000万画素)	NikonD850 (4575万画素)
レンズ	Schneider Kreuznach 120mm LS Macro F4.0	AF-S Micro NIKKOR 60mm f/2.8G ED AF-S VR Micro-Nikkor 105mm f/2.8G IF-ED
光源	富士フィルム LED ライトパネル 039Sh50Pro-S LED ランプ	Comet CBb-24x・CB-25H (2灯)
ソフトウェア	CaptureOne (撮影・現像)	Nikon CameraControlPro2 (撮影) Nikon NX Studio (現像)
カラーチャート	Calibrite ColorChecker Classic mini (反射光) Image Engineering Color Rendition Chart TE188 (透過光)	

撮影にあたり

本資料群にはすでに旧目録に準じた資料番号が付与されていたが、のちの新たな目録整備作業を見据え、資料番号等を写し込むことは見送ることにした(ただし、ガラス板写真のみ作業性のため通し番号をいれた)。台紙付き写真等1枚毎の単体の写真は、情報の有無に関わらず表と裏の撮影をした。

見開き形式の写真館台紙に貼られているものは台紙の情報がすべて取れるように複数カット撮影をした。

アルバムは片頁ごと撮影し、間紙が挟まれているものは、有り・無し of 2 カットを撮影した。プラチナトナーによる触媒作用で間紙に特徴的な変色が起きているものなどは、変色した間紙の下へさらに間紙を挟むなどして、状況が判然とする撮影を心がけた。

全体として著しく状態の悪い資料は少なかったが、資料の負担となるような撮影は是としないことを基本方針とし、慎重な撮影を心がけた。そのため、写真の角が折れた状態で長く保管されていたものなどは、角を起こす際に欠損する可能性を考慮し、あえて手を加えず自然な状態のまま撮影することにした。また台紙が大きく湾曲している写真も、ガラス等で圧力をかけて平面性を出すことはせず、そのままの状態でも撮影した。どちらの場合も再現性を考慮すると、撮影時に何らかの手を加える必要があったが、今回は安全性を優先したことはご理解いただきたい。

後註

- 1 横浜開港資料館編『木村芥舟とその資料 — 旧幕臣の記録』横浜開港資料普及協会、1988年3月
- 2 ID019-022、027、039-040、042、060-062、341、417-424、438、442
- 3 裏書画像については、目録備考欄に採録されている資料のみ図版編に掲載した

おわりに

本資料集では、資料全点の画像を収録した。目録と図版で可能な限りの情報を利用者に採っていただきたいという気持ちからである。しかしながら誌面の制約から、十分なサイズやバリエーションを掲載できなかった資料も多い。今後のデータベース整備・画像公開が望まれるところである。

末筆ながら、撮影場所の確保や資料の出納、機材輸送のサポート等、調査にあたり全面的にご協力いただいた横浜開港資料館のみなさまに感謝いたします。



紙焼き写真 (ID032)



アルバム右頁 (ID147・148)



アルバム左頁 (ID149・150)

木村喜毅関係古写真資料調査 の概要と目録作成について

桑田 恵里

東京大学史料編纂所

はじめに

本調査は、横浜開港資料館が所蔵する「木村喜毅関係古写真」を対象とし、先行研究として、1988年3月刊行の同館編『木村芥舟とその資料—旧幕臣の記録』¹（以下旧目録）を参照し、実施した。調査の目的は、旧目録の刊行から30年以上が経過した現状を踏まえ、近年確立されつつある写真資料に対する調査・分析の方法論を適用し、写真史料学の視点から再調査を行うことである。本調査を通じて、目録情報の拡充を図るとともに、高精細デジタル撮影による資料情報の可視化を目指した。

本稿では調査の概要を示すとともに、本調査における目録の作成について詳述する。なお、史料撮影の詳細については、本研究報告書掲載のコラム（高山さやか「木村喜毅関係古写真資料の撮影仕様について」）を参照されたい。

1. 調査概要

本調査は、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター古写真研究プロジェクトとJSPS 科研費：基盤研究（B）「幕末明治期古写真の調査とその解析・復元・保全を総合的に捉える写真史料学の構築」（23K25351）の連携のもと、横浜開港資料館の協力を得て実施した。

調査体制は、古写真研究プロジェクト代表の箱石大を中心に、史料保存技術室写真担当技術職員である谷昭佳、高山さやか、桑田恵里が主担となり、2024年からは近世史料部門の菊地智博が加わった。また、2023年5月に実施した第3回調査には、同プロジェクト共同研究員の高橋則英氏（日本大学上席研究員）の参加を得て、写真史および写真保存の観点から指導を頂いた。

本調査対象である「木村喜毅関係古写真」の構成は、以下の通りである。

- ・ガラスを支持体とした写真：21点
- ・写真アルバム：4冊（収録写真点数：460点）
- ・写真プリント：56点

合計 537点

このうち22点は、旧目録に未収録の資料である。²

調査期間は2022年度から2024年度の3年間である。

調査の時間的経緯は、次の通りである。

- ・第1回調査（2022年7月14日）
調査・撮影計画の策定
- ・第2回調査（2022年10月5～7日）
ガラスを支持体とする写真の調査・撮影
- ・第3回調査（2023年5月16～18日）
写真アルバム、プリントの調査・撮影
- ・第4回調査（2023年9月7日）
補充調査

2. 目録作成の方針と調査方法

2-1. 目録の役割

歴史資料の目録は、資料群を体系的に分類・整理し、その情報を記録するものである。これにより、史料が持つ情報とその所在が明確化され、それらへ効率的にアクセスする手段が提供される。すなわち、歴史資料の目録は単なるリストではなく、研究活動を円滑に進めるための重要なインフラであり、情報の信憑性を確保するとともに、史料の特性に即した適切な指針を設け、これに基づいて作成する必要がある。

特に、写真を歴史資料として活用するためには、画像として記録された視覚的情報のみならず、写真そのものが持つ多様な物理的情報を収集・分析することが重要である。そこで、本調査では、目録と史料写真を統合的に活用することで、資料情報への包括的なアクセスを可能とすることを目指した。

2-2. 目録の項目について

先行研究による旧目録は、文書史料の形式に準拠して作成されたと考えられる。しかし、写真資料は文書史料とは異なる特性を有し、その基本情報として、以下の4点が挙げられる。

1. 写されている被写体に関する情報
2. 写真自体の物理的特性
3. 付帯資料（装丁や包材など）に関する情報
4. 資料に記された文章情報

本調査では、これらの点を考慮し、新たに目録項目を編成した。その概要は次の通りである。

- ・ID番号：資料の形状に関わらず、各写真に固有の通し番号。
- ・資料名：被写体の概要を示す名称（基本的には旧目録に準拠し、明らかな誤記を訂正）。
- ・技法等：写真の制作技法
- ・寸法：資料外寸および内寸（印画紙・イメージ）（図1、2）
- ・厚み：支持体ガラスの厚み（ガラス板写真に限る）

- ・年代：写真の制作年代（基本的には旧目録に準拠し、明らかな誤記を訂正）
- ・制作者・写真館等：写真の製作者情報（書込情報や印刻を参照し、明らかな誤記を訂正）

さらに、書込情報のうち、資料の概要を把握する上で重要と考えられる事項や、目録の実用性を向上させる情報については、適宜「備考」に記載した。

2-3. 調査方法

本調査では、原本資料の調査と撮影を並行して実施した。これは資料の展開回数を最小限に抑え、限られた調査時間および空間で安全な取り扱いを確保するためである。

写真資料は、一般にデリケートであり、慎重な取り扱いが求められる。本調査に際しては、以下の点に留意した。

[作業環境]

- ・調査室内は粉塵が少なく清潔な状態を維持し、急激な温湿度変化のない環境が望ましい。
- ・調査中は資料の導線上へ人の出入りを極力避ける。
- ・調査と撮影を並行して実施する場合、それぞれの作業に必要な空間を十分に確保するとともに、資料を一時的に安全に置くための作業台を設ける。

[作業者]

- ・資料を取り扱う前に手指を洗い、ニトリルグローブおよびマスクを着用する。
- ・資料を損傷する可能性のある装身具（時計、アクセサリ類など）は着用しない。

原本資料調査では、主に寸法の計測、制作技法の識別、およびコンディションの確認を実施した。

ガラス板写真は、制作時または伝来過程において、革張りや桐箱製の専用外装箱に収納された状態で保管される例が多い。本調査の対象である木村家伝来のガラス板写真も、同様の形態で伝存している。本調査では、資料の安全性および現在の保存状態、ならびに可逆性に十分配慮しつつ、一部の写真原板において装丁を取り外し、外部からでは観察できない内部の劣化状況など、詳細な調査を実施した（写真1）。

一方、「木村喜毅関係古写真」の大部分を占める写真プリント類は、台紙付き写真およびアルバム装丁の2形態で保存されている。ただし、「アルバム1」については、伝来の過程において写真プリントがアルバム本体から剥がされ、現在はアルバムと写真プリントが分離した状態で保管されている。写真プリント類については、現存の状態を維持しつつ、装丁に手を加えることなく、そのままの形で調査を行った。

具体的な調査手順は、次の通りである。

① 資料の状態の確認

収蔵形態から資料を取り出し、調査開始前に劣化や損傷の有無、付帯資料の存在を確認する。

② 装丁の寸法の計測（目録項目：外寸）

装丁の寸法をメジャーで計測する。資料によっては四辺の長さが異なる場合があるため、四辺を測定し、長辺および短辺の最大値を記録する。

ガラス板写真の装丁は、飾り枠や敷布を除外し、外装箱のみを対象として計測を行い、寸法に加えて厚みを記録した。写真プリントについては、台紙や印画紙のサイズなどの外寸（図1、図2）を記録した。なお、アルバム本体には個別のIDを付与していないが、その外寸はアルバムの目録先頭の行に記載した。

③ イメージサイズの計測（目録項目：内寸（印画紙・イメージ））

写真イメージの寸法をメジャーで計測する。装丁の寸法と同様に、四辺の長さが異なる場合があるため、四辺を測定し、長辺および短辺の最大値を記録する。計測の際は、写真画像の表面にメジャーが直接接触しないよう細心の注意を払った。

④ 厚みの計測

ガラス板写真については、測定部がカーボンファイバー製の電子ノギスを用いて支持体ガラスの厚みを計測する。計測部位によって厚みに差異が生じる場合があるため、ガラスの四隅を計測し、最大値を記録する。

ガラスに紙等が貼付されている場合には、それらを避けてガラスのみの厚みを計測した。また、画像層は極めて脆弱であり、乳剤の剥離や損傷のリスクが高いため、計測作業は慎重に行った。

⑤ 制作技法の識別およびコンディションの評価

写真は同一の支持体に形成されていても、その組成が異なる場合が多い。そのため、制作技法の特定は、制作年代の推定や劣化特性の理解、さらには適切な保存方針の策定に資する重要な情報となる。

本調査では、資料に対して非破壊で適用可能な光学的手法（高倍率観察や透過光観察など（写真2））を用いて写真の構造や素材の分析を行い、写真技法の識別および物理的コンディションの評価を実施した。

おわりに

本調査を通じて、「木村喜毅関係古写真」の目録を新たに作成し、写真史学の視点から再検討を行った。近年、写真資料の研究手法が進展するなか、本調査の成果は単なる目録記録の更新にとどまらず、写真資料の分析・活用の基盤の一助となることが期待される。

特に、写真資料に写されたイメージ情報を中核としつつ、写真自体の物理的特徴を含む多面的なデータを収集し、従来の目録では十分に反映されていなかった要素を明確化した点は、本調査の重要な成果の一つである。さらに、高精細撮影によって写真の物理的特徴を可視化し、従来は文字化が困難であった視覚的要素を収録できたことも、本報告の意義を高めるものとなった。

一方、本調査を通じて、写真の制作背景や伝来経緯に関するさらなる研究の必要性も明らかとなった。また、写真資料の劣化や損傷に対する保存処置についても、継続的な検討が求められる。

本プロジェクトでは、今後も本所の基幹事業である歴史学の視点を軸としつつ、写真史学や文化財保存科学などの分野と連携し、学際的な視点を取り入れた調査事業を推進していきたい。特に、写真資料の目録作成における情報の標準化は未だ確立されておらず、関係各位との連携を深めながら、より精度の高い史料整理と研究の発展に努めていく所存である。引き続き、ご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

後註

- 1 横浜開港資料館編 「木村昌之氏寄託 木村芥舟・木村浩吉資料目録」『木村芥舟とその資料 — 旧幕臣の記録』横浜開港資料普及協会、98-114 頁、1988 年 3 月
- 2 ID019-022、027、039-040、042、060-062、341、417-424、438、442



写真1 写真原板を装丁から取り外した状態 (ID009)。左から外箱と敷布、原板、飾り枠、蓋。



写真2 透過光による資料観察 (ID002)。



外寸
(縦 cm × 横 cm)

内寸 (印画紙・イメージ)
(縦 cm × 横 cm)

図1 ID023



外寸
(縦 cm × 横 cm)

内寸 (印画紙・イメージ)
(縦 cm × 横 cm)

図2 ID084

編集

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター古写真研究プロジェクト

プロジェクトメンバー

箱石大

菊地智博

谷昭佳

高山さやか

桑田恵里

高橋則英（共同研究員 / 日本大学）

調査・撮影・データ処理

箱石大 谷昭佳 高山さやか 桑田恵里

翻刻

箱石大 菊地智博

デザイン・レイアウト

高山さやか

本書の刊行にあたり、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 横浜開港資料館より
様々なご協力を賜りました。深く御礼申し上げます。
なお、本研究はJSPS 科研費 23H00654/23K25351 の助成を受けたものです。

東京大学史料編纂所研究成果報告 2024-7

木村喜毅関係古写真資料の調査と研究

2025年3月31日

編集・発行

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター古写真研究プロジェクト

JSPS 科研費：基盤研究（B）

「幕末明治期古写真の調査とその解析・復元・保全を総合的に捉える写真史科学の構築」

(23K25351)

印刷

ヨシダ印刷株式会社



表紙 「木村邸の家族」(ID 080)